〔語釋〕
(一)正頼、「大將殿」又「大いとの」ともあり
(二)仲忠
(三)涼、「源中將」又「源氏中將」
(五)忠澄
(六)王家統
〔考異〕
(四)まうけ―參らせ
(七)二十ばかり―「ばかりナシ」

のごと、大將殿(一)劣らずし給へり。頭中將、銀のいかめしき缶に、七種の御粥入れて、蘇枋の長櫃にするゑて奉れ給へり。源中將又樣かへてまうけ給へり。内裏東宮の殿上人、殘るものなく集ひたり。上達部(三)、親王たち、さながら劣らず。御前のもの、いふばかりなし。碁代二百五十貫おきて、大きなる櫃に入れて出だされたり。上下あはせて二百餘人ばかりあり。上薦は五貫、中薦は三貫、下薦は一貫づつ賜ふ。夜一夜歌ひのゝしりて、みな上達部、親王たちよりはじめ奉りて、清らなる物に御衣御むつき添へてかづけ給ふ。かくて大宮、御膳の緒切り給ふ。左大辨殿の北の方、御乳付、内藏助の御許御湯殿、御文式部大輔。御乳母、三人一人はわかむどほり、二人は大貳のむすめ。御乳付に贈り物、夏冬の御裝束よき衣箱にたゝみ入れて、式部大輔に女のよそひ一くだり、よき馬二つ、牛二つ。

畫詞 こゝは中の大殿。帳立て、あて宮、白き御衾著て臥し給へり。乳母も、白き綾のうちぎ一かさね、白きあやの裳、唐衣著たり。年二十ばかりの人、か

〔語釋〕
(一)赤兒に湯をつかはす
(五)東宮より
〔考異〕
(一)まゐり―まゐる
(三)御むか〳〵湯は―「は」ナシ
(四)かづき―かづけ
(六)宮に―東宮に
(七)あて宮二の宮を產む

たちよし。こゝは、人々の奉れ給へる物ども、いと多かり。人々物食ふ。大宮、女御の君おはす。物まゐり、散米したり。式部大輔文よめり。辨殿の北の方、御乳付にまゐり給へり。左衞門尉弓ひき給へり。こゝは湯殿の所。すけのお許、生絹のうちぎ、湯卷して、湯殿に參る。銀のほとぎするゑて、御湯殿まゐる。御むかへ湯は内侍のすけのおとゞ參り給ふ。これかれ、上達部、親王たち、殿上人こなたにおはす。銀の筒に、碁代の錢入れて積む。上達部のお前には五筒參議、殿上人、五位には三筒、六位などには一筒づつ。これは宮の御使に物かづけたり。人々立ち給へり。しなゞ物かづき給へり。かくて月日經て、宮より切に召しければ十二月ばかりに參り給ひぬ。あくる年の二三月より、又孕み給ひて、男御子うまれ給ひぬ。御產養、さきの同じごとなり。しばしありて、宮に參り給ひぬ。かくて時めき給ふこと限なし。

初秋

一名とばかりの名月
又相撲の節會
又内侍のかみ

梗概

㊀ 兼雅、正頼を訪ふ。力士の噂。女の文の優劣を論ず。二人鶯を射る。㊁ 相撲の節會の準備。㊂ 朱雀院仁壽殿の局にて女御正頼等と物語。相撲の節會の評判。㊃ 正頼夫婦碁擇みの相談。㊄ 仁壽殿の相撲の節會。仲忠琴彈くべき勅を受けてあて宮の局に遣げ入る。捜し出さる。母俊蔭女を迎へ來るべき勅を受く。㊅ 仲忠母を歎きて仁壽殿に伴ひ入る。朱雀院俊蔭女に舊情を訴ふ。俊蔭女琴を彈く。尚侍に任ぜらる。朱雀院璽の光に照して俊蔭女の容姿を見る。賜物。

㊀ 兼雅正頼を訪ふ。力士の噂。女の文の優劣を論ず。二人鶯を射る。

〔語釋〕
(一)正頼邸
(二)兼雅
(五)仲忠
〔考異〕
(三)右大將殿―「殿」ナシ
(四)此處には―うには
(六)ことに―ことなる

かゝる程に、左大將殿(一)の中のおとどに、君だち、上達部、親王たち、數多おはしまして、物聞食しなどして、御物語し給ふほどに、右大將殿(二)(三)、その日御暇にて籠りおはしければ、兼雅「今日内裏へまゐらで籠りものすれば、むづかしう思ほゆるかな。左大將殿へやまうでまし。それは此處にはまさりて、興は思ほえむ。いざ中將三條殿へ」と宣ひて、われも中將(四)も、きよげなる御直衣奉りて、一つ御車に奉る。近き程なればことに所せき御前もなくて、まうで給へり。先づ中將(五)おろして、

〔語釋〕
(四)「ふずく」は粉熟と書く、米の粉などを蜜にて練りて竹の筒に入れて押出したる物なりとぞ
(五)此頃は八月内裏にて相撲の節會あり左右近衛府之を司り豫め使を諸國にやりて相撲を募る

〔考異〕
(一)侍るがむづかしさに―侍るむづかしさに―侍るがむづかしきに
(二)來むと―なむと
(三)乾物―ナシ
(六)ともも―「も」ナシ
(七)者ども―「ども」ナシ
(八)さる…よき―さりつゐてのものども奉りあけかくいとよき

「こよに、今日暇にて籠り侍るがむづかしさになむさふらふ」と聞え給へり。左大將、正頼「正頼も、さなむ思ひ給へむづかりて、其方にも參り來むと思ひ給へつるに、いと畏し」と宣ひて、親王たち、上達部、ひき出で給へり。右大將おりて入り給ふ。みな御座に奉りぬ。かくておほん折敷、更にもいはず、ちどに、銀の土器、くだもの、乾物、いと清らにしてまゐらせ給ふ。北のおとどより客人の御肴、御酒まゐらせ給ふ。それにうちつぎて、ふずくまゐり、御物などまゐらせ給ふ。かくて御物語のついでに、主のおとど、正頼「右の相撲どもはまうで來にたりや。此方のはまうで來ぬかな」兼雅「少しはまうで來にためり。例の年頃まうで上り來る男ども、數おほかるを、今年は數の如くなむまうで來まじき年なめり。まう上りたる限は、こともなき者どもなむある。かたちもいと清げにて、只今の力の盛なる男どもにて、いとよし。なほ仕うまつらむに、少し見所ある年の相撲どもになむある。例のまうで來る男ども、あるは死に、あるは身の病など侍りて、さ

〔考異〕
(一)朱雀の仰せられし也
(二)など―ひと
(三)然るべき相撲は皆上京してある故
(四)事なるを心に―ことなうもなき心に
(五)おぼす―おもはす―おもはすに

るついでのものども奉りあげていとよき」左大將、正頼「左のも、由あるものどもあめり。力つき容面なども、ことなき中にも、今年思ふ所や侍らむ、こともなく心づかひしてなむ、まうで來ためる。この名高き下野の竝則まうで來たり。まづ珍らしきものは、彼の竝則がまうで來たることのみなむある」客人のおとど、兼雅「こなたの伊豫の最手行經がまうで來ぬに、兼雅は思ひ盡きにて侍り」あるじのおとど、正頼「一日も、仁壽殿にて仰せられしは、「すこし由あるわざもしてしがな。同じくば出でたょん節會の、見所ありてもしなしてしがな」と仰せられしを、今年の相撲、かく男どもなど多からねど、然てもありぬべき限あるを、同じくば、御心とどめて御覽ぜさせてしがなと思ひ給ふる」客人の大將のおとど、兼雅「兼雅も、然なむ思う給ふる事なるを、心に然るべき樣なる事をなむ、え思う給へ出でぬ」主のおとど、正頼「言はで思さむに、怪しうはあらじ」右大將、兼雅「されど、言はではえあらぬものになむ」など宣ひて、我もく劣らじとおぼす。御土器度々

〔語釋〕
(一)あて宮の居りしかば
(五)居心地よき也
(七)我と情交ある女で
(八)嵯峨院の女御、齋宮の母、素性知れず

〔考異〕
(一)參りてしは―參りにしは。按「參りては」なるべし
(三)給へしか―給へしかど
(四)侍らぬ―侍らむ
(六)こゝろの―こゝちを

になりて、右大將、兼雅「こゝに參りてしは、昔こそは恥かしう思う給へしか。今は心安かりけり」主のおとど、正頼「今は御後見すべき人やは侍らぬ、然おぼすは」と聞え給ふ。右大將、兼雅「怪しくはた、此處にまうで來るは、さふらひつきたる心地こそすれ」とて、

兼雅たち馴れてやみにし宿を今日見わば古きこゝろの思ほゆるかな

と宣ふ。主のおとど、

正頼やみぬとも思ほえぬかなわが宿は今こそ人のたちも馴らさめ

と宣ひて、御物語むかしの事など聞え給ふ。正頼「世の中の心ゆき、なほをかしきものは、勞ある女の情あるが、物いひ語りなどするが、かの女の如何にせましと思ひ煩へるが、心とどめて書きたる文見るばかり、勞あるものこそなけれ。むかし、嵯峨の帝の御時、承香殿の御息所ばかりの女を見給へぬかな。怪しくめでたかりし人の御心にこそありしか。正頼いまだ中將に侍りし時、かの御息所、

〔語釋〕
(三)正頼の長女
(四)現在やつて居る事をち言ふ譯にはゆかぬが過去の事故話すと也
(五)仁壽殿に懸想せしに

〔考異〕
(一)じめて―そめて
(二)もののあはれなむ思はえぬ―ものなくあはれになむ思はえぬる

内宴のまかなひにあたり給ひて、仁壽殿にさふらひ給ふかたに、透きたる御簾の内におはしますに、打見るほどに、更に魂なくなりて、いかで、些ならんことも聞えてしがなと、思ひわたりしに、如何なる折にかありけむ聞えはじめて、後の後はせめて聞え煩はす程に、思し煩らふにやあらむ、と見えし程の御文見給へしこそ、よにあはれに勞ありしか。正頼が老の世に、その御文賜へりしばかり、似るもののあはれなむ思ほえぬ。終に疎くて止み給ひにしものから、宣ひ放たゝことなどのあれば、頼みまさりて、いとどしく魂のゆくらむ方も知らずこそありしか。然る女の、今の世にあらじはや」右大將、兼雅「今の世の女の、深くありがたき御心は、仁壽殿の女御こそおはしますらめ。この承る承香殿に、更におとらぬ御心なり。兼雅、現にある事ならばこそ、取り申さどらめ、たいぐしき事なれど、むかし聞ゆることありしを、更に宣ひ放たで、頼めとのみあらせつゝ、多くのすきごとを御覽じたるなむ、いと有り難き。今に、いとたまさかに聞えさ

（語釋）
（一）應ぜざる心は
（三）承香殿の文
（七）仲忠
（八）連澄
（考異）
（二）いづら―いづく
（五）と思ふ―「と」衍歟
（四）主の―ナシ
（六）時に―「に」ナシ
（九）この御許―この御文
御許

する時など、おなじ様なるものから、とほき御心は、なほ同じやうなれど、多くのすきごとをなむ御覽ぜられぬる」など申し給ふ。主のおとど、正頼「いで、いづらなりしをか。正頼が童べの中よりは、さる心ある人はあらむ。その承香殿は、いと筋殊なりし人の御心をや」右大將、兼雅「よし。然ば、かの御文はありや。兼雅がもとに、かの女御の君の御文ありしが」と申し給へば、主のおとど、正頼「正頼が許に無からんやは。よろづの事むづかしう、と思ふ時に見給へつゝ、世間のこと忘るゝ文ありかし」右大將、三條殿に、中將して、仁壽殿の女御の御文とりにやり給ふ。主のおとどは、左衛門佐の君して、昔の承香殿の御息所の御文とりにやり給ふ。兼雅「この御許なると、兼雅が許なると較べむに、まづ物賭け給へ」と聞え給へば、おとど、正頼「何を賭くべからむ。正頼、女一人賭けむ。御許には何をか賭け給はむずる」兼雅「兼雅は、侍るにしたがひて、仲忠を賭け侍らむ」なとこれかれ子どもを賭物にて、この御文ども、通はし給ひけり、なかに、勝れてめで

〔語釋〕
(一)「をは」の「を」衍文なるべし
(三)正頼のは
(四)誤あるべし
(六)此文に似よりて優れたる處がなぜなきならん
(七)仁壽殿の文
〔考異〕
(一)擇り出でて―擇り出だし
(五)けつり―けゝり
(八)など―などの
(九)とくばく―とくばく

たきを擇り出でて持ち給へりけるを、右大將殿のをは、(一)銀の透箱のいと清らなるに、敷物などいとめでたし、それに入れて、この殿のは淺香の蠹みなどしたるに(三)あやけつり出しなどしたるに、唐草鳥など彫り透かしてあるに入れて、御覽じく(四)らぶるに、さらに劣り優らず。いと等しく、手、詞、劣り優らず等き時に、主のお(五)とど、正頼「仁壽殿は、うるせき人にこそ有りけれ。昔より後の世までも所謂嵯峨の御時の女御ぞかし。それに、ことに劣らぬ手など走り書きけり。など、正頼が許におこする文、これに覺えたる筋の思ほえぬ」と宣ふ。右大將、「かへりて此の御文は、今めきたる筋など優りたりけり。持なり」と定められて、仲忠をこなた(七)の御賭物に、この殿の持給へる女を彼方にとりて、互に御子どもを取り給ふ。かくて御遊よろづの物の聲かき合せて遊ぶ時に、仲忠きこゆる。仲忠「仲忠、こくばくの箏の御琴など、物にかき合せて仕うまつるなかに、一日、藤壺にて、仕うまつりしばかり、面白きなむ侍らぬ。かの姫君、琵琶合せて遊ばしょ、承りし

〔語釋〕
(一)行政
(二)とくの仲忠の詞誤あるべし
(四)仲忠の箏に於ける如くあて宮は琵琶を決して彈かずと聞けり
(五)琵琶は
(六)あて宮が琵琶を
(七)仲忠の
(八)誤あるべし
〔考異〕
(三)仲忠が―仲忠上手
(九)いて―いてや

に、世間の事こそ思ほえざりしか。只今の琵琶の一は、良少將こそ侍るめれ。それにも合せて、度々仕うまつる時侍れど、えかの手にもいださぬ手をなん、いと珍かに遊ばしょ。怪しがりしかは、をさ〳〵物の音に合せ難くせらるょなむ、世になく仕うまつりしをかくして、仲忠がくるしき手をこそ、になく彈き合せ給ひしか。それを、遊ばす琵琶のあかず覺え侍りしまょに、やんごとなき節會の爲に殘して侍りし手どもを、殘さずなむ仕りし」あるじのおとど、正頼「まことに慮にても、其處にあそばす箏の琴、怪しく、いさょかにても搔き合せ給ひなどもせず、と聞き給へし琵琶なり。さるは女のせんに、うたて憎げなる姿したる物なり。ことに習ふなども見えざりきや。いかでするならん。まことや、その日、ことに薄葉にかきたる文の、御懷より見えしを、切に惜まれしは、誰がぞ。正頼、そればかり見給へまほしき物こそなかりしか。誰がぞ」と宣へは仲忠がいらへ、仲忠「あらず。里より、らうしのものし給ひしなり」主のおとど　正頼「いて、この空言

〈語釋〉
(一)正頼の怪しむは紙の色合などよりいふなれば紙は有合せを用ひしならんと辯ずる也
(二)わざと老人めかして戯れ言ふ也
(五)弓の的なるべし
(七)鳥が射らるゝと悟らばの意歟
(八)正頼自らを戯れていふ也

〈考異〉
(三)給ふに―給ふべく
(四)馬の―馬を
(六)仕うまつちんや―「や」ナシ

なせられそ。なでふ、里よりは、さる樣の御文は奉れ給はむ。心ばへあるべくこそ見えしか。いと著かりきや」仲忠うち笑ひて、仲忠「紙をこそは、取り敢へず侍りけめ。仲忠はさらに、老の世に、空言をなむしらず侍る」おとど、正頼「これを初にて、ならひ給ふにこそはあめれ」など宣へど、言はず。かく遊びくらして、お前に馬槽立てて、御馬どもに秣飼はれなどするに、主のおとど、右大將の君に、馬の奉らまほしく思さるれば、張革たてさせ給ひて、みな君だち、御弓あそばす程に、中島なる五葉に、鶚池より立ちて、三寸ばかりの鮒をくひて降りけるを、主のおとど、正頼「かれ射給へらん人には、この西の馬槽の馬十疋ながら賭けんや」と宣ふ。右大將、兼雅「みな遊ばせ。兼雅も仕うまつらんや」と宣ふ。主のおとど、正頼「待てしばし。見知らば中らぬもの故、鳥立ちなば興醒めなむ。勞ある兵衛尉まづ試みてむや」とて主のおとど、右大將とまづ遊ばす。主のおとどは、西の御厩に、かしこく勞り飼はせ給ふ五尺の鹿毛、九寸の黒といひて、名高き御馬二つ、

〈語釋〉
(二)九てはゞれたり
(三)竿にてさして取るが如くに
(四)正頼の廐の
(五)兼雅の
(六)「そ」衍文なるべし
(七)正頼の
(八)仲忠
(一〇)催馬樂の曲名

〈考異〉
(一)中てむの御心―あてむ心
(九)になく―になう

賭け給ひつ。右大將殿は、鷹屋にすゑていと名高き御鷹二つ、賭け給ひつ。まづ主のおとど遊ばす。これ御本意有りて、この馬奉らんの御心にての事なれば、ことに遊ばし中てむの御心もなくて、たゞ鳥立つまじとばかりの程に心してあそばす。更にもて離れたり。右大將のおとど、おいらかに立ち走り、遊ばすに、さすが如くに、食ひたる魚ごめに射落して池に入りぬ。興ずること限なし。この馬迎へして、御馬賜はり給ふ。その御廐の別當、預り、二人あそびて、牽かせて參る。夜更けて右大將のおとど、この賭物の九寸の黒を引きかさねて、遊びてまかで給ひて、入り給ふ時に、仲忠、殿の御廐の別當あづかり、寄人この馬を舞ひあそびて、かの大將殿の御廐人の手より、遊び取る。さてこの御馬を牽かせてそ參れる別當、あづかりに、になく纏し給ひて宰相中將土器とりて、になく強ひ給ふ。夜一夜「その駒」を遊びあかして、曉がたに、女の裝束一くだり、白張一襲、あはせの褌一くだりづつ賜ふ。かづきてかへり參るに、この殿の御鷹

二つ、殿の鷹飼にする忍させて、かへる御厩の人に添へて奉れ給ふ。左大將殿、正頼「此の御鷹は、今一度わたり給ひて、今一つの鶚落してなむ賜はるべき」とてかへし給ふ。右大將、兼雅「兼雅は、岬(一)のほどより仕うまつり、そなたには、中島のほどより遊ばしょに、の御鷹は」とてなむ奉れ給ふ。大將殿、正頼「情なき(二)やうなり、強ひて奉れは」とて、殿の鷹飼、高麗の樂して、鷹ども遊び取りてかへる鷹飼に、中將君(三)土器とりて、かぎりなく饗し給ひて、ほそなが添へたる女の裝束一よそひ賜ひて、かへし給ひつ。右大將、兼雅「情は飽くまでおはすかし(四)」なと宣ひて、北の方(五)に、左大將殿に參りてありつる樣など、いと委しく語り聞え給ふ。

かゝる程に、左大將殿(六)に左の相撲いと多く參れり。おとど椅子立てて、簀子におはしまして宣ふ、正頼「ことし、右大將殿も、「例よりは心ことに、今年の相撲仕うまつらすべき事なり」なと宣ふと、常よりも勞りてさふらへ。並則斯くまうのぼり

【語釋】
(一)鶚を射し時の事をいふ
(二)強ひてかへし給ふ―て情なき樣なり
(三)祐澄
(四)正頼を褒むる也
(五)俊蔭女
(六)正頼邸
(七)「宣へば歟」
(八)相撲の節會の準備

たれば、例よりまさると覺ゆる年なり。右大將殿も、「並則まうで來たるを」となむ宣ふことのありし。彼方の下野(一)の最手、さきに並則に遇ひたりし行經、まうで來ず。「さりとも、必ずまうで來らむ」となむ宣ひし。さらでも、左には、いとこともなき相撲ども數多あめり。あやしく、例の左右のとあるに軋ろひて、事々しきことあるを、一のにはかうて異の場に出で來なむよからむ」など宣ひて、物いといかめしう、政所(四)より調じて賜ふ。

かくて左大將殿(五)も、兼雅「論なう、今年の相撲は勝む方に、やがて佐(六)たちなどいまする事ありなむを、然る心まうけせむ。來ぬまでも、然患(七)ひたらむに負くるにても、何でふ事かあらむとする。俄にて惡かりなむ。心とどめてし給へや。かづけ物など、多くまうけ給へ」と北の方に聞え給ふ。政所などに、かくの如くつよくとも限なく、清げなる打敷などの事ども、まうけさせ給へり。兼雅「左近(八)の中將たち、はた、勝負せむ程の樂仕うまつらせむこと。勝つものならば、その遊び人ども、

【語釋】
(一)行經は伊豫の最手の由前に見えたり。いづれか誤なるべし
(二)「左」は「右」の誤なるべし
(四)「一のには勝たて」にてはじめには勝たずしての意歟。「かうて」を又「うかて」「うちて」など書けり
(五)右大將殿の誤なり、兼雅なり
(六)相撲の還饗に呼ばれて來る也
(七)來る積りで居れば
(八)「つゝくとも」は「いくつとも」歟
(九)「左近」は「右近」歟

【考異】
(三)左右のとあるに―左右のとりあるに―左大將殿あるに、按「左右とある」に」歟
(一〇)勝つものならば―かづけものなどは

〔語釋〕
(二)仲忠

(四)「左大將」は「右大將」の誤なるべし

〔考異〕
(一)何事をも―「を」ナシ

(三)用意して―かしこきは

相撲人どもは擇び定めてむ」と宣ひて、兼雅―いかで、饗を清らにせむ。何事をも珍らかにせむ」とて、大將たちは、我も〳〵劣らじとなむ思しける。その相撲の節の日、奉りて參り給ふべき御裝束とも、大將のおとどのも、仲忠の中將の爲にも、限なく清らにせさせ給ふ。北の方、きぬ、綾、多に取う出てせさせ奉り給ふ。かくて中將お前に參り給ひて、仲忠「仲忠宮に參らむと思ふを、え參らぬかな」大將のおとど、兼雅「なほ參りて、藤壺にもの申さば、惱ましさは止みなむ」仲忠「かの局には、すこし心してこそ、物は聞えめ。みだり心地のなやましく覺えむまゝに、ひがごと聞えては恥かしからむ」大將、兼雅「中將の用意して、かの君に聞ゆる事のいらへなどせさせ奉るこそうるさけれ」仲忠、「それも更に馴れ聞ゆることもあらじはや」とて參り給ひぬ。

かくて左大將殿も同じごと、この相撲のことを定めらるゝに、右の伊豫の最手まうのぼりたるに、おとどいとかしこく喜び給ふこと限なし。兼雅―今年の相撲に、行

〔語釋〕
(二)此處、誤脫あるべし。「たゞこのごろ相撲の事をのみたの御心なく」と書ける本もあり

(三)前には連澄右近中將たる事見えず、祐澄のあやまりなるべし

〔考異〕
(一)竝則―竝則も

(四)かたち人ち―人々ち

經まうで來ざらましかば、左の竝則まうで來たるに、はじめ、行經、竝則こそは定まりにしか。それらまうで來ぬかとて、いとくちをしかりつるに、嬉しくまう上りたり」など仰せらる。

畫詞　伊豫の最手、贄奉り蘇枋、沈など奉れり。相撲どもなどにも持たす。左大將殿には、仁壽殿、藤壺の御裝束のことし給ふ。これは、右大將殿に馬奉り給ふ。こゝは相撲人らあり。

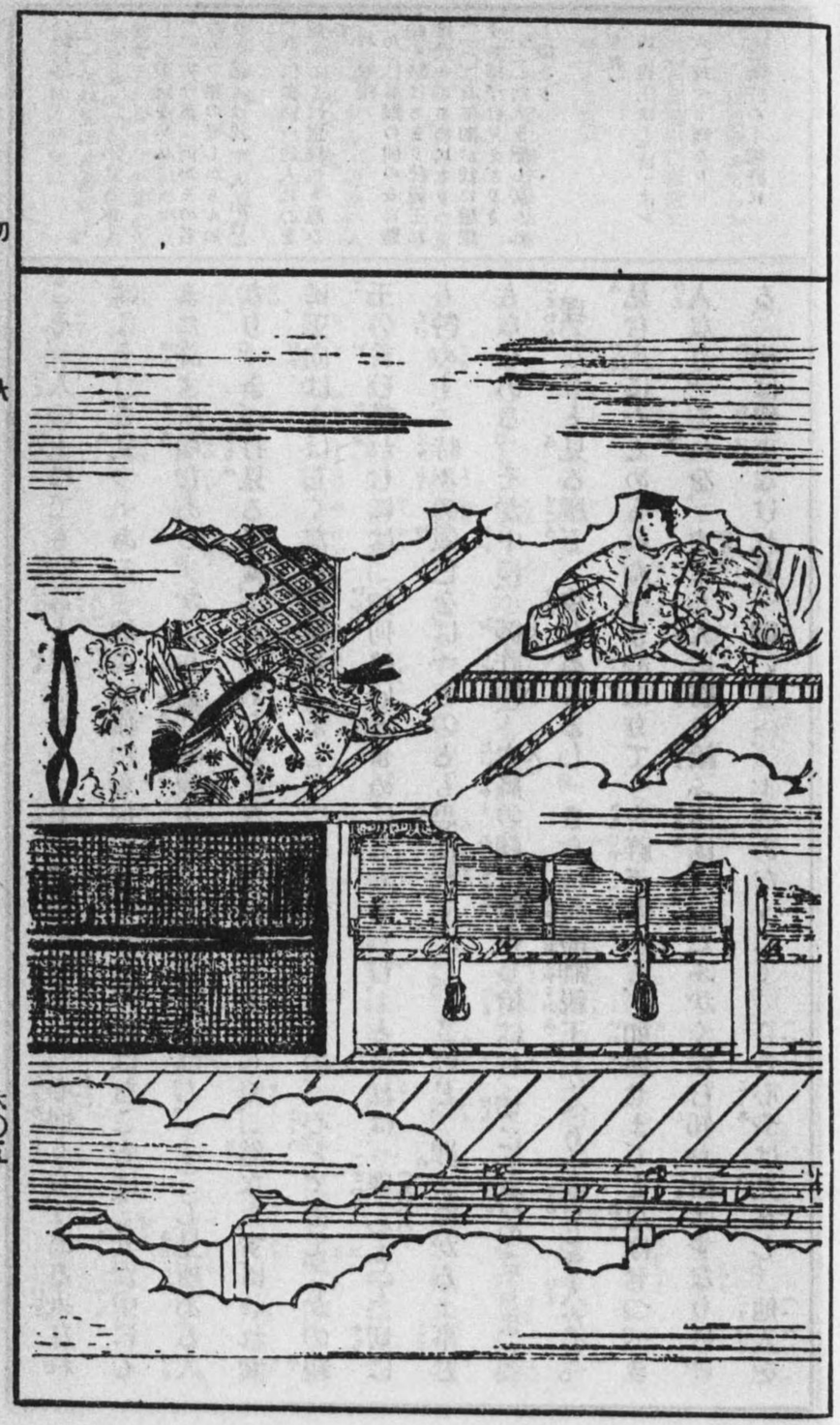
その日頃は、左右の近衞の大將中將、たゞこのごろ相撲のことをのみにてたの御心なく、日の近くなるまゝに、いそぎて日々に參り給ひ、そのこと定められなどす。右近中將連澄、頭かけたり。平の維蔭、平中納言殿の太郎、元輔の君、權少將に藤原仲政。名高きかたち人ら多なり。左近には、仲忠、涼、二人ながら宰相にて中將なり。少將に行政、左大臣殿の三郎、成清、村方など、名高き人々なむ、その頃の左近中將にはものし給ひける。

㊂ 朱雀院仁壽殿の局にて女御正頼等と物語。相撲の御會の評判

〔語釋〕
(一)懷胎
(二)古今「夏蟲のみをいたづらになす事も一つ思ひによりてなりけり」
(四)仁壽殿を挑む人多き樣なり

〔考異〕
(一)かくて―ナシ
(五)人あまたものすなり―さる人あまたものせすなりにし―さる人あまたものせすなりにしものし給ちん。控「ものし給ちん」は「ものから」脉
(六)御心地も―「も」ナシ
(七)いら―ナシ

かくて七月朔日、内裏の帝、仁壽殿の大將の御息所の御局にわたり給ひて、朱雀「なぜか、昨夜藏人奉りたりしかど、まうのぼり給はずなりにし。あやにく、日頃たびくむかへ人をかへし給ふかな。もし思し怨ずることやある。あないとほし」御息所、「怨じ聞えさすべきことや侍らむ。まめやかには、日頃、暑氣にや侍らむ、あやしく惱ましく思ひ給へられてなむ、まうのぼり侍らぬ」朱雀「それこそは、まう上り給はど、さも思されざらめ。まこと、何でふ惱ましきぞ。もし例の(二)ことか」「あな見苦し。今は夜離をもよしとこそ思ほすらめと思へど「夏蟲の」(三)と いふこともありや」朱雀「まことに此頃は人あまたものすなり。あはれ、習はぬ御心地も思ほさるらむ。それをなむたど今聞きわづらふ。いらへ、仁壽「誰にか負せられんとすらむ。怪しや。いまだ負せむやはある」上、朱雀「あじきなの相盜人や」いらへ、仁壽「更にこそ知り給へね。げに何事ならむ」朱雀「げに知り給はずや。つれなくなものせられそ。斯く宣はんからに、右大將疑はむ」御息所、「ましてこれ



〔語釋〕
(一)「思はえね」なるべし、「おぼえぬ」とかける本もあり
(二)兼雅をいふ
(三)古今集「何かその名の立つ事の惜しからん知りて惑ふは我一人かは」
(五)仁壽殿の此人に心を惹かるゝは道理也と思ひて
(八)兼雅
(九)仁壽殿の他の女に勝れる點はあまり此親王に接近せざる所にあり
(一〇)兵部卿が我に懸想する樣子は見えざりき
(一一)他人を戀し居られし樣なり

〔考異〕
(四)親王は—「は」ナシ
(六)理や—理なり
(七)御許の—御許に

こそ、人の上にても空言と思ほえぬ」上、赤雀「あやしう、心憎くらうある人なればこそ、さ見つゝある。他人は難からむかし。知りて惑はむことは、其が中にもまた許す所なむある。かの兵部卿親王は、同胞ともいはじ、すこし見所ある人なり。まづ打見るにも、かの君を女になして持たらまほしく、然ならずばわれ女にて向はまほしくなむ見ゆる。まして、少し情あらむ女の、心とどめて、かの親王の言ひ戯れむには、如何はいとまめにしもあらむ、と見れば、理やとて、切にも咎めず、時々の氣色をば、一ものとも思はれずかし。されど、罪まぬかるゝ事ともなむある。そが中に、御許の、大將の朝臣剛らし給はむ、切にも咎めざらまし。理なりと見る所ぞ、少しあらまし。さらに兵部卿親王、かへりて苦しき人なり。見む人に心とめられぬべき心ありて、吉祥天女にも、如何せましと思はせつべき人なり。それを、すこし人に勝り給ふ所は、いとふかくなむ知り給はずなりにける、後は覺束なけれど」御いらへ、仁壽「あなうたて。さる心やは見えし。他人を

〔語釋〕
(一)此處誤脫あらんか
(二)兵部卿が仁壽殿に
(三)あて宮が
(四)あて宮に懸想せぬ者はなかりき
(五)正頼に貴緣なきの意歟
(六)あて宮を不思議の人なりと思ひし也
(七)仲忠さへ其の氣ならば
(八)あて宮が仲忠の繼に應ずに居る所が惑心なりと也、「如何に」重復せり一つは衍文なるべし
(九)仲忠の懸想は

こそ物せらるめりしか。斯う宣ふからに、いとあしからむ。たゞ、言ひしが見所ありしかば、たゞ文走り書きたるが、心ある樣なりしかば、あはれなど思ひし」なと聞え給ふ。朱雀「空言を宣ふにこそ。さらば疑ひ聞えん。なでふ空言にかあらむ、時々もの聞え、今も有めるは」と宣ふ。御息所「いざや。さ思はるゝ心やありけむなど、著く見ゆることも無かりし。この東宮にさふらふが、まだ里に侍りし時こそ、然思ふこともやあらむ、と見給へしか」と聞え給ふ。「それはた、然かし。いづれの世界にか、男とあるが、彼處には言はぬが無かりし。まつはりなき致仕の大臣、高基の朝臣さへ、言ふことありけむかし。これになむ驚きにし、怪しくものせらるゝ人なりけりとは。そが中になむ、いと切にいふ人々ありと聞きかし。仲忠は、天下にめづらしき心あらむ女も、彼だにすこし氣色あらば、忍ぶまじき人ぞかし。それを如何に餘所に見ては、如何にあらむ、と思ふなむ、いと心憎くありがたき御心と、いよ〳〵思ほゆる。今もなほその心失すまじかし」

〔語釋〕
(一)吹上の下巻には「涼にはあてこそ、仲忠にはそこ一の内親王物せらるるを、それを賜ふと仰せちる」とあり
(二)正頼に
(三)仲忠が
(四)正頼が心を變へてあて宮を東宮へ奉りたれば仲忠が如何に思ふならむ
(五)あて宮の妹、あて宮に次ぎての佳人
(六)仲忠に勝る人はあらじ
(七)仲忠をはめていふ也
(八)仲忠は
(九)仲忠は

〔考異〕
(一)いと―ナシ

いらへ、仁壽「さるは彼のあてこそも、見る所やありけむ、他人よりは、返事いとせま憂くは思ひたらざりしを、かの仲忠も、然もや見けむ、いとあはれと思ひぬべきこと多くすめりしかど、まめやかには思はで止みぬめりき」上、朱雀「哀なることかな。かの中に通はされけむ文、いかに興ありけむ。かれを見ばや。涼の朝臣の吹上の濱にものしたりし時に、仲忠いと切に勞ありしかば、「なほあてこそは仲忠に取らせ給へ」と、大將にものする事ありしを、いと切に喜びいふことありしかば、必ずとらせ給はむやと思ひしを、志(五)異なりければ、かく異なるを、如何に思ふらむ。天子空言せず、といふことは、無き世なりけり、とこそは思ふらめ。あやしく、心憎き所ありて、恥かしと思ふ人に、空言すと思ほゆるなむいとほしき。その今宮をやは取らせ給はぬ。天下にいふとも、え勝ることあらじ。あやしく、見るに心ゆく心地して、世間の事忘るゝ人になむある。涼の朝臣、えこそ等しからね。なほ彼は彼として、これは心殊になむある。まだ位なむ心もとなき。それは、

〔語釋〕
(一)「如何に」は「いかど」なるべし
(二)迫りて問はるゝ故意見を述ぶる也。今宮を仲忠に妻せたりとも不似合なりとの謗はあるまじけれど仲忠未位卑しければ彼が昇進を待ちたしと也「こゝには」は「さらば」の誤なるべし
(三)「ものをかくよき」歟、「ものからかくよき」とかける本もあり
(四)「あらむやは」歟
(五)仲忠の地位をいふ
(七)今宮を仲忠にやる事に極めよ
(八)俊蔭の巻にある仲忠の空洞の生活
(九)仲忠を
(一〇)「すぐれたれば」歟

〔考異〕
(六)世の人には劣らじ―世に人にはふとさと

な思しそ。然らばえもどき宣ふことあらじな」御息所、仁壽「如何に此處には、と(一)もかくも思ひ給へむ。萬のこと、宣はせむにこそは」御いらへ、朱雀「されど、其處に許し給はどとこそ」いらへ、仁壽「こゝには聞えさせむ。何かは、然てあらむに、人などは、似げなくなど言ふことは無くやあらむ、など思ひ給ふれど、位などまだ高き人にもあらねば、なほ暫しはかくてものし給へ、となむ思ひ給ふる」帝、朱雀「などてか、女のたどにて盛過すことのあらむ。然るべき人なくてある時にだにあぢきなきもの、かくよき人を見ては、さて過すことのあらむ。位は、な思ほしそ。まだ年わかき人なり。罪はまぬがれなむ。その程はた、世の人には劣らじ。なほ、然思ほしたれ。世に謗られはあらじ」いらへ、仁壽「いでや。えぞ思ひ給へさだめぬや」朱雀「空洞をおぼし出づるにやありけむ。あなさがな。世にもどきあらむことは聞えじ。なほ然思したれ。こよなき位にしなしてむ。たゞ今のみめよりも、斯く具したる才に、かたち心などもすぐれば、たゞ今より覺えまさ

〔語釋〕
(一)退出を御許しあらば里にて熟考の上申上ぐべし
(二)正頼邸では仲忠を誘るものはあるまじ
(三)線の中は他の所の文の攙入せるなるべし
(四)仁壽殿の御局
(五)「物語などし給ふ上東宮に久しく」歟。こゝに東宮突然出でたり　上に脱文ありと見ゆ
〔考異〕
(六)してしがあそむ―してしが〳〵なむ―してしかなむ〳〵
(七)物は―「は」ナシ

りなむ」御息所、「仁壽「今よく思ひ給へ定めてを、里になどゆるし申されば」上、朱雀「その御里こそ、世にそしり給はざらめ。さては頼もしかなり」など聞え給ふ。御臺四つたてて、晝の御物きこしめす。

「まかなひにもわたらせ給へりき。からうじてこの頃なむすこし怠りて侍る」うへ、「いとおしきこと。更になむ知らざりける。如何にあやしき心と人々思ひけむ。空言なむいとあしき事なる、いかゞ人のたゆまさるらめ」など宣ふ。

かゝる程に上達部親王たちなど仁壽殿に參り給ふ。殿上人さふらふ限まゐれり。左大將三條院より御菓物御酒などとり寄せて、その御局に多くの上達部親王たちなどおはしまして、御酒まゐりなどして、御物語、上も東宮も、朱雀「久しくよしあるわざせず。やう〳〵風涼しく、時もはたをかしき程になりゆくを、世間のことも忘れ、心の中ゆくばかりの事も、この秋してしが。あそむさだめ給へ。人の歡といふ物はかなきものになむ。命あらむ限こそ、あらむことを見つゝもあ

〔語釋〕
(一)累代の例にもしたし
(二)吹上下卷にあり菊の
(一〇)歴を過ぎたる菓物
(一二)次第に上りて面白くもありの意歟
〔考異〕
(三)勞あり―勞ありて―勞あれど
(四)ありて―「て」ナシ
(五)さて―ナシ
(六)時鳥の―「の」ナシ
(七)さみだれたる頃はひのつとめて―さみだれたる頃はひの同じ日のつとめて―さみだれたる頃同じ日のつとめて
(八)騒き―ふき
(九)はつか―わつか
(一一)などの―「の」ナシ

らめ」と宣ふ。東宮、「げに、おなじくば出で來ん節會どもを、なほ御時の珍らしき、累代にもしてしがな。かの吹上の九日、すこしよしある九日にはなりけむ。又さやうならむこと侍らば、よからむかし。年の内、出で來る節會の中に、いづれいと切に勞ある、定め申されよや」大將、正頼「年の内の節會どもはいづれも勞あり。朝拜などきこしめす時は、いと面白く、内宴をきこしめすもいと勞ありて面白し。三月の節會は、花とく咲く時はいと勞あるほどなり。さて、なほことなる花などは咲かぬ程なれども、怪しくなまめきて哀に思ほゆるは、五月五日なむある。短き夜の程なく明くる曉に、時鳥のほのかに聲うちし、さみだれたる頃ほひのつとめて、菖蒲所々にうち騒きたる、香のほのかにしたるなむ、怪しく興まさりて思ほゆる。菓物などの盛にはあらぬ程なれど、はつかに時過ぎたる物などのあるなむ、いと勞ある。節供などきこしめす時はた、更にも增すものなし。七月七日、をかしうはあれど、殊なる面白きことは無くなむある。彼もありさまに

なむ。九日も、吹上を思う給ふれば、いとこそ勞あれ。それより後は、五日に(一)は劣るとなむ思う給へらるゝ」上、朱雀「いとよう定め給ふなり。思ひし如なり。さらに年の内の節會(二)ども見るに、五月五日にます節會(三)なしとなむ思ふ。花橘、柑子などいふものは、時過ぎて古りにたるも珍らしきもの、ひとつに交るなむいとをかしき。そこに勝すもの無くなむ。節する時の馬弓、競馬(四)も、さらに見所なしかし」など笑ひ給ふ。

かく御物語し給ふほどに、七月十日ばかりのほどの夕日影なほいと暑さ盛なり。風なども吹かずあるに、人々、「すこし涼しう、風も吹き出でなむ。さるは、けふ秋立つ日にこそあれ。著く見ゆる風吹けや」など上達部宣ふほどに、夕影になりゆくまゝに、めづらしき風吹き出づる時に上斯くぞ出だし給ふ、

朱雀　珍しく(六)吹きいづる風の涼しきはけふ初秋と告ぐるなるべし

と宣ふ。御息所、御簾の内ながら、仁壽「げに例よりも今日は」とて、

(考異)
(一)五日には―五月に
(二)節會ども―節會―節供ども
(三)ます―まさる
(四)ひとつに―ひとへに。按「珍らしきもひとつに」歟
(五)いと―ナシ
(六)まゝに―ナシ
(七)上―ナシ

仁壽いつとても秋のけしきは見すれども風こそけふは深く知らすれと聞え給へば、上うち笑ひ給ひて、朱雀「されどまだ外にぞ侍る。立ちながら内にも入らぬ初秋をふかく知らする風ぞあやしきそよと聞ゆる風なかりや」と宣ふ。左大將、正頼「それも如何」とて、(二)

正頼外にたつと頼みしもせじあだ人の秋はいでても過ぐといふなりと聞え給ふ。かくて其處にて日暮れぬ。上、帝わたり給ふとて、御息所に、(三)朱雀「今宵だにまうのぼり給へ。例の御むかへ(四)奉らば、還し給はむものをや。いざ諸共に」とて立ち給へり。御息所、仁壽「これも還しやすき御使になむ」と聞え給ひて、仁壽「まことは何かは」とて、

仁壽「夏だにも衣へだてて過ぎにしを何しもあきの風をいとはむ「おのれつらくて」とはこれをや言ふ。あなかま」と聞え給ふ。朱雀「例のかへし給ふなよ。よし、さらば自らもよ」とてわたり給ひぬ。かくて上達部、みな御ともに

(語釋)
(六)迎への使を

(考異)
(一)うち—ナシ
(二)そよと—そこに
(三)所に—所を
(四)御むかへ—御むかへに
(六)をや言ふ—をやはいふ

参り給ふ。上より藏人御ともに奉れ給へり。女御まうのぼり給ひぬ。

畫詞　こよは御息所、上などおはします。大將の君、御子ひき連れて三條殿(一)へかへり給ふ。

右大將は、宰相の中將もろともに、殿へ歸り給ひぬ。こと人は、あるは宿直にさふらひ給ふもあり、里にまかで給ふもあり、左大將の君(四)もまかで給ふ。御聟も御子どもも北の大殿におくり奉り給ひてなむ、彼方此方へおはしましける。

正頼「物語し給へりける程に、上、仁壽殿にわたり給ひて、「此處になむものする。し(五)か仕うまつれ」とおほせ有りつれば、又そこに參りて、御物語など聞えさせつるほどに、夜更くるも知らずなりにけりや」宮、女(六)「いかに藤壺には何事かものし給ふ」おとど、正頼「上、局に物せられける。殊なる事もものせられざめり。例の遊をなむせられつる。つかさの宰相(七)の中將、御簾のもとにて箏の琴仕うまつりつ。あてこそは、琵琶をなむ少し搔き合せらるゝなりつる。こよに物せられしよりも、少し

(圖)正頼夫婦琴撰みの相談

(語釋)
(二)兼雅
(三)仲忠
(四)正頼
(五)此上脱文あるべし
(六)「垣下仕れ」歟「しか」を「しる」とかける本もあり
(七)仲忠

(考異)
(一)三條殿—三條院

〔語釋〕
(一)仲忠をいふ
(二)あて宮に對して
(四)以下仲忠のあて宮に對する態度
(七)仲忠があて宮に文を通はす事は今もあるべし
(八)樂歟
(一一)あて宮が返事するをやかましくは言はれぬ樣なり

〔考異〕
(三)見えつる見なしにやあちむ―見なしにやあちむ見えつる
(五)見えつゝ―見えつる
(六)戀しき―「き」ナシ
(九)手の―ナシ
(一〇)見えつるを―「を」ナシ

勝りにけり。さる逸物の中將に劣らぬ聲にかき合せなどするに、更にもどかしからずや」宮、女二「如何に、かの中將の思ふらむ氣色は、如何ある」おとど、正頼「それをなむ見給へつる。少ししづ心なき氣色なむ見えつる。見なしにやあらむ」宮、女二「あはれと聞く人の心にこそありしか。いと切に思ひたるものから、更にあはれなる氣色は見えず、さりともはた、然思ふらむとは見えつゝ、同じう走しりかきたる文の、おいらかに人見るともかたはにもあらず、流石にいと哀に見えしなり。いと戀しき宰相の中將の文、いと久しく見えねば、思ひ出でられていと戀しくなむ」おとど、正頼「今もかしこには絶ゆまじかめり。今日も見給へつれば、御前にきやう仕うまつるとてさふらはれつるに、こともなく走しり書いたる手の、薄葉に書きたる、懷よりすでに見えつるを、見せよやと戲れ心に乞ひつれど、笑ひて出ださずなりぬ。なほ氣色ある文にやあらむ。東宮はた、仲忠今も昔もさる心あなりと聞召したれば、返事せられなどするをば、切に宣ふまじかめり。理と許された

〔語釋〕
(一)妙にしたし
(二)第十女今宮を仲忠にやりたしと思へど
(四)我が聖にせんと思ふと也
(五)我娘を涼にやちんと思へど
(六)「そう」一本「ろう」いづれにても解しがたし
(七)涼
(九)今宮をでも貰ひたしと
(一〇)今宮をやりたらば
(一三)涼仲忠の二人
(一四)二人の中一人は我が聖にせんと

〔考異〕
(三)あるなり―ありや
(八)けをとるは―けふおとるは―けふはをとるは
(一一)勞―ナシ
(一二)人この―人のこの

るこそは、この中將はいとかしこけれ」など宣ふ。宮、女二「いで、この中將、この中に入れてしがな」正頼「今こそをこそは、然思ひ侍れど、上、仰せらるゝこととある涼にと思へど、そうの源氏なり。同くば仲忠をとなむ思ふ」と、たびくかの吹上の九日にも、仰せられありき」女二「さば源中將も、仲忠の朝臣にいづこかは劣れる。更に劣りまさりたる事なき人にこそあなれ」おとど、正頼「源中將は、勢こよなく勝りたなり。さりともけをとるは、人柄はいと等しきを、心恥かしげさと才とは、藤の中將はなほ勝りたらむ。正頼が思ふは、あてこそに心ありし人々、これをだにと、兵部卿親王、右大將宣ふを、源中將にものしたらば、勢によりものしたるにや、と思はれむなむいとほしき。正頼は、更に勢もとめ侍るにあらず。たゞ此の世に幾多、容面、勞ある人のなかにも、勝れたる人、この二人こそはあれ、これ一人は、と思ふ本意なむある、仲忠の中將をば、斯く仰せらるめれば」

〔語釋〕
(一)我が一門以外に出づる事はなからんと思へど
(四)誤なちんか
(五)我が聖に相應なりとは思はれずとの意歟
(七)「覺えね」なるべし
(八)妻の里で世話をやきて
(九)世話やく餘地なくして
(一一)涼をはむる也
(一二)仲忠を今宮の夫にと思ひしかど帝の仰ありし故涼にしたりと公表すべし「頭」は「藤」なるべし
(一三)「ちるれば」なるべし
(一四)「頭」は「藤」なるべし

〔考異〕
(一二)藤中將—藤の中將
(三)一人子—ひとつ子
(六)ふさひには—ふさいに
(一〇)勞り—勞る

宮、女二「仲忠をば、誰にか上は仰せらるらむ」おとど、正頼「いさや。誰にと思すにかあらむ。思すことありと仰せらるれば、それもこの筋は離れじ、とこそ思ゆれど、なほ正頼は、この藤中將こそいとほしけれ。世の常の人にもあらず、めでたき公卿の一人子にて、萬のこと心もとなからぬ、此世の人の限なくあらまほしきにな(三)(一)(二)む。源中將は、いと目もあやに、ひとつものなりと見ればこそ　ふさひには覺え(四)(五)(六)(七)ぬ、必ず人々思ふ所あらむと思へば。人の聟といふものは、若き人などをば、本家の勞はりなどして立つるをこそは、面白き事にはすれ。勞り所もなくて、本家(八)(九)(一〇)の恥かしく物せらるゝなむものしき。さるは、いと見所ある人にこそあれ。この二人の人見る時にこそ、眼五つ六つはほしけれ」と宣ふ。宮、女二「それは、頭中將を(一一)(一二)と思ひしかど、然ればなりと人には知らせむかし」おとど、正頼「人のことには、然仰せられればなむとは如何語らむ」女二「いざや、如何せまし。この今こそを、あて宮の御代にと、人々宣ふこそ苦しけれ。ちひさくより、頭中將の爲にと、勞はり(一三)(一四)

〔語釋〕
(一)第十三女、女一腹
(二)第十四女、女一腹
(五)正頼の娘ども
(七)あて宮
(九)げす宮

〔考異〕
(三)こそは—「は」ナシ
(四)見給はむに—見たろばむに
(六)けしうもあらず—人にも似ず
(八)には少し氣劣り—にをかしげ劣り

生したるものを」正頼「さて此のそでこそ、げすこそをば、如何すべき」女二「それを、兵部卿親王、右大將殿にはとこそは思へど、いとどいみじう思ひ給へる、仲(一)(二)(三)忠の中將の母あるを如何にせむ」おとど、正頼「いづれを如何にすべきことぞや」女二「なほ見るに、そでこそは、右大將の見給はむにこそは善からめ」おとど、正頼「かしこうも宣ひ合せけるかな。そでこそは、いとよく、容貌も心も右大將にこそ作りあはせたれ。げすこそはいといかめしくて、好たる所こそあめれ」と宣ふ。宮、女二「この人々いづれかはいと見るかひなく物しくはある。そが中に今こそはけしうもあらずこそは生ひ出でたれど、なほ藤壺には少し氣劣りたるをや。あてこそは、怪しく、こゝ彼處ともなく、おし(四)(五)(六)(七)(八)なべて目やすくこそものし給へ」など聞え給ふ。

畫詞　こゝは左大將殿、宮、もの聞食しつゝおはします。君だち皆おはす。仲の大殿には、十四の君よりはじめ、あなたの御腹の若君、みなわたりて涼み給(九)

ふ。こよは大將殿、宮などおはします。國々より絹いとおほく持て參れり。かくて宮、おとど、國々より參れるきぬ御覽じて、女二「相撲の節に仁壽殿、藤壺の御裝束、いかで清らにして奉らむ」おとど、正頼「論なう、御まかなひにこそ染めたち給へ。さるは心して善くせられたらむぞ善からむ」女二「御裳などは摺らせたり。唐の御衣どもぞまだせぬ」など宣ふ。大殿の其の日奉るべき御衣のこと、御たち二十人ばかり、薄色の裳著てあり。うなゐども多なり。唐の御衣など染めさせ給ふ。御紅ぞめは、擣物などせし所の別當、大貳お許、くら人より下仕などあり、いみじく物染めさわぐ。政所に家司たちいと多く著きたり。如何にぞ。御ほにどもは、例の數さふらふや」義則いふ、「御ほには、早稲の米を仰せ遣はせにけむ。今年は、早稲の米いとおそき年なり」と言ふ。かくて相撲の節明日になりて、内裏にいとかしこく、賄にあたり給へる御息所、更衣たち、皆まうのぼり給ふべきことを思しつゝ手つくしたる御化粧をしおはし

（語釋）
（一）「かくて」衍文歟
（二）女一の手にて染めも敕ちもするなちんの意歟
（五）脫文あるべし
（六）「大貳のおもと」歟
（七）誤あるべし
（一一）左近少將、正則の家令
（考異）
（三）こそ染めたち―ことどとくそめたち
（四）宣ふ―宣はす―宣はせまた―宣はすまた
（八）いと―ナシ
（九）御ほに―御ぞ―御はて
（一〇）は―ナシ
（一二）仰せ遣はせにけむ―仰せにつかはせてけむ―仰せにつかはせうけむ
㊐ 仁壽殿の相撲の節會。仲忠琴彈くべき勅を受けてあて宮の局に遣け入る。搜し出さる。母俊蔭女を迎へ來るべき勅を受く

ます。その相撲の日に、仁壽殿にてなむ聞食しける。その日、朝の御まかなひには、仁壽殿の女御、晝の御まかなひには承香殿の女御、夜さりの御まかなひには式部卿の宮の女御、更衣十人、色ゆるされ給へるかぎり、色を盡して奉れり。更衣たち、皆日のよそひし、天の下の珍らしき綾の紋を、奉りつくし、御息所たち、まかなひ仕うまつり給はぬは、うなゐにてなむさふらひ給ひける。藏人もみな、今の帝の盛にものし給へば、この御時の藏人は、やんごとなき人の女ども、あるは五節の藏人、雜役仕うまつる藏人も、さらに劣らぬ容貌劣らぬ品の者どもにて、髮揚げ裝束したる樣も、いとめでたし。十四人の藏人、七人は五節の召の藏人七人は雜役の藏人なり。あるはかうぶり賜はりて、命婦、色許されたる三人、内侍たち、許されぬもいとめでたくあり。すべて、彼處に仕うまつるべき女、かたちども仁壽殿にさふらふべき用意してあり。左右近衛大將よりはじめて、萬の天の下の人、まゐり集り給ふ。左右近衛の樂人、おりとゝのへてさふらふ。面白きこ

（語釋）
（二）晝間の服裝
（四）女藏人なるべし
（六）五節の舞姫に上りてやがて見留められて女藏人をつとむる女なるべし
（七）「賜はりたる命婦色」「ゆるされたる上人内侍たち」歟
（八）禁色とて勅許なくては著られぬ色の衣を用ふることを許されたる
（一〇）誤あるべし
（考異）
（一）「聞食しける」―下に「内宴恩ひたがへたるなるべし」の一句あり
（三）よそひし―よそひして
（五）劣らぬ品―さらに劣らぬ品
（九）色―上

と限なし。皆相撲の裝束し、瓢花插頭など、いと珍らかなる事どもしつゝ、左右近衛の幄打ちつゝさふらふ。限なく清らなる御かたちども、まして御裝束奉りて、みな其の日、男女、二藍をなむ奉りける。

かくて其の日の御まかなひども、御息所たち、一の女御、大將殿の仁壽殿、式部卿の宮の女御なり。これたゞ今、時の女御なり。仁壽殿の女御、朝の御まかなひに出で給ふ。更に本性の御かたち、此の御息所に似たるなし。花紋繚に唐綾かさねたる摺裳、搔練のうちぎ、あか色に二藍がさねの唐の御衣奉りてさふらひ給ふ。帝そこばくの人に御覽じくらべ給ふに、この御息所にかよひて見え給ふなし。帝、この御息所を右大將聞え給ふことありき、今も忘れ給ふまじ、と思して、さては如何あるべきと御覽じくらべて、内外に御目をくばりて御覽じおはしますに、いづれもこともなき男女にてある時に、上おぼす、この女御と大將と、さてあらむに、無かるまじき中にこそありけれ、これを同じく、勞あらん所にするゑて、

〔語釋〕
(一)「瓢花のかざし」なるべし、江次第に見えたり
(二)此邊の文錯誤あるべし
(五)似て見ゆる女なし
(六)以下朱雀の心
(七)兼雅が思想せし事ありき
(八)此二人を夫婦にしたちば如何ならんと
(九)以下朱雀の心
(一〇)夫婦で居ても似合の中なるべし
〔考異〕
(三)帝―ナシ
(四)そこばく―そくばく
(一一)同じく―おなじ所に

〔語釋〕
(二)「見」衍文歟
(四)兼雅が
(五)朱雀の心
(六)兼雅と女御との心
(八)女郎花は女御露は兼雅を喩へたり
(一〇)承香殿に心ある也

〔考異〕
(一)事語らはせむに―わざをせむに
(三)ますに―「に」ナシ
(七)さし―ナシ
(九)とかき給ひて―ナシ
(一一)知らず聞えにかくなむ―知らず聞えにくゝなむとて

情あらむ草木、花ざかりにも、紅葉ざかりにもあれ、見所あらむ所の夕暮などありて　行く先を言ひ契り、ふかき心言ひ契らせ、かたみに哀ならむことを心留めてうち言はせ、をかしき事語らはせむに、怪しうはあらじ、なほ聞き見む人、目とどめ、耳とどめ見ざらむやはと見えし、さて在らせて聞かばや、など思しつつ、守りおはしますに、賄うちしなどし給ふにも、いと勞々しう、まことに大將の相撲の事などおこなひ給ふにも、いと心深きらうの見ゆれば、あやしく似たる人の心樣にもあるかな、と御覽じて、御前に、いと面白き女郎花の花のあるに付けて、外にさし出だし給ふ。

朱雀　うすくこく色づく野べの女郎花植ゑてや見まし露のこゝろを

と書き給ひて、朱雀「これが心、見解き給ふ人ありや」とてうち出だし給へば、兵部卿親王、とりて御覽じて、心得たまはず。されど御心にも思すことありければ、知らず聞えに斯くなむ、

〔語釋〕
(一)七群か
(二)男は誰も仁壽殿に心なきものはあちじの意
(三)仁壽殿に對する戀は
(六)正頼の心
(八)帝に終身仕へよの意
(九)「かく」は「ちかく」の誤歟
(一〇)帝の御歌の意を推量して

〔考異〕
(四)人知れぬ―人知れず
―人知らぬ
(五)思し〻―思す
(七)所や―「や」ナシ
(一一)植ゑてや―植ゑてば
(一二)おはしますに―もはしまます

兵部　籬よりなよむらにほふ女郎花野べはいづれもさもや待つらむ

と書きて、右大將のおとどに奉り給ふ。されど人知れぬ心一つに思しょことなれば、上に氣色御覽じたらむも知り給はねば、何でふ心ならむ、と思しながら、

兼雅　女郎花いやしき野べにうつるともよもぎはたかき君にこそせめ

とて、左大將のおとどに奉り給ふ。あやしく、只今の御まかなひには、我が御息所こそさふらひ給へ、その折にしもかく宣ふは、思す所やあらん、とて、

正頼　二葉より野べには植ゑぬ女郎花まがきながらを老のよは經ょ

とて、仲忠の宰相中將のかくさふらふに取らす。仲忠、うち見るすなはち、勞の深きあまりに、思ひ寄りてかく書きつく、

仲忠　撫子をならべておほす女郎花植ゑてや花の親とたのまむ

と書きて參る。上御覽じて、いろ〻に心を御覽じ解きておはしますに、兵部卿親王、承香殿を思したり。右大將のを御覽じて、怪しく心得たることをも宣ひた

〔語釋〕
(一)申上げたる事は丸てはづれても居るまじ
(二)「そちおぼれする」歟
(三)此處誤脫あらん歟
(六)勝ち越しの數なし
(七)「たしな」又「たくな」いづれにも解しがたし
(八)「さうに」又「さちに」按「さふちふ」歟
(一〇)相手になるべき者なくて
(一一)此處誤脫あるべし

〔考異〕
(四)きわは―きには―きは
(五)かくし―か〈し
(九)こゝばく―こくばく

るかな、とおほして、仲忠のを御覽じて、帝わらひ給ふこと限なし。朱雀「仲忠の朝臣は、何でふ心得たるかは」と仰せらる。仲忠、「深くは知り給へざりつれども、はた奏したらむ、こよなくあらずや侍らん」「かしこう空おぼえする朝臣なりや」とて笑ひて止み給ひぬ。(一)(二)

今はみな、相撲はじまりて、左右のけしき言ひそして、勝負のかつきわは、四人のすまひ人出だして、かつかた一二のすまひかた一つとられ給へり。親王たち、上達部、大將、中少將、かくし給ふ。十二番まで、こなた、かなた、互に勝ち負けし給ふ。只今は、此方にも彼方にも數なし。今一番いたすべきになむ、勝負定まるべき。左に、たしな下野の竝則、のぼりてさうに。竝則が京にまう上ること三度。こゝばくの年頃のなかに、一度は仕うまつれり。一度は、遇ふ手なくてまかり歸りにき。天の下の最手なり。左大將のおとど、左の相撲、これに遇ふべきはなし、と思して、此度の相撲にぞ、勝負定まるべければ、せめて此方彼方に挑(三)(四)(五)(六)(七)(八)(九)(一〇)(一一)

〔語釋〕
(一)式部卿の宮の御息所が畫の御賄に當れる承香殿に對して云々といひて役を讓りたりといふ意なるべし
(二)「給ふ」は「給へ」歟
(四)「御覽ずるに」歟
(五)承香殿に浮名の立てる
(六)以下朱雀の心、「げにはたゞ」は「げにはた」歟

〔考異〕
(三)ほどに―「に」ナシ
(七)げには―けふは

みかはしておはしまさむ。左は竝則をたのみ、右は行經をたのみて、大願を立てつゝ勝たむことを念じ、さらに相撲とみに出で來ず。

斯くいふ程にまだ日たかし。その程に、御物の賄かはりて、承香殿仕うまつり給ひける。今は、夜さりの御物になりて、式部卿宮の女御あたり給ふを、この御息所、畫の御まかなひに、式部御息「なほ此度は仕うまつり給ふ。後は御讓りあらむこと(一)(二)を仕うまつらん」とて、今日はなほ承香殿仕うまつり給ふ。夕影のほどになり、日のまかなひ仕うまつり給ふ。相撲の盛にきしろひて、勝負して、左右さまぐの相撲出だして仕うまつらせ、かぎりなく樂を仕うまつる。かく面白く、御覽ぜし程に、まかなひの御息所のかたち裝束、めでたく清らなるも、え心とどめて御覽ぜざりけるを、斯く軋ろひ挑みかはして出で來ぬほどに、この御まかなひを御覽じて、夕影に、あやしく物の清らまさる程に、例よりも勝りてなむおはしましける。帝、この君の御名立ち給ふ兵部卿の宮に御覽じくらべて、げにはたゞ、え見過(三)(四)(五)(六)(七)

〔語釋〕
(五)承香殿をして兼雅に物をいはせて見たし
(六)「見てしがな」歟
(一〇)「勝つ名と」歟
(一一)承香殿に對する戀を
〔考異〕
(一)てば―「ば」ナシ
(二)けり―ナシ
(三)出でては―「は」ナシ
(四)事の―もの
(七)言ひ給ふ―いみ給ふ
(八)あらむとする―あらむずる
(九)ぬる―する

してあるまじき人の中にこそはありけれ、男も女も、かたみに見交してば、けにげに身は徒になるとも、我にてもたどにては得在らじかし、見るに、男も女も、深き勞ありけりとも、いとど覺ゆるかな、かよる中の、流石に色に出でてはえあらず思ひつゝむことありて、その中に何でふ事を言ひつくすらむ、この中には、世の中にありとある事の、すこし見所聞き所あるは言ひ盡すらんかし、彼を聞き見るものにもがな、と此彼をくらべつゝおはしまして、いかでこれに、聊かなること言はせても見せてしがな、と思す。物など聞食して、朱雀「今日のまかなひは、人々に土器賜ふべき物ぞや。別いても、其處には言ひ給ふ事やあらむとする」御息所、承香「まかなひの土器賜ふべき人こそさふらはざめれ」と聞え給ふ。兵部卿親王え聞きすごし給はで、兵部「けふは土器の相撲の節にこそ」と聞え給ふ。帝わらひ給ひて、朱雀「されば、やがて倒れぬる人もあらむ」兵部卿親王、「倒るゝ方になりなば、かつなとなりなむかし」と聞え給ふさま、切に隱しあまる氣色なれば、

〔語釋〕
(一)朱雀が兵部卿の心を察する也
(三)此二人を夫婦にしても
(四)「女御より賜はるべき人」歟
(六)兵部卿にやるは惜しきものなれども不似合の中ではなし
(七)和訓栞に「矢にいふ弟矢なるべし鳥にもいふにや」といへり
(八)風俗歌の文句に「大鳥のはねに白き霜降れり云々」
(九)「太上」は「彈正」の誤なるべし
〔考異〕
(一一)思すらむ―おぼゆらむ
(五)無しやそと―なぞう

あはれに苦しく思すらむ、然てあらむに似げなかるまじき中にこそありけれ、などご御覽じて、上、朱雀「御土器女御に賜ふべき人無かなるを、げに無しや、そと試みむ」とてまかなひの御息所に賜ふとて、

朱雀「つはものの藏に宿るはつらけれどかたはにみえぬ乙箭なりけり
と見ゆればなむ咎め聞えぬ」とてまゐり給ふ。御息所賜はり給ふとて、

承香かたはなる名の乙箭にも聞ゆれば思ひいらるゝ頃にもある哉
とて賜はり給ふ。東宮とりて、兵部卿の宮に奉り給ふとて、

東宮「秋の夜のかずをかゝせむ鳴の羽の今はおとやの片羽にぞせむ
同じくば然てあらむなむよからむ」兵部卿賜はり給ふとて、

兵部「大鳥の羽やかたはになりぬらむいまはおとやに霜の降るらむ
思ほえぬことかな」とて太上の宮に奉り給ふ。とり給ふとて、

忠康「夜をさむみ羽もかくさぬ大鳥の降りにし霜の消えずもあるかな

なほ言はれそめ給ひにたるこそあしかめれ」とて取り給ひて、左大將に奉り給ふ。とり給ふとて、

正頼　消えはてど夏をもすぐす霜みればかへりて冬のかずぞ知らるゝ

右大將に奉り給ふ。取り給ふとて、

兼雅　花のうへに秋より霜のふるなれば野べのほとりの草をこそ思へ

かゝる空言恐ろしかりけり」とて兵部卿親王に奉り給ふ。取り給ふとて親王、

兵部　こきまぜて秋の野邊なる花見ればあだ人しもぞ先づ古しける

かゝる程に、こと上達部あまた參り給ひぬ。たび〳〵御土器まゐりて、申の時ばかり、今一手の相撲、こなたかなた更に出で來ず。上よりはじめ奉りて、上達部、親王たち、なほ氣色あるべきと思して、強ひて待ちおはします。辛うじて、まづ左に竝則、右に伊豫の最手行經出で來る時、人々、「此度の相撲の勝負の定まらむこと、いと無期なり。まさに、竝則、行經が遇ひなむ手は、とみに定まりなむや」

〔語釋〕
(一)浮名を立てられたるが惡しと也
(四)「あるべし」歟
〔考異〕
(二)あまた―いとあまた
(三)申の時ばかり―日申の時より
(五)行經が―行經と

と心もとなくてある程に、上、朱雀「いと切に勞あり。左にも右にも、今日勝たむ方は、參れる人わかれて、そのつかさの人、官人の送せよ」と仰せられて、左右と爭ふこと限なし。かゝる程に、なほも左勝ちぬ。左より四十人の舞人、わかれて、人など數知らず出で來て、あそぶこと限なく、面白くあそびせめて、左大將土器とりて、竝則に賜ひて、あこめの御衣ぬぎて賜ふ。限なくあそぶに、上、朱雀「こちらの年頃、嵯峨の院の御時にも、國知りての後も、見所あること無かりつるに、然こそいへ、只今の大將たちの、例の人にたち勝りたる人にて心づかひせられけむ、いと勞あるかな。これに少し珍らかならむ筋にして、かの九日の等しき相撲になしてむ。「仁壽殿の相撲の節吹上の九日」とも言はせてしがな」と宣ふ。東宮、「然りとも、今日これはやと見ゆること、他人はえ仕うまつらじ。こくばくに竝なく、天の下にある限のものの、今日につきぬるを、それに少し立ち勝らむこと、涼、仲忠、仲頼なむ仕うまつりいたさむ」上、朱雀「その人々こそ、心こは

〔誤釋〕
(一)「とかれて」の下脱文あるべし
(三)「筋にして」は「筋を―て」歟
(四)「なしてむ」の「む」衍文歟
(五)「仲頼」は「行政」の誤歟、仲頼は去年遁世せり
〔考異〕
(二)たちの例の―たちの少し例の

き人なれ。さりとも試みむかし」とて涼を召す。涼その日いとめでたく裝束きてまゐれるを、御前に召して仰せらるゝ。朱雀「今日なむ、例の節會に似ず、ものの興思ほゆる日になむあるを、今日累代の例になりぬべかめり。おもやう、今すこし珍らしからむ事しつけて、同じくば例にせむ。なほ今日の相撲のことは、またあるまじく、故事にせむとなむ思ふ。人のすまじき事をこそはせめと思ふに、涼の朝臣と、今一人となむある。朝臣の訪らひにものしたりし九日なむ、唐土にもなく珍らしき例になりにし。今日の相撲もなむ、また然る樣になさまほしき。かの仕うまつりし琴仕うまつれ」涼、「年頃仕うまつりし琴、仕うまつらじと思ふ心侍りて、魂をもかへ、仕うまつりしあなするをもすてて侍れば、更に今また手といふものなむ覺えず侍る」と奏す。うへ、朱雀「さらに奏すまじきことなり。仲忠の朝臣、たび〳〵否び申すをだに許さで、けに山かつとも聞かじや」と仰せらるゝ。強ひて傍なる人にいふ、涼「いさゝか、善うまれ惡しうまれ、思ひだに出でられば、

(一)脚末歟
(四)誤脱あるべし
(一)ことはまた—ことよまた
(三)今また手と—ひき所ある手と

仕うまつるべきを、更にかけ離れてなむ思ほゆる」と人々にいふを、上、聞召して、朱雀「涼の朝臣がすまひ申すをすまはせてば、仲忠の朝臣のしてむをば責めじ」など度々いと切に責めさせ給ふ。かしこまりて、更に仕うまつらず。上、「手はむけにおほつかなく覺ゆとも、深きさえは、それに對ひて、手觸れしむれば、自然に思ひ出でらるゝものなり。いと、然言ふばかりにはあるまじかめるを、然りともかたへばかりは殘りたらむものをとたい〳〵しう申すことなり。上にも常に好みてはせざりけれど、勞ある聲にもあるかな。まして常にたがひて、心に入りなむ時如何ならむ、と思ほゆるなむいと面白き。いと切なる夜に、うしろめたきことは言はじや」とて、お前なる六十てうを五箇にしらべて、朱雀「この聲をもて、をりかへし、たゞ彼のふき合せむにて、仕うまつられよかし。彌行が族の二のはを、琴の音の出で來むかぎり仕うまつれ」と仰せらる。涼「さらに、他手は思ひ出づることや侍らむ。五箇の手といふもの、かけても思ほえずなむ侍る。この調をかへり

(五)ものをと「と」衍歟
(六)ふき合せむにて「吹上にての手」歟
(七)二の—この
(一)上—ナシ
(二)すまひ—辭し
(三)手は—「は」ナシ
(四)かたへばかりは—かたへは—かた手は
(八)仰せらる—仰せられて

聲になして、仲忠とさふらはど、仲忠の朝臣の仕うまつらむをうけたまはらばや、わづかに思ひ出で侍らむ。六十てうばかりこと手どもの多く侍らむ」と聞えてさふらふ。「涼の朝臣仕うまつらばこそは、仲忠の朝臣には「きしろひたる人仕うまつるに、これにかき合せて仕うまつれ」とも言はめ。すまふまじき涼だに斯くいふ。ましてかの生憎者は、まさに聞きてむや。よしおふせ見むかし」と宣ひて、朱雀「仲忠の朝臣」と御口つがら召す。仲忠左近の幄に、笛吹きせめて、勝ちたる遊し居るに、召す聲を聞きて、笛うち捨てて逃げかくれぬ。

隱れ所もおほえず、いかで人に知られじと思へば、藤壺に、東宮にさふらひ給ふ大將殿のあて宮の御局に隱るゝ時に、御たち、「こは何ぞの御かくれぞや」など笑ひ言ふ。仲忠、「只今煩らひにて侍り。えまかでで、せめて隱れ所を求むるに、ただ此處にさふらはむのみなむ心安がるべき」兵衛、「あなむくつけや。過したらむ人をばいかでか隱さむ。言ひかけもこそし給へ」中將、「外にあやまつ事も覺えず。

（語釋）
（三）「東宮…御局に」は傍註の本文に紛れ入りたるなるべし
（六）我々が罪を負ふ事になるべし

（考異）
（一）斯く―ナシ
（二）思へば―思ひ
（四）あて宮の―ナシ
（五）隱るゝ時に―「時」ナシ

此處にこそ、萬のこと過つべけれ」兵衛「益なきものは見えず、とか言ふなれば、何處にてかし給はざらむ」いらへ、仲忠「さりとて、あはせにあたならぬ人もあめりや」とて、御簾、御几帳の中にかくれて、長押におしかゝりて、たゞあて宮のお前にさふらひて、物など聞ゆ、仲忠「今日上にまうのぼり給はぬ人は、いと罪深き心地こそし給へ。さるめでたき事の有難げなるを、御覽ぜて、なほおぼろげにはあらじかし」上、兵衛の君して、「如何に、など言はせ給ふ。それ見過すも、罪無きにはあらずかし」仲忠、「時々さふらふにあえにたるにやあらむ」とて、仲忠「まめやかには、然ばかり面白かりつるものを、御覽ぜずなりぬる」兵衛、「この頃なやみ給ふ事ありてなむ。何方か勝ち給ひぬらむ」いらへ、仲忠「何せむにか問はせ給ふらむ。左のつかさの中將には、仲忠侍らずや。何方にかはあらむ」兵衛、「さればこそは、此方にはあらじと思ほすめれ」いらへ、仲忠「心のうちはよき空言人なりけり」など言ふ。仲忠「いとこそ醜げ無かりつれ。いで、さもくちをしく御覽

（語釋）
（一）益なるべし
（三）誤あちん歟
（五）あて宮
（七）引込み居るを諫めもせで其儘見過し居る仲忠にも罪はあるべし
（八）あて宮にあやかりて自分も其如き罪を犯すなるべし
（九）勝は言ふに及ばず左のものなり
（一〇）仲忠が居る方故負は定めし左なるべしと思ひたりと戯れ言ふ也

（考異）
（二）やうなきものは―ようなきもの
（四）聞ゆ―聞えて
（六）如何になど言はせ―如何がなど聞はせ
（一一）醜げ―にくげ

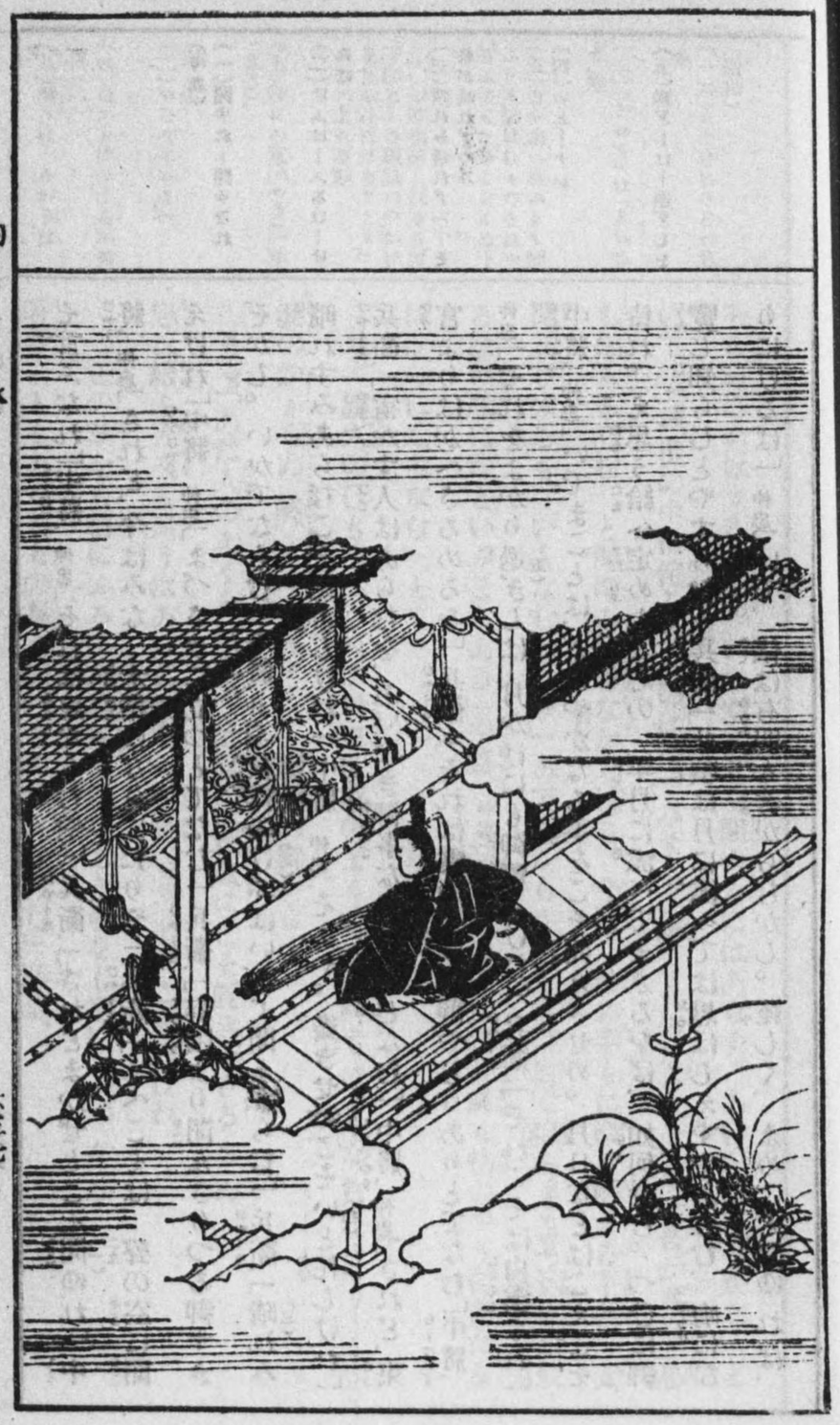
（語釋）
（一）あて宮が見て居らるるならんと思へばこそ
（四）自分は高麗へ渡りたる覺もなきに
（五）此處誤脫あるべし
（一一）古今集「いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ」の歌歟
（考異）
（二）あふてにしなし―あふてになし
（三）藤壺―上
（六）とはつくり―とよつくり
（七）あそばす―あそびす
（八）琴かき―琴をかき
（九）かし―かしな
（一〇）知らむ―しらべむ

ぜずなりぬるかな。さるは、必ずまうのぼり給へらむ、と思ひ給へつるを、同じくいたす相撲といへども、いと勞ありてし侍りつるは、さふらひ給ふらむ、と思ひてこそあれ。御覽ぜざりけるこそ、いと夜の錦の心地すれ」兵衛「此處にてやは、仕うまつり給ひて御覽ぜさせ給はぬ」仲忠「いで何かは、あふてにしなし給はば」など言ふ。

かくて物聞え給ひ、萬のことを言ひ居たれば、藤壺、兵衛していらへさせ給ふ。中將、仲忠「高麗人などこそ、御通辭はありといふなれ。まかり渡るとも思はぬに怪しくもあるかな」いらへ「されどもこはつくり、はたあそばす、上手におはしませばにこそあれ」など言ふをりに、夕暮になりぬ。秋風いと涼しく吹く。中將、

秋風はすゞしく吹くを白たへの

など、お前なる箏の琴かき鳴らしなどす。兵衛「されば、頼み聞ゆる人もあらむかし」中將、仲忠「此處ならでは、何處をかは知らむ」兵衛「されど、「野にも山にも」と」



そ言ふなれ」中將、仲忠「それは嵐ならむや」兵衛、「されどまかぜとこそ聞ゆれ」中將、仲忠「されど、今はみな、木枯になりにたりや」兵衛、「うべこそは、聲の空に聞えけれ」中將、仲忠「まづさきに立つとてなむ」兵衛、「春頃より聞えざりつる御すきぞかし。いかでならむ」中將、仲忠「秋霧のけふはいかゞ聞えざらむ」兵衛、「晴れみ晴れずみあらむこそ見苦しけれ」中將、仲忠「そよや。盡きせぬこそいと佗しけれ」兵衛、「宿かす人はあらむを、あいなき御事なりや、などなむ」中將、仲忠「されど、東宮よりはかへさるめるを」兵衛、「それは雲の上には御やどりありとてなむ」中將、仲忠「それをまかり過ぎしは、月かげにも御覽じけむ」兵衛、「それこそは白雲なれ」中將、仲忠「いでまことは、まめやかなる事をこそ聞えさせめ。月日などはこえこそ侍れ。え思う給へ定めぬことの、年月に添へてまさるをば、如何せむ。つひに御覽じ知らじとやすらむ」兵衛、「此頃は月に添へては思ほしえずやあらむ、晦になりにけるは」仲忠「いで、偖は有明も著からむかし。怪しく、まめごと聞ゆれば、

〔考異〕
(一)開ゆれ—開ゆなれ
(二)けふは—ふるは—けれは
(三)晴れみ晴れずみ—それが晴れずのみ
(四)いと—ナシ
(五)過ぎしは—過ぎしを

そらめにおはするかな。いなや、君を聞ゆるにはあらず。あいなき垣下かな」といて、仲忠「世の中に侘しきものは獨ずみするに勝るものなかりけり。吾が君や、思し知らるらむ、と聞ゆるは理なかりけり。今は「結ふ手もたゆく解くる下紐」と聞えさするも、いとなむ効なき」あて宮からうじて言ひ出で給ふ。あて宮「下紐とくるは朝顔にかといふことある」中將、仲忠「同じくふかば、此風も物のやうにあたるばかりになりなむ」とて、

仲忠「旅人のひもゆふぐれの秋風は草のまくらの露もほさなむ
涙のかゝらぬ曉さへなきこそ」藤壺の御いらへ、
あて宮「あだ人のまくらにかゝる白露は秋風にこそ置きまさるらめ
忘れ給ふ人々も無うはあらじかし」中將、仲忠「まだこそ無けれ、
この葉をも宿にふるさぬ秋風のむなしき名をも空に立つかな
著きこともあらじものを、何れかあだ人ならむ」藤壺、

〔語釋〕
(一)空とぼけるなどの意歌
(二)「といて」は「といひて」歌
(三)古今集「思ふとも戀ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆくとくる下紐」
(四)伊勢物語「我ならで下紐とくな朝顔の夕かげまたぬ花にはありとも」の歌によれる歌
(五)役にの意「やう」一本「えう」
(六)考異
(一)いなやーいらへ
(四)なかりけりーなかめり
(八)無うはーながうは

「吹き來れば萩の下葉も色づくをむなしき風といかどおもはむ
まめやかにも見えずかし」中將、仲忠「それは音ならむかし」とて、
秋風の荻の下葉を吹くかぜに人まつやどはことさやぐらむ
藤壺うち笑ひ給ひて、
藤壺　まがきなる荻のあたりを吹く風のいざやそよともいかどこたへむ
中將、仲忠「いでやもどかしくこそあれ。
吹きわたる下葉おほかる風よりも我をこちてふ人もあらなむ
と聞ゆるほどに、仁壽殿より仲忠をせめて求めさせ給へど、更になし。退出やしぬる、と思さる。陣にもまかづとも見えず、隨身はあり、と聞召して　強ひて求めさせ給ふ。朱雀「たど今、左近の幄にて、になき箏の聲々いたすなりつるを、世にもまかでじ。まかでにたらば召しに遣はせ」なと仰らるれど更に無し。上、右大將に、朱雀「仲忠の朝臣に、切に逢はまほしき事なむある。更に無しとや。そこにあり所は知り給へりや」大將、兼雅「只今までさふらひつるを、まかでやしぬらむ、さふらはずなむ侍る」上、朱雀「さらば召しに遣はせかし」大將、兼雅「まかで侍るとも、さるは見えざりけるを、怪しくなむ聞えさせ侍りぬる。源中將朝臣もさふらはるるを、もし琴仕うまつるべきことや仰せられつらむ。さ承りてか、逃げぬらむ。いと怪しきものなり。琴の事といへば、跡を絶ちて逃げ隱るゝものなればにや。しばし御琴どもをかくされ、涼の朝臣もさふらはず　まかる由、言ひ散らしてかくされよ。あいなうやがてまかでさせらるまじ」など宣ふ。涼立ちて、たど氣色ばかり、御前近きわたりにて、賴澄の君にあひ給ひ　涼「涼はまかでぬ。もし召あらば、「御前にて琵琶仕うまつりつるに、俄かにけざうして」と奏し給へ」と言ひつけて、仲忠聞くばかりにも言はで、これも藤壺にまゐりぬ。
仲忠、「彼は誰そ」といふ。　涼「涼」といらへて言ふ、涼「仲忠おはせぬといとにくめり。涼とて、秋風にもなし給ふかな。此處にこそ隱れられたりけれ。只今切に

（語釋）
（五）仲忠の隨身の舍人はまだ歸らず居る

（考異）
（一）風と―ものと
（二）音ならむかし―おもとになちむかし―おとになちむかし
（三）荻―萩
（四）思さる―おはせちる

（語釋）
（六）誤あるべし
（八）「けざう」は「氣上」歟

（考異）
（一）所は―「は」ナシ
（二）させ侍りぬる―させぬるを
（三）といへば―いへば―いへば
（四）由言ひ―由を言ひ
（五）かくされよ―かくされば
（七）やがて…涼―はたやがてまかでむ涼などのよきとと
（九）言はで―言はせて
（一〇）おはせぬと―おはせねど
（一一）にくめり―よくにくめり―よくふくめり

（語釋）
（一）兼雅
（二）父が呼びに來たち背くわけにはゆくまじ
（七）誤あらん歟
（九）こゝの涼の詞誤脫多しと見えて解し難し

（考異）
（三）知らじ―知らず
（四）貢めそせさせ―責めにせめさせ
（五）嬉しけれ―嬉しげなけれ
（六）いら―いて
（八）涼―ナシ
（一〇）勝ちつるはとのやとたひ―勝ちつるやうのこととたひ
（一二）おはしますと―仲忠おはしますと
（一二）用意しつる―よういひつる
（一三）はら―はうへ

求めさせ給ふめるは」仲忠、「さらば、あなかまや」涼、「大將のおとど、召す使にさされ給ひつめるは。それをばすまひ給はじかし」仲忠、「今宵は、親も子も知らじ」涼、「御前にて御琴賜はりて責めそせさせ給へるに、困じにたりや。吾が君の御德にこそまかり出でぬれ」仲忠「仲忠が德には、さのみこそは嬉しけれ」など物語しつゝ内より、淺香の折敷どもに、肴いと警策にし出だされたり。中將、涼「いとねたき事たゞ一つ、涼が今日あるかな」仲忠、「何事ぞや」いらへ　涼「今日かならず參り給ひなむと思ひつるに」仲忠、「それや、何かねたき事ありや」涼、「この相撲の左の竝則が勝ちつるほとのやとたひ仕うまつりつるをなむおはしますと用意しつる所なむあひつるはらへをこそすなれ、ことなるかみとも思はぬものを、涼のねたきことも言ふを聞召し入れぬは、げにそれだにあらぬ御心なむめりかし」など聞ゆ。仲忠「仲忠も然ぞありつるや。笙のふえの調のほどよ」など言ふ。藤壺「こゝにてやは、たゞ今聞かせ給はぬ」

（語釋）
（一）「頭」は「藤」なるべし
（二）兼雅
（五）兼雅をいふ

（考異）
（三）近衛…問はせに―ナシ
（四）聞ゆ―聞しめし
（六）斯くては―斯くは
（七）まかで―まかりて

かくて、涼も仲忠も、萬のことを聞ゆる程に、仁壽殿より、頭中將もとむる使に、つかさの人もさながら里には往き、仲賴も少將たちもつらねて、すべて宮の内をもとめ廻り給ふ。大將のおとど、たゞ殿上わらはを一人御供にて、まづ陣ごとに、「宰相中將やまかでつる」と問はせ、近衛の御門に車やあると問はせに遣はしたれば、「陣にもまかで給ふとも見えず。車も隨身どももあり」と聞ゆ。后町よりはじめて、君だちの御とのゐる所、御局どもをうかゞひ給ふに、藤壺にたち寄りて聞き給へるに、御前の方に箏の琴ひき、涼琵琶かき合せて、著き人々のことなれば著く聞かせじとて、こと聲をしらべ、例の聲をかへて彈けど、勞ある人の御耳なれば、ふと聞き知りて入り給ふ。仲忠見つけられて、すべなき心地して、强ひて隱るれど、おとど見つけ給ひて、兼雅「召せば、など斯くてはものするや、參られよや」と宣ふ。仲忠「やがてまかでにけりと奏せさせ給へよ。只今、みだり心地、物に似ず、惱ましくて、え御前にさふらふまじ」おとど、兼雅「見苦しき人にもあるかな。

〔語釋〕
(三)今召に應ぜずして後首尾あしき時に兼雅を恨むなの意歟
(四)誤あちむ歟

〔考異〕
(一)はうとく―はうせく
(二)人あちむ―人のあちむ
(五)しだい―しだひ
(六)惡しかちむ―あしかりなむ

まかでにけりと人の奏すればこそ、召しに遣はせ、とは仰せらるれ。又只今、隨身も乘物もあり、と奏するなりつるは。然聞召したるには、いかど然は奏せむ。兼雅さへ隱すなり、と仰せられじや。たいぐしきことなり。朝臣の交らひするに　兼雅苦しき時おほかりや。世の中の人の、否びがたく思ふことは、ほうとく(一)こそはすれ。いかど　天の下ならん人は、仰せごとを否び申す人あらむ。切に御口づから召しもとめさせ給ふを、宮の内にさふらひながら仰にかなはぬ事、例の人にえあらじや。早う參り給へ」と宣ふ。仲忠、「更に、なほ今宵のことは許させ給へ」おとど、兼雅「のちに、兼雅、ひとへにいたまれざらむ。何にかせむ。天下に、しだいにかなはむとて、何か惡しかるべけれ。御氣色あしうて仰せらるゝぞや」とて、せめて、御前におし立てて參り給ふ。涼の君をば、ありとも聞き給はず。

畫詞　こゝは藤壺。仲忠、涼、姫君、御たち數多かり。大將仲忠召す。大將

〔語釋〕
(一)東宮の妃妾たち
(三)瓶壺
(四)女四宮なるべし、承香殿
(五)簾中に
(七)「藤に果つ」歟
(九)「そこにや」なるべし

〔考異〕
(一)東宮の君だち―東宮たち
(六)四の宮―二の宮―五の君
(八)をとて―ナシ

中將の君。東宮の君だち、右大將の三の君、嵯峨の院の女五の宮、四の親王、姫宮おはします。女御、まかなひのもたどのも、多にさふらひ給ふ。左大將殿の大君。すべてこの御族、君だち、女たち、さながら御かたちいと清らなり。上、此方に入り給ひて、朱雀「などゝ藤壺はまうのぼり給はぬ」四の宮、承香、そがさうざうしきこと。かの君のまうのぼり給へらむこそ、今日の相撲よりも見所あべけれ」東宮、「かけにはつばかりはあらざめるものを」とて、御前に、生海松の、石貝つきながらあるを取り給ひて、藤壺に、

などかまうのぼり給はぬ。此方に、皆ものせらるめるものを。

とて、

東宮　浦なるやみるめはしらですまの蜑はとこにやかづく海の玉藻を

と思ふなむ怪しき。今だにまうのぼり給へ。

とて奉れ給へれば、藤壺、

〔語釋〕
(四)大將を供に連れたるを見て戯れ言ふ也
(五)「左のつかさの」なるべし、仲忠は左中將なれば右大將が仲忠の隨身をせらるゝ上は左大將たる我は勿論隨身をつとめねばならぬの意
(六)仕うまつり給はざらむ「仕うまつらざむ」歟

〔考異〕
(一)四の宮―二の宮―五の宮
(二)出て給ひぬ―出て給ふ
(三)よりも―「も」ナシ
(七)もとめもて歩きつる―もとめにとてありつる
(八)似ず―ナシ

底なるやみるにかくるゝ海藻をばそこそかづかねめに障りつゝ

人々の御覽ぜむを思ひ給へてなむ。

とて奉れ給へり。東宮、四の宮に、「御覽ぜよや。いと然言ふばかりにはあらぬを」(一)とて御前に出で給ひぬ。

かくて夕暮に仲忠、藤壺より參れり。侍從なりし時よりも、この頃はいとめでたき容貌の盛なり。父おとど、さる容貌人にて、つらねて參り給ふに、さらに親子とも見えず、たゞ、一つ二つの弟、兄に見えたり。左大將のおとど見給ひて、正頼「こ」(四)ともなき隨身かな。中將の朝臣今日の隨身、いと見苦しや」と遊びおはしまさふ。左大將、正頼「右大將、左右のつかさの隨身し給ふなり。いかゞ同じつかさの仕うまつり給はざらむ」(六)と、仲忠を前にたてて、左右大將後に立ちて參り給ふ。仲忠もとめもて歩きつる少將、左右近衛も立ちて、みな歩みて參る。たゞ此の御中に、涼一人なん無かりける。仲忠夕榮してそこらの人にも似ず、勝れてめでた

く容貌の清らなるよりも、さし歩みたる様、うち思ひつるけしき、さらに人に似ず、なまめき、らうくし。左右の大將よりはじめて參るを、上御覽じて、いと御氣色よくて、朱雀「いとかしこく求め出でられたるかな」と宣ふ御氣色のいとよければ、御前にさふらひ給ふかぎり、彈正の親王立ちて、御階よりあそび下りて、仲忠の朝臣に遊びあひたまふ。兵部卿親王、若宮よりはじめ奉りて、上達部、親王たち、殿上人つらねて迎へ給ふ。上、朱雀「さふらひけるを、などか召には參らざりつる」と宣へば、左大將、兼雅「左の幄にて大將の土器賜ひてけちすを給ぶこと」と奏し給ひて、東宮にさふらふ。東宮、「いで其の籠られつらん葎も思ほゆるや」とて、

東宮「松蟲にやどとふ秋のむぐらには宿せる露やものを思はむ」

と宣へば仲忠、

同じ野にやどをしかさば松蟲のあきの葎を賴みしもせじ

と聞ゆる。東宮、左大將に、まゐらせ給ふ。大將取り給ひて、

正賴「まつむしに宿をしかさば秋風に匂ことなる花も見えなむ」

とて賜はり給ひて、彈正の親王に參り給ふ。取り給ひて、忠康「戲にても、忠康をこそ思しかけけれ。

花みかく野べを見るく秋ごとになほまつむしの旅に經るかな

〔語釋〕
(一)うち思ひつる氣色」なるべし
(二)朱雀第四の皇子帥宮をいふ歟
(三)「左大將」は「右大將」の誤なるべし
(五)「醉人も」なるべし
〔考異〕
(四)けちすを—けちするを

けんに人あらじかし」とて賜へば、仲忠、

もよしきにしる人もなき松蟲は野べの葎ぞ臥しよかりける

と奏し給ひて、東宮にさふらふ。東宮、「いで其の籠られつらん葎も思ほゆるや」とて、

東宮「松蟲にやどとふ秋のむぐらには宿せる露やものを思はむ」

と宣へば仲忠、

同じ野にやどをしかさば松蟲のあきの葎を賴みしもせじ

と聞ゆる。東宮、左大將に、まゐらせ給ふ。大將取り給ひて、

正賴「まつむしに宿をしかさば秋風に匂ことなる花も見えなむ」

とて賜はり給ひて、彈正の親王に參り給ふ。取り給ひて、忠康「戲にても、忠康をこそ思しかけけれ。

花みかく野べを見るく秋ごとになほまつむしの旅に經るかな

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)「と奏して賜はりて東宮に參る」歟
(三)推測し得らるゝ
(四)「松蟲の」歟
(六)「聞ゆる」の「る」衍歟
(七)「參らせ給ふ」歟
〔考異〕
(五)宿せる—宿れる
(八)かけけれ—かけけれな

（語釋）
（一）仲忠に
（三）「言事」歟
（四）朱雀はすべての藝に巧なる中に
（考異）
（二）物も―「も」ナシ
（五）う（これに―うちにもこれに
（六）二番に―二番は
（七）あやまちて―あやまりて
（八）思召して―おぼして
（九）つぐの（―つぐのふ事は
（一〇）上―ナシ

つらしとこそ聞えつべけれ」

かゝる程に、上、何事をして、これに物を言はせむ、と思ほす。仲忠は、いとかけ離れてさふらふに、上、碁盤を召して、仲忠と御碁あそばす。朱雀「何を賭物にはせむ。いと切ならむ物も賭けじ。いひごとを賭けむ」と宣はせて、三番にかぎらせ給ひて遊ばす。なべての御才をつくしてし給ふなかに、碁なむ、一にし給ふ才におはしますうへ、これにいかで、と思ほす。仲忠、はた、然思ほすらむとも知らで、たゞ藤壺にて物聞えつるのみ思ほえて、我この御碁に勝たむとも思はず、魂は、たゞ藤壺にて斯うのみある心地して仕うまつりければ、一番に上勝ち給ひぬ。二番に仲忠勝ちて、はての度、手を一つ打ちあやまちて、たゞ目一つを負け奉りぬ。上、興ありと思召して、「早う賭物つぐのへ」と仰せらる。仲忠「何事をか仕うまつるべく侍らん」上、朱雀「たゞ言ふことを否ぶまじきばかりなり。物ある秋の夕暮に、言はむことたゞにはあらじかし」と仰せらる。仲忠、ねたう負け

（語釋）
（六）惡魔國歟
（九）ごとを、を衍歟
（一〇）「童男卯女舟中老」
（考異）
（一）仕うまつり―仕うまつちん
（二）せいひ―せいひん
（三）いん―手―ゐん
（四）蓬萊の―蓬萊山の
（五）蓬萊の…こくの―蓬萊のあくまこくに不死藥
（七）取りに―もとめに
（八）更に―ナシ

奉りぬるかな、心づかひして仕うまつらましものを、何事をか仰せられむとすらむ、と思ひて、仲忠「とく承りて、身に堪へぬべき事ならば仕うまつり、堪へぬことならば其の由をこそ奏し侍らめ」上、朱雀「仲忠が堪へぬことは、世にありなむや。さて堪へぬべきことならば、承りなむや」仲忠、「承りてのみなむ」上、涼に賜ひつる琴と等しきせいひを同じ聲に調べて、朱雀「これなむ、今日のいひことに仕うまつらむによろしきことなる。これ更に調をな變へそ。他聲は聞かじ。これが音の、出で來むかぎり、このいんを、たち返〳〵、度々あそべ」と仰せらる。仲忠奏す、仲忠「他仰せごとは、身を徒になさむ、蓬萊の不死藥、あくまこくの優曇華を取りにまかれ」と仰せらるとも、身の堪へむにしたがひて承らむに、更にこの仰せごとをなむ、かゝる所々に遣さむよりも、難き仰せごとなる」と奏す。上、うち笑はせ給ひて、朱雀「似げなき勅使かな。さりとも、蓬萊の山へ、不死藥取りに渡らむとは、童男卯女だに、その使に立ちて、舟の中にて老い、

「島浮べども蓬萊を見ず」とこそ歎きためれ。かのこゝろしやうすのさる者だに、終に到らずなりにける蓬萊へ、今朝臣の、日本の國より、行くらむ方も知らず、不死藥の使したらむこと、すこし煩はしからむ。得や求めあはざらむ。童男卯女、え劣るまじかめり。今一つ、けうある卯女出來る煩ひあらむ。これ、になき使好みなり。又あくま國に、優曇華とりに行かむに、すこし身の憂やあらむ。かれも、南天竺より、金剛大師の渡りけることは、睦ましき徒を、となりの國より迎へ取りて、これ相顧みるとて、時の國母のあたをいたしてなむ、さる使には出だしたりける。そも南天竺より渡るに、自然に年經にたれば、「忍辱の輩のわかれに逢はず」とは歎かずや。それを如何に、朝臣の、國母のあたありともなくて、また、さる藥要ずる后ありともなくて、俄に親をすてて渡らむに、すこし物の煩あり、不孝になりなむ。身の勞ありなむ。斯く、になき事よりは、たゞ此處ながら調べたる一つ彈かむことは、易からむかし。あるまじき使にはすゝまで、たゞ此の琴

(語釋)
(一)誤あるべし
(二)徐福の時の童男卯女に其の困難は劣るべかちずの意歟
(四)「興ある」歟
(五)似げなきの意歟
(七)父母の死別にあはず
(九)「調べたる琴一つ」なるべし
(考異)
(一)島―島の―島に
(六)そも―それ
(八)ありとも―あること

を手一つかき鳴らし聞かせなむ。かの不死藥、優曇華に劣らざらむ。不死藥は、「食ふ徒萬歳の齢あり」といひて、かの國の帝王さる難き使をたて、求められ、優曇華は、俄にせむる命とどめむとてなりける。何れもく、命を惜む藥なりけり。それを朝臣、今宵の言事を、さらばとて、あくま國蓬萊の山まで出だし立てなむ、われすこしはになきまつは、我斯く目に近く見馴らしたるを、さる心すごき使に、はるかなる程を出だし立てて思はむになむ、少しあはれに心細からむ。又いきてみし人も、只今物せらるゝ、それが歎き思はむを見むに、いと効なからむ。かく言ふ程に、不死藥をも蓬萊にもいたらむと思はむ程にともかくもあらば、不死の藥も何にかはせむ」と仰せらる。仲忠、「さては向ふこと難き蓬萊には侍らざりけり。たゞ不死藥なむ枯れ侍りにけり」と奏す。うへ、朱雀「されど今宵は王母が家に劣らずなむありける」仲忠、「近き衞に、童男卯女こそさふらへ」と奏す。うへ、朱雀「海ひろく風早きを、いかで求められむとすらむ」仲忠、さらにえ仕う

(語釋)
(一)此一句誤脫あるべし
(二)母をいふ歟
(五)仲忠の身に不慮の事もあらば
(六)今夜の歡會を西王母の仙家の樂に劣らずといふ也
(七)琴を引く事叶はざる由を
(考異)
(三)かく―かし
(四)樣に―よう

まつるまじき由を奏し、此頃の歌をつくりて御覽ぜさせなどするに、帝わりなく言ふものかな、これに終に負けぬることのねたさ、など思ほして、これならぬ事何事をかは言はむ、と思すに、仲忠の母に年頃いかでかと、御心に思しわたり、昔より聞召しかけて、いかでとのみ思ほしけれど、世にも聞えざりければ、くちをしく思ほしけることの、今世の中にありと聞え、只今のらうさかたち人の二三のものの中に入るを、これが序に宣ひ寄らんと思して、朱雀「さらば朝臣は、絶えて仕うまつらじとや。かく、自らは得ものすまじかなるを、すこし、朝臣の手に思ほえたる、彈く人はありなむや」仲忠、「この族の手は、松方のみなむ仕うまつらむ。この一つ筋になむ侍る」うへ、朱雀「それは時々聞く。いまだ少し珍らしからむをこそ」と仰せらる。仲忠、「一つ族の手は、松方をはなちて仕うまつる人侍らず」上、朱雀「なほ思ひ出でられよや。さて無しや」仲忠、「覺えず」朱雀「女のなかに思ひ出でよや。誰ありなむ」仲忠、「思ほえずなむ侍る」など、宣ふ氣色あれ

(語釋)
(一)仲忠の母が行方不明なりしかば
(四)「らうあるかたち人」なるべし。「さ」を「にて」とかける本もあり
(五)帝の仰せが底意ある樣子故

(考異)
(一)仲忠の—仲忠が
(三)今世の—今の世の

ば煩はしう思ひながら、仲忠「仲忠、内戚にも外戚にも、女といふものなむ乏しく侍る。そが中にも、女方などは、さらに松方をはなちて、心やる方侍らずなむ。琴は、もし母方の外戚こそ、かの俊蔭の朝臣の琴は仕うまつらめ。それも然るべき筋の才に侍らねばにやあらむ」と奏す。朱雀「よし、それは然もあらむ。やんごとなき朝臣として、うつし傳へたる人なしや。絶えてなしと申さじばかりにはありもしなむ。それこそは今宵の賭物には出だされめ。それは早く。これをさへ聞かずば心憂からむ」と仰せらる。仲忠、「うつし取りて傳へ侍りし仲忠だに、絶えてその筋覺えず侍るを、ましてもとの師は、覺ゆること難くや侍らむ」上、朱雀「それをこそは今しも忘れにたらむとは思はめ。彼處こそは、覺束なくおぼされず參らせよ」と宣ふ。仲忠、「けに忘れにて侍らむ、よしばかりをば聞召されてしがなと思ひ給ふるを、いかでかは參らすべく侍らむ」と聞ゆれば、朱雀「早うそれをだに物せられずば、更に肯かじ」など許しげなく仰せらる。仲忠、如何はせむ、

(語釋)
(二)絶無とは言はれぬといふ位の程度の處ならば其の人あるべし
(五)仲忠の母をいふ
(六)母をばびく〳〵せずに參内せしめよ
(九)琴の傳來だけを

(考異)
(一)才に—さらに
(三)申さじ—申さ—申し—申さう
(四)こそは—「は」ナシ
(七)こそは—「は」ナシ
(八)なく—なくは

〔語〕
(一)どこへ行く積りぞや
(三)父の前駆

☆ 仲忠母を欺きて仁壽殿に伴ひ入る。朱雀院俊蔭女に懇情を訴ふ。俊蔭女琴を彈く。尚侍に任ぜらる。朱雀院螢の光に照して俊蔭女の容姿を見る。賜物。

〔考異〕
(二)ゆく人―ゆくべき人
(四)居給へるに―居給へり

参らせ奉らむかし、と思ひて、物も聞えで立つ。右大將見給ひて、兼雅「朝臣や。など然ばかり仰せらるゝものを、又何方ぞや。あやしく魂しづまらず異樣にもなりゆく人かな。見苦しかめり。しばし侍らへ」と宣ふ、宰相、仲忠「仰せらるゝことに由りてなり」と申す。兼雅「さては何かは」と宣ふ。宰相、近衛の御門に出でて、その日父おとどの御車のいと清らにて立てるに、己が車をばうち捨ててはひ乘りて、おとどの御前みな仕うまつる。

かくて宰相の中將三條殿にまかでて入る。北の方御衣など引き著て、その日御髪すまし干しかねて、干し居給へるに、仲忠、簀子につい居る。北の方俊蔭女「いかゞ、相撲は何方が勝ちぬる」仲忠、「左なむ勝ちぬる」北の方、「いとさうぐしきことかな。もし此方や勝ち給ふとて、人々參り集まりてさらふめるものを、いとくちをしき事かな」仲忠、「いとつらくも宣はするものかな。仲忠侍る方の勝つこそうれしけれ。思ほしことおとしたれ」北の方うち笑ひて、俊蔭女「それはた嬉しくて、こ

に心設などしたるに、然らねばさうぐしくなむ」仲忠、「左近引きて、大將よりはじめて參らむかし。別いても西(一)東にやあらむ。まことに、只今の内裏の面白さこそ物には(三)似ね。此方はた、なほすこし心殊なる御氣色ありつかし。それも彼方は例もし給ふこと、はた筋異なればにやあらむ。左の勝ち給ひて、たゞ今興あることこそ限なけれ。世に名高き舞の師、物の師といふものの限つどひて、萬の遊をし給ひつるを見給へるに、仲忠ひとり見給へつる効なさになむ、御迎に參り來つる」北の方、「いかでか御前の事をば見む」仲忠「それをこそは、仲忠はよく御覽ぜさせ奉らめ。天下に、西方淨土(四)の遊も斯くぞあらむ。御覽ぜむとあらば、御覽ぜさせ奉りてむ。はや〳〵(五)出で給へ」北の方、「漫なりとこそ思へ。又、彼處(六)に思ほさむこと如何あらむ。中將、仲忠「まさに然あらむことを聞えてむや。然るべくもあらず。早う(七)」と聞ゆ。北の方、「すゞろにはと思へど、語り給ふを聞けば見まほし」中將、仲忠「などてか　仲忠は、人のすゞろなりと思はむことは聞ゆべき。

(語釋)
(六)内裏の方々の思はくも如何あるべき

(考異)
(一)西ハにやあらむ—西や東にやあらむ

(二)只今の—「のハナシ

(三)物には—「は」ナシ

(四)をば—は

(五)はや〳〵—はやく

(七)早う—「う」ナシ

くちをしく、などてか然ばかりのことを見給へ知らざらむ。なほ早う(二)、すこし由あらむ御衣奉り、見所あらむ御容貌見出でて、いざさせ給へ」北の方、「衣は、切に求めば然もやあらむ、容貌はいづくよりかは、取う出べき。納めたる所もおぼえぬは」仲忠「それをこそは、いとよく取う出させ給ふ時あれ。よし見給へかし」など言ひ居たり。北の方、「然ばものせむかし。うしろめたきことを宣はむやは」とて御髪のなま濕りたる、急ぎ乾し給ふ。中將、仲忠「今日の相撲の、いとくちをしく、此方の勝ち給はずなりぬるに、仲忠が身には喜あり、殿の御ためには喜なむ無き。さるはたゞ一番になむ負け給ひぬる。たゞ今こそいと面白や。せめて(三)面白きを見給ふれば、よかひなきになむ、御迎に參り來つる。(四)甕の垣下のまうけに參りたる人々、この御許に。仲忠馬にてさふらはむ」とて、たどかの父大殿の檳榔毛の御車に、人給ひ三つして參り給はむとて、宰相、御厩の別當、右の馬の助に、仲忠「その御厩の御馬の中に、仲忠のともとかなるべき御馬(五)にうつしおかせて

(語釋)
(二)其位の分別は私とても無き筈はなし

(三)「せめて面白きをひとり見給ふればかひなきになむ」歟

(七)移レ鞍

(考異)
(二)早う—「う」ナシ

(四)よかひ—よろひ

(五)仲忠のともと—仲忠のひともと

(六)御馬に—「に」ナシ

賜へ」馬の權助國時聞ゆ、國時「いはゆる龍の駒といふとも、奉らむに、などかや然なる御馬や無からむ」中將、仲忠「自らだに、野飼に放れたる身を、況て乘物は、御廐の雜役をせしとも思はぬ」國時、「駒牽も近うなりぬれば、野飼も數に入り給ふ時やあらむ」中將、仲忠「それに數あまる時こそ」國時、「藤壺の御方をや今はおろし給ひてぬ」仲忠、「あな似げなの方の人々の夜妻や。まめやかには、その御前仕うまつらむ。馬裝束き給へや」國時「例の君のすきわざし給ふめり」とて、國時、

今さへやすきて見ゆらむ夏衣ぬぎもかふべき秋の暮には

風のうち吹く程に、中將立つとて、

仲忠　秋の夜の涼しきほどに立つ時はかふる衣もなほぞすきける

など言ひて國時、「まめやかには御裝は、いづれを奉らむ」中將、仲忠「うつしを おきて賜へ。何せむにか。無禮なり」國時、「他男ども、うつし侍らぬものあるを、

(一)雜役馬即ち駄馬をも不足とも思はずの意歟
(二)駒迎の節會には國々の牧に放ち飼にしある駒をひきて都に上る也
(三)思はぬ―思はむ
(四)駒牽―駒牽も近うなりぬれば、野飼も數に入り給ふ時やあらむ
(五)給ひてぬ―給へぬ―給はぬ
(六)給ふめり―給ふなりけり
(七)すきて―好きて、透きて
(八)馬のかざり
(九)御裝は―みすそひ―みそひは
(一〇)移し鞍
(一一)ちむになどかや―ちむにはとかや

さて奉らむは俄に男どもわづらひ侍りなむ」中將、仲忠「人はなほ例の御裝奉れ。仲忠、なほ物數ならず、世の心にも叶はねば、なほ畏まりをだにこそあれ。人はなほ例の癖を」と言ふ。國時、御廐に三十餘疋立てる御馬のなかに、吹上の濱にて得給へりし、つるぶちにまさる御馬なし、それに移おきて、中將のために率き出でなどしてあるに、北の方、すましたる御髪の乾たるを、かい梳り、花紋繚の地摺の御裳に、唐裳かさねて、すどしき程なれば、綾のかいねり一襲、あか色二藍がさねの唐衣、いとめでたき奉り、「何でふ、珍らかなるわざもせで斯くばかりにて」とおとな六人、童四人、下づかへ二人して出で立ちて、御簾もとについ居給へるを、庭に、たにともしてさふらふ松明の光に、中將見るに、まして更なり。御髪のほど長に二尺ばかり餘りて、少しく丸がれたる髪を、かき洗ひたるすなはち、一脊中こぼるゝまでであり。更に一筋散りたるもなし。姿のうつくしげなること、更にいとめでたし。長たちよき程に、姿の清らなること、更にならびな

(一)たにに―ふさに歟
(二)せで―せず
(三)二尺―五尺

し。顔かたち更にも言はず。仲忠、これを見るまゝに、藤壺を思ひ出でて、この北の方を、さらに親と思ひわすれて、何處なりし天女ぞと思ひ居たり。北の方「然らば車寄せさせ給へ」中將、仲忠「たゞ今、おとゞの見給はぬこそくちをしけれ」とて、仲忠「御車寄せよ」とて手づから御几帳さして、後におとな二人、人給につぎ〳〵人乘りて、出で立ち給ふ。中將移に乘りて、車の轅近う添ひて立つ。この殿の甕の設しに參れる四位、五位、六位など合せて八十人ばかりして參り給ふ。かくて縫殿の陣に車ひき立てて、中將、仲忠「しばし」とて内に參る。仲忠「御前の人々はな參り給ひそ。御車のもとにさふらひ給へ。仲忠はひとり參りなむ」とて入る。御供人、松明ともして、御前に數しらず多かり。

かくて立てるほどに、中將殿の上に參りて、仁壽殿の御前にさふらひ給ふ。上、御覽じて、朱雀「如何にぞや。かの言ひし事は」と問はせ給ふ。仲忠「まだ乘物ながらなむ」と奏す。帝うち笑はせ給ひて、朱雀「さらば賭物ゆるす」と仰せらる。

（考異）
（一）こそくちをしーこそいとくちをし
（二）近うー近く
（三）立てでー立て
（四）内にー内へ
（五）な參り給ひそーナシ
（六）笑はせーシ

（語釋）
（一）妹といへど年は姉なるべし、梨壺といふ兼雅の前妻、嵯峨院の女三の宮の腹
（二）梨壺
（三）女三宮、「こそ」は「ぞ」なるべし。「こそ」たき本もあり
（四）兼雅前は此女三宮と非常に睦ましかりしに
（五）俊陰女
（六）女三が
（七）「ならむ」は「ならぬ」歟、此仲忠の御器あらん歟
（八）「御用ひなされぬかの意
（九）梨壺をいふ
（一〇）東宮に
（一一）嵯峨院に御出ある由など聞きしは

仲忠、御答して立ちて、かの妹の君の東宮にさふらひ給へる御局にまうでて見れば、君は上におはすれど、母宮こそおはする。この大將、さばかりいみじき御中におはせしかど、この北の方につき給ひにしより、あたりにも寄り給はず。思し煩らひ給ひて、御女を東宮に奉り給ひて、これをかしづきものにて、内裏にのみなむおはしましける。そこに中將參りて、仲忠「いかで人々にものとり申さむ」と御簾の下にて言ふ。宮、女三「誰ぞや」と御口づから宣ふ。仲忠「仲忠」と聞えて、仲忠「いかで人給ならむ御几帳參らむに、いかに里へ取りに遣はするなむ」宮、女三「いときたなげなりとも、やは」とて、女三「月頃、わかき人のひとりさふらひ給へば、うしろめたさにこゝに侍るを、こと人はさもこそ訪はせ給はざらめ、其處にさへいと疎くこそ思したれ」仲忠、「あなかしこ。宮にさふらひなどする折侍れど、此處におはしますらむと言ふこと、え承らずなむ侍る。中の大殿にさふらひて聞えさせしかど、院になど承りしは、此處にこそおはしましけれ。畏けれど、

嬪君など宮にさふらひ給へば、数ならず思さるとも、世の人の親しくさふらはむ(一)よりは、心殊に思さむなむいと〳〵嬉しく侍るべき」宮、女三「さらにも宣ふかな。このさふらひ給ふ人は、親もおもほし忘れ給ふめれば、世の中にあはれに心細げ(二)なる人なめり。同胞も何につけてか思さむ。なほ哀なるものの心苦しきに思ほし(四)て、とぶらひ給へかし」仲忠、「あなかしこ。更に、仰せごとなくとも、聞えさすまじき程ならばこそあらめ」など聞えて、仲忠「ことぐにとり申さむとするを、急ぐこと侍ればなむ」とて急ぎて立つ。(五)(六)

その御局より、花紋繚のかたびらかけたる三尺の几帳二具賜はりて、母北の方の御許へ持て行く。上おはしまして、仁壽殿の南の廂に、よそひつゝ、西の方に御屏風御几帳など立てさせ給ひて、朱雀「上達部しばし彼方に」とて、東の方にわた(七)して、其處におはします。仲忠祐澄の君を、仲忠「いざ給へ。仲忠、切なる人こよひ參らするを、御蔭にかくして率て入り給へ」仲澄「誰ぞや。いざかし」とて率て(八)

(語釋)
(一)梨壺
(二)仲忠を
(三)梨壺は秉雅も構はぬ故
(四)仲忠が
(五)色々の事を一々申上げたけれど
(七)上達部を退けて
(八)「祐澄」の誤
(考異)
(六)ことぐに―「に」ナシ

さてやんごとなく睦ましき人に几帳持たせて、父おとどの御靴もたせて、仲忠「はや下り給へ」と言ふ。俊蔭女「物思ほえずも思ほゆるかな。いづくに下りよとてぞ」中將、仲忠「あなさがな。な知ろし召しそ。さりとも悪き所にはおはしまさせてむや」北の方、俊蔭女「あな苦し。異樣なる參りかな。さる心も思はぬものを。かたはなる目をも見るかな」と宣へど、昔より中將の言にしたがひ給へば下り給ふ。童(一)四人、御几帳前にさしたり。おとな後に立ちて、中將靴はかせ奉り、も取らせて、(二)御髪つくろひ、かしづき立てたる樣、めでたきこと限なし。いと美しげなり。めでたくつくろひて、我もこと君だちも、几帳さゝして參らせ奉る。上、出でおはしまして、みな人出ださせ給ふ。御殿油消させ給ふ。御松明ども(四)も皆消たせ給ひて、まうのぼらせ給ふすなはち、上、朱雀「御路のしるべせむ」とて、朱雀「なほこれより」と宣ひて、御局へ入れ奉り給ひて、中將然りげなくて居たれば、大將さらに夢(五)にも此の北の方ならむとも知らず。上、御几帳のもとに御衾うち敷きて居給ひて、

(語釋)
(二)「も取らせ」の上脱字あるべし
(三)仲忠も
(五)「給ひて」は「給ふに」又は「給ふに」なるべし
(六)秉雅
(考異)
(一)目をも―「も」ナシ
(四)どもも―ともに

（語釋）
（一）俊陰女
（四）今夜の仲忠の樣子がいつもより變なりしを
（五）俊陰
（六）古風な家で
（七）俊陰女を入内せしめよと俊陰に申込みしかど
（考異）
（二）思ひつるに―思ひ侍りつるに―思ひつるは
（三）とそは―は―ナシ
（八）多くて―おほえて

客人（まらうど）に御物語（おんものがたり）し給（たま）ふ。朱雀「こよひ、仲忠（なかただ）の朝臣（あそん）に言（い）ふことありつれば、「自（みづから）は得（え）ずなんあるべき。代（かはり）を」など物（もの）しつれは、如何（いかが）なる代（かはり）をかは、と思（おも）ひつるに、年頃（としごろ）の志（こころざし）の顯（あらは）るゝにこそはありけれ」北（きた）の方（かた）、俊陰女「いと怪（あや）しく、例（れい）よりも思（おも）う給（たま）へられつるを、俄（にはか）に、さふらふべき樣（さま）にもあらず、言ひ急がし侍りつれば、物（もの）も思（おも）ほえず　まかり出（い）でぬるこそ、いと怪（あや）しけれ」上（うへ）、朱雀「何（なに）か怪（あや）しからむ。常（つね）に斯（かく）こそあらまほしけれ。興（けう）ある夕暮（ゆふぐれ）にこそ、其處（そこ）に參（まる）り來（き）て、承（うけたまは）らまほしきことあれど、いえ流石（さすが）に所（ところ）せき心地（こころち）して、心（こころ）もとなくありつるに」など、年頃（としごろ）むかしの事宣（ここのたま）ふ。朱雀「むかし、治部卿（ぢぶきやう）の朝臣（あそん）のありし時より、なほいさゝか物（もの）の音（ね）をかき鳴らして、聞（き）かせ給（たま）はなむ、と思（おも）ひて、御迎（おんむかへ）せむと、常（つね）に思（おも）ふことありしかど、朝臣（あそん）の在（あ）りし限（かぎり）は、さらに怪（あや）しく古（ふる）めきの族（やう）にて、かゝる筋（すぢ）のことも疎（うと）ましげにやありけむ、たまく「まゐらせ給（たま）へ」とものせしかど、聽（きき）入（い）れられずなりにき。その後（のち）は、さらに世（よ）の中（なか）に聞（きこ）え給（たま）はずなりにしかば、志（こころざし）のみ多（おほ）くて、少（すこ）しも知（し）らせ奉（たてまつ）らずこそなりにしか。さるは、斯（かく）平（たひら）かにものし給（たま）ひけるものを」北（きた）の方（かた）、俊陰女「年頃（としごろ）は、世（よ）の中（なか）にもすまぬ樣（やう）に侍（はべ）りし。昔と今（いま）となむ、この世（よ）の中（なか）は見給（みたま）ふる」朱雀「中頃（なかごろ）は、何（いづ）れの世（よ）にかものせられけむ。昔（むかし）ながら對面（たいめん）賜（たま）はらましよりも、まして志（こころざし）まさる事（こと）こそあれ。しか思（おも）ひし時は、目馴（めな）れて侮（あなづ）りきこゆる事（こと）もありなまし。斯（かく）てあり難（がた）き事（こと）こそものし給（たま）ふめれ」北（きた）の方（かた）、俊陰女「何事（なにごと）にか侍（はべ）らむ。心（こころ）まさりしぬべきことにも侍（はべ）るなるかな」上（うへ）、朱雀「おほえ給（たま）はずやは。自（おのづから）ら、言（い）はねど著（しる）く見（み）え給（たま）ふらむとなむ思（おも）ふ。志（こころざし）聞（きこ）えはじめては、聞（きこ）ゆる人（ひと）もきゝ給（たま）ふ人（ひと）も、暇（いとま）なくなむ。まづ、今宵（こよひ）の人（ひと）の代（かはり）とものし給（たま）ひぬるを、かの人（ひと）のゆづり聞（きこ）ゆらむ事（こと）を早（はや）」と宣（のたま）ふ。俊陰女「さらに讓（ゆづ）るなどある人も侍（はべ）らずなむ」上（うへ）、朱雀「あなさがな。御許（おんもと）にさへかくこそは宣（のたま）はざらめ。早（はや）う」と宣（のたま）ふ。御いらへ、俊陰女「何事（なにごと）にか侍（はべ）らむ。さらに言ひ知（し）らする人（ひと）なむ侍（はべ）らぬ」上（うへ）、朱雀「仲忠（なかただ）の朝臣（あそん）は、聞（きこ）ゆることは無（な）しやは」北（きた）の方（かた）、俊陰女「さらに物（もの）も申（まう）さずなむ。たゞ「陣（ぢん）のわたりに物見給

（語釋）
（一）かく一旦打絶えて對面する故一入珍重に思ふと也
（二）仲忠の代に來し事故其代の役即ち琴ひく役を早くつとめよ
（五）其方までが其樣な事は言はぬものぞや
（考異）
（三）などーと
（四）きがなーさがなや

へよ」とものし侍りてなむ、斯くさふらはすべかりけるを、氣色にも出ださで侍りつれば、何ともなく、里姿もひきかへず、急ぎまうでつるを、「御垣下に隠れて、物見さふらべき、葎の蔭なむある。なほまかり下りよ」とものし侍りつれば、常も空言し侍らぬを思ひ給へてなむ。玉の臺までさふらひにける」上、うち笑はせ給ひて、朱雀「餘所なれば、こよも効なしや、御本意ありつらむ葎の下ならねば」北の方、俊陰女「今はその葎も門さしてなむ」朱雀「うつろひ聞ゆる人もありけり」と宣ひて、朱雀「まことか、中將の朝臣の聞ゆることも無かりつらむは。然らば聞えむかし。古き人の前に物語するやうにやあらむ。今宵、中將の朝臣の切なる言事の數ありつるを、「更に自らは物もおぼえず。物忘せぬ人をものせむ」とありつるは、げに族の内にこそはものせられけれ。さればそれをも聞えむとてなむ」とて、仲忠に賜ひつるせいひんの御琴を、五箇の調ながらとり出で給ひて、朱雀「これをなむ、かの朝臣に、「今宵のいひごとの數に仕うまつれ」とものしつれば、「御許に聞

(語釋)
(一)家に居る時のまゝの姿で
(二)「さふらべき」は「さふらふべき」の誤
(三)仲忠が
(五)仲忠が物忘れせぬ人といへるは然らば母なる其方をいへりと見ゆ
(考異)
(四)おぼえず—おもはえず

えよ」と申されつる。これさらに聲もかへじ、たどこのみながら、この調の手をとどめ給ふ手なくあそばせ。琴といふもの、聲あまたなれど、なほ五箇なむ、怪しくあはれに思ほゆる」と宣ふ。北の方、俊陰女「さらに、人達に聞えさせたるにや侍らむ。琴とは何の名にか侍らむ。それをだに得知り侍らぬに、怪しくも聞えさせけるかな」上、朱雀「この箏の名の絶えぬを、な隠し給ふこそはかなけれ。さても免し聞ゆべきにもあらずや。まさにそれよりは代へてむや。昔より著きよめをば」北の方、俊陰女「知り給へらば、いかど聞えさせざらむ。さらに琴といふ物、餘所にても見給へずなむ。昔さもやありけむ、年頃さらに目に近く見給へねばにやあらむ、かけてこれとなむ思ひ給へられぬ。そが中にも、五箇なむ更に覺え侍らずなむ。たいぐしう侍れど、仲忠こそすこし昔の人などにも、數多の手彈きまさりて仕うまつるめりしか」とて更に手も觸れず。上、朱雀「これ、つらき御事なり。まさに若き時よりしつき給へらむこと、いと然忘るばかりあらむや。才といふも

(語釋)
(一)譏あるべし
(二)殘す處なく
(五)「な隠し」の「な」は衍文なるべし
(六)「よめ」は「夜目」歟
(考異)
(三)上—ナシ
(四)琴の名のたえぬを—御ふけうのたえぬを

の、若くよりつきにたる事、さらに年經れど忘れぬものなり。中將の朝臣は、なほ知らるゝことのあたりにと申さるゝにこそあめれ。まことに忘れなばいとくちをしき事にこそあべけれ。天下にいふとも、いと氣離れてあるまじきことには人憎からぬなむよき。昔の朝臣の、さる世の中の一のものに物せられし後、おもとにのみこそ物し給へ。さる有難き手を傳へ取りて、誰も〳〵すこしづつなりとも聞え給ふべかりける。まめやかに斯う宣ふこそ、いとつらけれ」と切に免さず宣ふ。かたみに、上も北の方も、宣ひかはして、上、朱雀「かきなすことの」とこそ言へ。つらしや」と宣ひて、

朱雀「よそにこそ音をもなくてはさ夜更けて彈かぬもつらき琴にもある哉

「君がつらさに」とは、これらなりけむかし」北の方俊陰女「秋の調は、ひくものこそあなれ」とて、

俊陰女「秋風のしらべて出だす松の音は誰をたつたの山と見るらむ

〔語釋〕
(一)よく琴の彈き方を知り居る母に代を賴む積なるべし
(三)人に憎まれぬ樣にするがよし
(四)俊陰
(六)古今集「秋風にかきなす琴の音にさへはかなく人の戀しかるらむ」
(七)此歌誤あるべし
〔考異〕
(二)あたりにと―「と」ナシ
(五)聞え給ふ―聞えつ

立田姫かと思ひ給へらるゝかな」上、朱雀「いでや手觸れらるゝ人もなければ、みな塵居にたりや。

水を淺みひく人もなき足曳の山の小川は塵ぞしらぶる

さるは宿世もありとか聞く」北の方俊陰女「目に見ずはいかゞ」とて、

俊陰女「水をあさみみさごもみゆる山川は秋の調もひかずやあるらむ

上、朱雀「なほ遊ばし見よや。

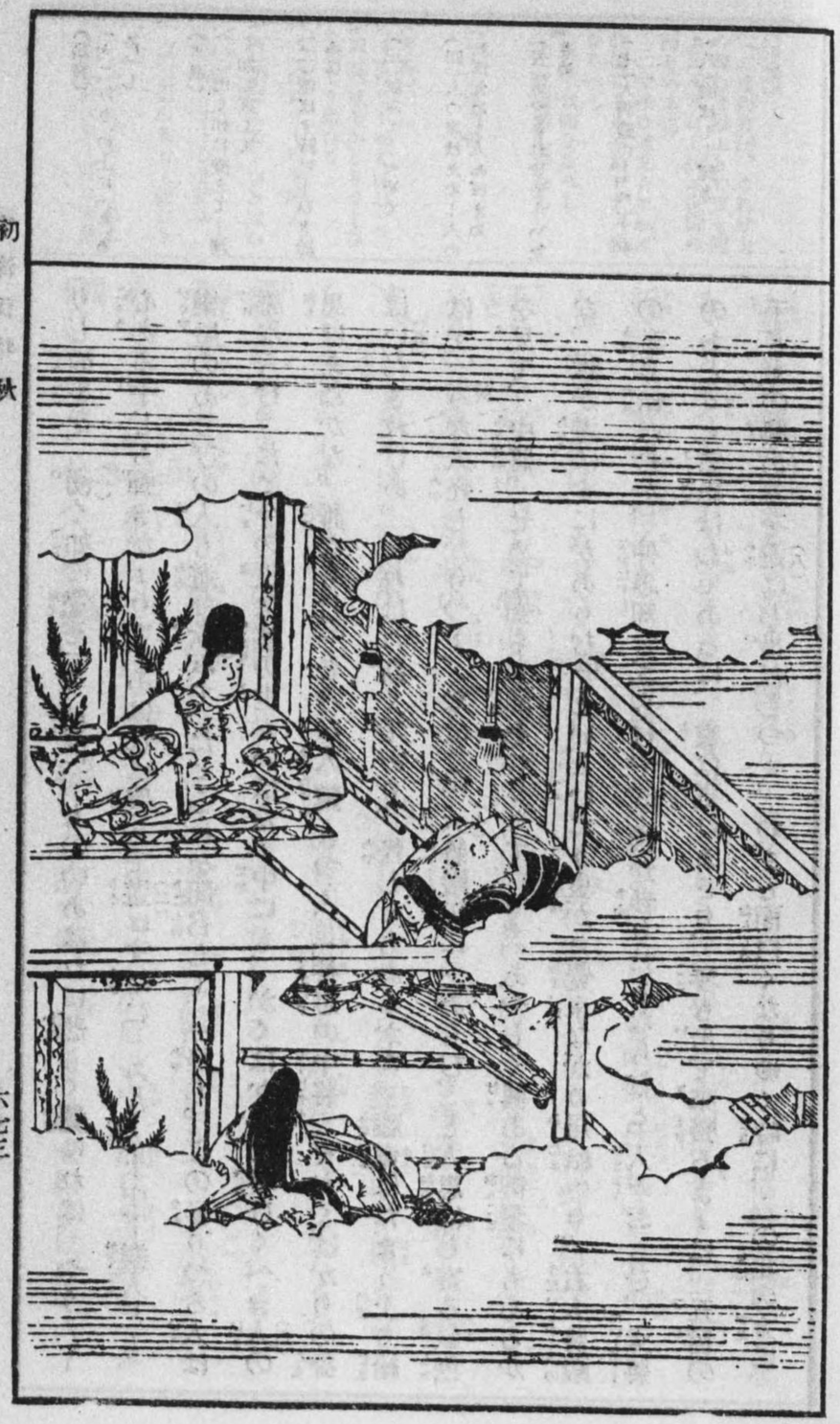
みもり田にひきはじめてば山川の底より水はたえず出でなむ

志は泉よりまさりなむ。よし〳〵見給へ。まめやかにかう宣ひてやあらむとする。さてはえまかで給はじ。早うこそ」といと切に宣ふ。北の方、おぼろけなう聞え給へば、辛うじて、いとはがなき手ども、いとほのかに搔き鳴らし給ふ。上、朱雀「なほなほ、かく覺束なく承れば、ましてこそ心憂けれ。すこし聞き所あらむ手を一つ二つあそばせ」など宣ふ。すこし面白き手など遊はすに、この御琴、昔のな

〔語釋〕
(一)「みさご」は「いさご」歟
(二)「みもり田」誤あるべし「みかり田」とかける本もあり
(六)誤脫あるべし
〔考異〕
(三)手ども―ことてうども
(四)聞き所あらむ―心あちむ―よろしからむ
(五)遊ばす―ひき給ふ

〔語釋〕
(一)未詳「てけ」又「てす」
(二)宴の松原は禁中にあり、「宜陽殿の北掃部寮の西近衛の南朱雀東」と袖抄に見えたり
(四)兼雅
(六)仲忠
〔考異〕
(三)あそばす―ひき給ふ
(五)大將―中將
(七)仕う―「う」ナシ
(八)仕う―「う」ナシ
(九)ことども―ことと―ともも

んやういしものことなれば、殊に彼らに劣らず、いと切にあはれなること添へる御琴にて、北の方心にも入れずかき鳴らし給へど、さる上手のてけの手どもを、逸物にしつき給へる人の、さるは殊に秋の夜の更けゆく宴の松原の風に調べあはせて彈かるゝに、あはれに面白きこと物に似ず。北の方琴あそばす事、むかし大將のおとゞに對面し給ひし山に住み給ひし時、彈き給ひけるまゝに、其の後さらに住み給ひける世に手ふれ給はず。この大將のおとゞにも、さらにこの琴彈きてきかせ奉り給はず。宰相中將は、時々紀伊國などにても仕うまつられけれど、この北の方は、さらに、里に出で給ひて後、琴に手ふれ給はずあるに、かくわりなく聞え給へば、仕うまつり給ふ。なほ、年頃騷がしくなどして、稀にこそ思ひ出で給へ、忘れものし給ふを、この琴に手ふれ給ふにつけて、よろづ昔のことども思ほえ給ひて、あはれなること限なし。親の御手より彈き取りし手、中將にかの山にて習はせしこと、又この里に出でむとて彈きしなん風の聲など、よろづに哀な



りし故事を、湧く如に覺えて、切に、もののあはれに悲しく覺ゆれは、やう〳〵心ある手ども彈きかよりて、あはれに覺えて遊はす時に、みな人上中下樂人ども、樂屋のあそびの人も遊び歌みて、たゞこれを聞召して、「怪し。この參りつる人は誰ならむ。たゞ今の世は盛の世といはるゝ中にも、かくばかりの琴ひくべき人の思ほえぬかな。誰ならむ」とみな人驚きつゝ、「仲忠の中將こそかくばかりの聲はいだされけめ。それはた斯くてあり。怪しくもあるかな。藤壺はたまう上り給はず」みな人怪しがりつゝ、なほこの大將殿のにやあらむ、と人思ほし寄る氣色を見て、中將、せめて知らず顔をつくりて、仲忠「あやしく興ある御琴にもあるかな。誰が遊ばすにかあらむ」といといたう哀がり覺束ながり居給へり。右大將殿の參り給はむを、仲忠知らざらむやは、誰が參りたるならむと、人々おもひ、大將のおとども然思ほしてあるに、夜は更けまさり、琴も出で來勝るまゝに、五箇の手どもの興あるを遊ばし出だしつゝ、わざと面白くなりゆく時に、この北の方に、

〈語釋〉
(六)「みな」の上に「と」あるべし

〈考異〉
(一)湧く如に覺えて—湧く如おぼして

(二)遊ばす時に—ひき給ふに

(三)歌みて—やめて

(四)人の思ほえぬ—人のおぼえぬ—人おぼえぬ

(五)いだされけめ—いたさめ

(七)大將殿の—(の)ナシ

(八)遊ばし—彈き

上せめて御心留まる。昔より聞召しかけたるうちにも增りて、あはれと思しまさること限なし。さて仰せらるゝ、朱雀「文の手どものなかに心あらむ手ども出で來む折には、涼仲忠拍子まうし、仲賴行政はいまめきたらむ唱歌仕れ」など仰せらる。かゝる程に、めでたく遊ばしかよりて、其の聲いとしめやかに彈き給ふ。上、手どもを取り出でて御覽じつゝ、この手には何といふありけり、又何と彈くべき手なりなど宣ふ。この北の方、ふんのことつくして、珍らしき手をさへ盡して遊ばす。ひとなみは、五箇のうへふのこと遊ばして、しをすさの聲に遊ばす樣、おなじくらゐかへしてかきかへ給ふさまのことの音、面白きも理なり。おなじくかい彈き給ふさまの手づかひなむ、かなしくめでたかりける。朱雀「このめくたちを、昔、唐土の帝の、軍に負け給ひぬべかりける時、胡の國の人ありて、その軍を鎭めたりける時、天皇よろこびの極なきによりて、「七の后の中に願ひ申さむを」と仰せられて、七人の后を盡にかゝせ給ひて、胡の國の人にえらばせ給ひける中に、

〈語釋〉
(二)春海翁曰、これは上の琴ひき給ふとて又を開き見そなはし給ふ也琴の譜をいふ也

(三)仲賴は遁世したれば此處にあるべからず。誤なるべし

(五)手は譜なるべし

(七)此處解しがたし

(一二)洪元帝

〈考異〉
(一)思し—おもほし

(四)遊ばしかゝりて—ひきかゝり給ひて

(六)遊ばす—ひき給ふ

(八)遊ばして—ひき給ひて

(九)遊ばす—ひき給ふ

(一〇)面白きも—面白きと

(一一)めく—めし—めこ

(一三)時天皇—時に天皇

〔語釋〕
(一)王昭君
(二)以下王昭君の心
(六)此處解しがたし
(九)此邊解しがたし
(一二)俊陰。巨勢氏曰、俊陰の卷には帝俊陰の琴は聞覺え給はず嵯峨院とそよく知食すべき由ありて琴は帝俊陰の琴を聞知り給ふ樣にあるは如何

〔考異〕
(三)とくばく―とゝばく
(四)なかに―なかにも
(五)遣はし―ナシ
(七)めくたち―めいかくたち
(八)とて―ナシ
(一〇)このはち―このは
は―いのはく
(一一)これ―それ

すぐれたる容貌(一)ありける。そのうちに、天皇思すこと盛なりければ、その身の愛を憑みて、こくばくの國母、夫人のなかに、我一人こそはすぐれたる德あれ、さりとも、我を武士(二)(三)に賜ばむや(四)はの憑みに　容貌畫きならぶる繪師に、六人の國母は、千兩の黃金を贈る、すぐれたる國母は己が德のあるをたのみて贈らざりければ、劣れる六人は、いとよく賣きおとして、勝れたる一人をば、いよ〳〵畫きまして、かの胡の國の武士に見するに、「この一人の國母を」と申す時に、天子は言かへずといふものなれば、え否びず、この一人の國母を遣はし給ふ時に、國母、胡の國へわたるとて、歎くこと、こかの音を聞き悲しびて、乘れる馬の歎くなん、このめくたちなりける。それを聞くに、獸の聲にあらじかしとて、それをあそばしつる、御手一つなく、あらばともおもほえたれ」と宣ふほどに、このはらに遊ばしいたる。これかのなむやうのいへのぞうなりける。帝聞召して、朱雀「この遊ばす手は、昔の故朝臣の仕うまつられし手に等しくなむありける。中將の朝臣のは、よ

〔語釋〕
(五)天木集の歌下の句は「思ひいづるのなくぞわびしき」
(七)「仲澄」の誤なるべし、事前にいへり
(八)俊陰女をいふ

〔考異〕
(一)覺えし―おもほえし
(二)御許に―御許の
(三)遊ばす―ひき給ふ
(四)ふかき―ぬべき
(六)このはち―このは
(九)このはち―このは
(一〇)音―ナシ
(一一)帝―てんわう

ろづの事忘れて思はせて、せめて物の興なむ覺えし。御許に遊ばすは、よろづ物のあはれなむ思ひ出でられ、昔の人の聲など思ほえ、ふかき志のまさりたるなむ思ひ出でられける。心細くあはれなることは、飽くまで御許になむ遊ばしける。「忘れてもあるべきものを葦原に」(五)とこそ聞えつべかりけれ。この昔の思ほゆる手を遊ばせよ」などかきかへし給ふ時、ある手をばそれに勝して彈き、なき手をばことゞにつけて、めでたく彈き給ふ。うへ、御心にふかく此の北の方を思し入りおはします。つぎ〳〵遊ばしつゝ、このはらにかきかへり給ふほどに、仲賴、行政、唱歌仕うまつりて、涼、仲忠、詩誦しなどする聲、只今の上手、この道の人四人、昔の逸物(八)の筋一人、あはせて、さる古き新しき　上手たちの御遊なれば、いとしめやかに興あること限なし。上、朱雀「このはらのあはれなるに、心凄き音を聞(九)けば、理なり。この手なん、かの胡の國へわたりたる國母、胡の國とわが國と越えける境の程、歎きける手なり。げにさる帝の正妃として、一の后としてありけむ

に、然る武士の手に入りけむ心地、如何なりけむ、と思ふに、まして遊ばします様のことなるこそ、いみじく哀なれ。關許されぬ人あるには、このはらおとらぬ聲出だしつべき心地なむする。境越えけむ國母に、關許らぬ國王をこそ思しもおとさどらめ」北の方、俊蔭女「如何なる關守かは許し聞えさせざらむ」上、朱雀「近きまもりのちこそはたかく居ためれ」など宣ふ。このはらを、一度はほのかに搔き鳴らして、今一度ばかり、心とどめて搔き立てて仕うまつり給ふに、そこばく聞召す限なむ、男女にけなく、みな涙をながしつゝ聞召し、哀がり給ふこと限りなし。

朱雀「いでや、何をかは今宵の御祿にはすべからむ。更にこの遊ばす手どもにあふべき祿こそ思ほえね。涼仲忠が、紀伊國の九日の祿を、まだ行はぬかな。つかさの大將を、八月の頃ほひになりなば、祿遲しと責め申せ。さて今宵の祿をば如何すべき。涼仲忠はきく〳〵あり。御許には、自らをやは得給はぬ。中將の朝臣、紀伊國のろくには、女をこそ得たれ」とて、御前なる日給の簡に、內侍のかみにな

(語釋)
(一)俊陰女には兼雅といふ士のあるをいふ
(三)朱雀自らいふ
(五)誤脫あるべし、「近き衛の陣こそは堅く居ためれ」歟
(七)涼にはあて宮仲忠には女一宮を賜はんとありし事、これは紅葉の賀の時の事なり
(八)正頼
(九)誤あちんか
(一〇)朱雀自身を冥っては如何

(考異)
(二)このはら—このはゝ
(四)許らぬ—ゆるしぬる
(六)なむ—衍歟
(一一)得たれ—取られたれ

すよし書かせ給ひて、それが上に斯くなむ、

朱雀「目のまへの枝より出づる風の音は枯れにしものと思ほゆるかな

これが哀なればなむ」と書きつけさせ給ひて、上達部たちの御中に、朱雀「人々これに名して下されよ」とて給びつ。左のおとど見給ひて、いと覺束なし、誰ならむ、と思せど、御手づからのことなれば、名し給ふ、「左大臣從二位源朝臣季明」と書きつけて、その傍に、

季明　風の音は誰もあはれに聞ゆれどいづれの枝と知らずもあるかな

おほつかなき宣旨になむ。

と書きつけて右のおとどに奉り給へり。見給ひて、あやしく、只今こともなき琴の聲いだして、內侍のかみになるべき人絕えてなし、琴引きける人の族にこそはあめれ、と思ほし寄りて名し給ふ、「右大臣從二位藤原朝臣忠雅」と書きつけて、斯くなむ、

(語釋)
(一)「おもはえぬかな」歟
(二)署名して
(三)俊陰女なちんと推したる也

（語釋）
（二）忠雅に聞き合せたる也
（三）『されど』歟
（八）未詳。「陪臚」と傍書したる本もあり。一本「かいろう」

（考異）
（一）はなわのーはねはの
（四）「如何に」ーナシ
（五）思しーおもはし
（六）こそはーこそ
（七）と宣へばーナシ
（九）などーと

忠雅たけくまのはなわの松は親も子もならべて秋の風は吹かなむ
と書きつけて左大將に奉り給ふ。左大將見給ひて、これかれ參りて、「これは何でふ事ぞ」正頼「さらば」とて聞え給ふ。右のおとど、忠雅「いさや。さらばかくなん思ひ給へ寄りたりつる。如何に然は思さずや」正頼「いで、然も知らずかし。さこそ言へ、いたく思し寄りたるかな」とて名し給ふ、「大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使源朝臣正頼」と書きつけて、
正頼はなわより吹きくる風の寒ければうべも小松はすゞしかりけり
と書きつけて右大將に奉り給ふ。見給ひて、兼雅「怪し。こは何でふ事ともぞ。兼雅は心得ずや」と宣ふ。上、朱雀「怪しうこそは心得給ふべき事にもあらずかし。覺束ななから御名を早」と宣へば、右大將、「かけろうこそ、これには奉るべかめれ。覺束なくては」と宣ふ。上、朱雀「おほめくよりはかなくてやは有りけむ。いで、な知らせそや」など宣ふ。「從三位守大納言兼行左近衛大將東宮大夫藤原朝臣兼雅」

と書きて、
兼雅ふきまさる松より出づる風なれやことなる波の涙おつるは
と書きつけ給ひて、民部卿に奉り給ふ。「從三位權大納言兼民部卿源朝臣實正」
と書きて、
實正年經れど枝もうつらぬ高砂はとなりの松の風やこえまし
と書きて、左衛門督に奉り給ふ。それ名し給ふ、「中納言從三位兼左衛門督藤原朝臣まさなり」とかきつけ給ふ。
まさなりいにしへのまつは枯れにし住吉のむかしの風は忘れざりけり
とて、平中納言に奉り給ふ。「中納言從三位平朝臣正明」と書きて、
正明きく人はあねはの松の風なれや昔のこゑを思ひいづるは
とて、宮のかみに奉り給ふ。「中納言中宮大夫從三位源朝臣文正」と書きつけて、
文正松風のむかしの聲にきこゆるは八十島よりや吹きつたふらむ

（語釋）
（一）中宮大夫

など心〻に御名して下りぬ。

かくて北の方は、こかの手どもの調(一)みな仕うまつりはて給ひぬ。上、飽かずめでたしと思ほせど、こかに調かへて仕うまつり給ふべきにもあらねば、あかず心もとなしと思しながら、上、朱雀「こかは、かく覺束なく思ほゆれど、かごとばかりは、遊ばしつめり。今はこれよりかへらむ聲に調べて、今一度の節會にあそばさむ聲を調べ、まかで給へかし」と宣へば、なむかくの聲にしらべてさふらひ給ふ。(二)上、朱雀「年頃過しけることは、嘆きても效なし。今よりだに、なほよろしからむ節會ごとに、すべて節會一つに、手一てづつあそばせ。又、節會ならずとも、春秋の草木のさかり(三)、見所あらん夕暮などに　なほ面白からむ手あそばして聞かせ給へ。(四)別いても千年のうちに出で來む節會ごとに遊ばすとも、この御手の盡くべきことの無きなむ哀なりける。人の世は限あるものを、己が限にしてともの千年(五)經るとも盡きざらむことのかたき、承りさして世のかはらむは、あはれうしろめたき事。いかでか其處にも此處にも、萬歳の齡もがな。とこそ思へ。

千とせふる松よりいづる風の音は誰かときはに聞かむとすらむ」

内侍のかみ、

後降女「聲たえずふかむ風には松よりも齡ひさしき君ぞすゞまむ誰にかあらむ」と申し給ふ。朱雀「それが不定なるにこそ哀なれ。よし、御許にも草木となるとも、この琴の音をそれに隨へて、この遊ばすをば承りてむ。木とならば鳥の聲にても承りてむ。草とならば虫の聲にても聞き、山とならば風の音にても聞き、海川とならば波たかき音にてもなむ聞かむ」と宣ふ。朱雀「楊貴妃が七月七日長生殿にて聞え契りければ、お許には今宵仁壽殿(一)にてを契り聞えむ。さらに長生殿の、ながき人の契に思ほしおとすな」と世中のあはれなる事を宣ひてかくなむ、

朱雀「ひめ松の鶴の千年はかはるともおなじ川べの水と流れむ

(考異)
(一)調みな―調どもみな
(二)なむかく―なむかぜ―なをむかへ
(三)さかり見所―さかりの見所
(四)別いても千年のうちに―別いても〻千年のうちに―まいても千年がうちに
(五)ともの…承り―とものつきんことのかたきことと承り

(語釋)
(一)長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時在天願爲比翼鳥、在地願爲連理枝」

(考異)
(一)にてを―「を」ナシ

そこに、然思せかし。こゝにはた更なり」内侍のかみ、俊陰女「ことてしは」といふことのあれば、えなむ」とて、

俊陰女淵瀬をもわかじと思へど飛鳥川そなたの水や中淀みせむ

とのみなむ。更に身には「深き心を」とのみこそ」上、朱雀「よし、さて試み給へかし」とて、

朱雀もろ共に流れてを見む白川やいづれの水か湧きはまさると

など宣ふ程に、内膳に仰せごとありければ、御前の物、いと清らにてまゐれり。淺香の折敷四十、それに折敷の臺、敷物、いとになく清らにて、御器どもなど更にも言はず、同じく盛りたる菓物、乾物、よのつねの食物にはあれど いとめでたし。上、左近の實頼の中將、兵衛の督などに、朱雀「かくてものし給ふに、今宵この琴仕うまつる人、いとめでたき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物すこし情づいてたゞ今ものせよ。菓物など、いと興ある物をえらびて仕うまつれ」

〈語釋〉
(一)食膳

〈考異〉
(二)まゐれり―まゐる
(三)あれど―あれども

と仰せられければ、この君だちの手をつくして、勞ありとある人、殿上人などして、手づから俎にむかひて、まことの有識たち、三四十人して調じ出だしたる、殊にいと清らなり。斯くめでたくて、御琴仕うまつりはてて、曉方になる程になむ、内侍四十人、みな裝束しつらねて、四十の折敷とりて參りける。かく内侍のかみになり給ひぬるすなはち、女官みな驚きて、俄に内教坊よりも、何處よりもく、髮揚げ裝束して、かたに出で來て、この御折敷とりて參る。内侍のすけ賄し給ふ。そのすけ、いとやんごとなき人なり。上、仕うまつり給ひて、源氏親王たちの御子にておはします。源氏の女なり。かくて、皆この内侍のかみの御許にある大人、童べなどに、いと清らにて物賜ふ。

かゝる程に右大將のおとゞ、まかで物參りなどする程に、我が妻と知りはて給ひぬ。大將怪しく、漫にて參りけるかなと思せど、その人の御妻子とて、さるおほぞうの中に出で走りてあるに、ことに恥かしからずかく具し給へば、おとゞいや

〈語釋〉
(七)「源氏の女なり」は傍註の紛れ入りたるなるべし
(八)「まかで」衍文歟
(一〇)兼雅は彌々人に心惜く思はるゝ樣になれりと也

〈考異〉
(一)だちの―天下の
(二)まことの―しんの
(三)斯く―かくて
(四)曉方―方」ナシ
(五)内侍四十人―内侍うなる四十人
(六)たちの―たちなどの
(九)かく具し給へば―まとちひ給ふ―かくして。又ナシ

ますく〜に心憎くなり、「かゝる妻持ちたる人、いかに他人をみむ」と(一)后宮よりはじめ奉り、そこばくの人思ほす。(二)げにはた、みめ容貌よりも、うち出だしたる才、産み出だしたる子などを見るに、いと世の常の人ならず見え給ふ人なれば、かへりて面目ありと、(三)昔より聞召しかけて、つねにとはせ給ひ、今にてもおほし離れで訪はせ給ふものを、かくてさふらひ給ふに、宣ひかくる事もこそあれ、と心は空におぼえて、この殿の政所の別當左京大夫橘元行の、北の方の御送に參りたるを召して宣ふやう、(四)「この里の、にはかに女官の饗し給ふべかめるを、かの三條に、たゞ今まうでて、さる心設せられよ。必ず送りに人々ものせられなむ。女官の著くべき方、垣下のをとこの著き給ふ所など、清らにしつらはせむ」元行、「御在所は、この相撲にこなた勝ち給はゞと、しつらひさふらふ。御饗のことなどは、此度はかねて心して仕うまつりつれば、何でふ煩も侍るまじ」おとゞ、(五)「されど、相撲に勝たむ設にこそあらめ。これは、斯く俄にらうある宣旨にてあること

(語釋)
(一)以下(一)の心
(二)「ありと」は「あれど」
(三)
(四)饗應女をいふ

(考異)
(一)持ちたる―持たりたる―持たりたりける

なるを、女の饗などのこと、いと清らになむせまほしき。(一)饗のこと、心殊にあるべし。いはんや、只今の女官どもなり。やむことなきすけなど、はたものし給ふを、用意せむ。宰相中將もものせむとすれど、こゝにまかでられむに、無くては悪しかるべければ」などいと委しく宣ひて遣はしつ。(二)

かゝる程に、上はた、いかでこの贈物、いとめでたくしてしがな、と思ほして、(三)左のおとゞに宣ふ。朱雀「この内侍のかみまかでむに、いかで興あらん贈物してしがな、と思ふを、さる心もなく、俄なることなれば、え何でふこと無からむが、いといとほしきこと。藏人所、内藏寮のわたりに、すこし今めき、勞あらむものは取う出られなむや。この事ものせさせ給へ。これ有心の族にてはんべる、うるさき人なり。心してものせさせ給へ」と宣ふ。(五)后宮、仁壽殿なども、いかでか、聊かなりとも物せむ、など思ほす。(六)

かゝるほどに上、内侍のかみに物語し給ふついでに、朱雀「今宵御許にさふらふ人

(語釋)
(一)仲忠も用意の爲に先に歸らせたけれど
(二)母の退出に仲忠無くては困るべければ留めおく
(三)
(四)朱雀の心
(五)誤說あらむか
(六)贈物を饗應女にやりたしと

(考異)
(三)いと―ナシ

のなかに、内侍仕うまつるべき人はありや。この頃、上の内侍仕うまつるべき人の、一人なむなき。すこし物など知りて、さてもありぬべからむ人、たうばりになさせ給へ。やがて其處に參りなどし給はむに、後見もせさせ給へ。すべて女官のことは、何事も御心のまゝにを。昔よりかやうならましかば　今は國母と聞えてましかし。別いても、仲忠の朝臣ばかりの親王なからましかし。よし、ゆく末までも、私の后に思はむかし。時々なほ參り給へ。御休所は、願にしたがひて、清涼殿をもゆづり聞えむ。自らは屋陰に住むとも、御願の所はものせむ。さてさふらはるとも、人悪しとはものせじを。なほ然てものし給へ。右大將の制せむもあぢきなし。今はそれにも、な隨ひ給ひそかし。さても怪しうはあらじ。ねたうと思さむやは。それには、なつゝみ給ひそ。かくて所をばさてのみやあらむ」内侍のかみ、俊陰女「何かは、さふらはむを、制する人の侍らむ。すゞろに侍らはどこそあらめ」上、朱雀「御許だにものし給はゞ、何か然らむ。かくれたる所こそ、かく物

〔語釋〕
(一)參内の節の世話も其人にさせられよ
(二)兼雅が妬く思ふ事はあるまじ
(三)誤あるべし

怖はすれ。志むかしより更に譬ふるものなく多かれば、なほさて思ひてあれど、今はたなほ然てのみはえあるまじきを、天下に、かく急ぐ志のかたくありとも、里にものし給はむに、はたえものせじを、こゝにものし給はゞなむよかるべき。「やがてもさふらひ給へ」と聞えむとすれど、さまぐに過し難きことなむ。この月には十五夜に必ず御迎をせむ。この調を、かゝることの違はぬ程に、必ず十五夜に、と思ほしたれ」内侍のかみ、俊陰女「それは、奕耶姫こそさふらふべかなれ」上、朱雀「こゝには棚機おくりてさふらはむかし」内侍のかみ、俊陰女「子安貝は近くさふらはむかし」上、いかでこの内侍のかみ御覽ぜむと思すに、御殿油、ものあらはにともせばものし、如何にせましと思ほしおはしますに、螢、おはします御前わたりに、三つ四つつれて飛びありく。上、これが光に、物は見えぬべかめりと思して、立ち走りて、みな捕へて、御袖に包みて御覽ずるに、あまたあらむはよかりぬべければ、やがて、朱雀「童べやさふらふ。螢少しもとめよや。かの文思

〔語釋〕
(一)誤脱あらんか
(二)自分が尋ねゆく歸にはゆくまじければ
(三)「給はゞ」は「給はん」の誤歟
(四)此儘禁中に留まり給へと
(五)こゝの問答は竹取物語によりていへり
(八)濃山ならば十分燈の代りに出來そう故
(九)車胤の故事
(考異)
(六)かしーナン
(七)ものーナン

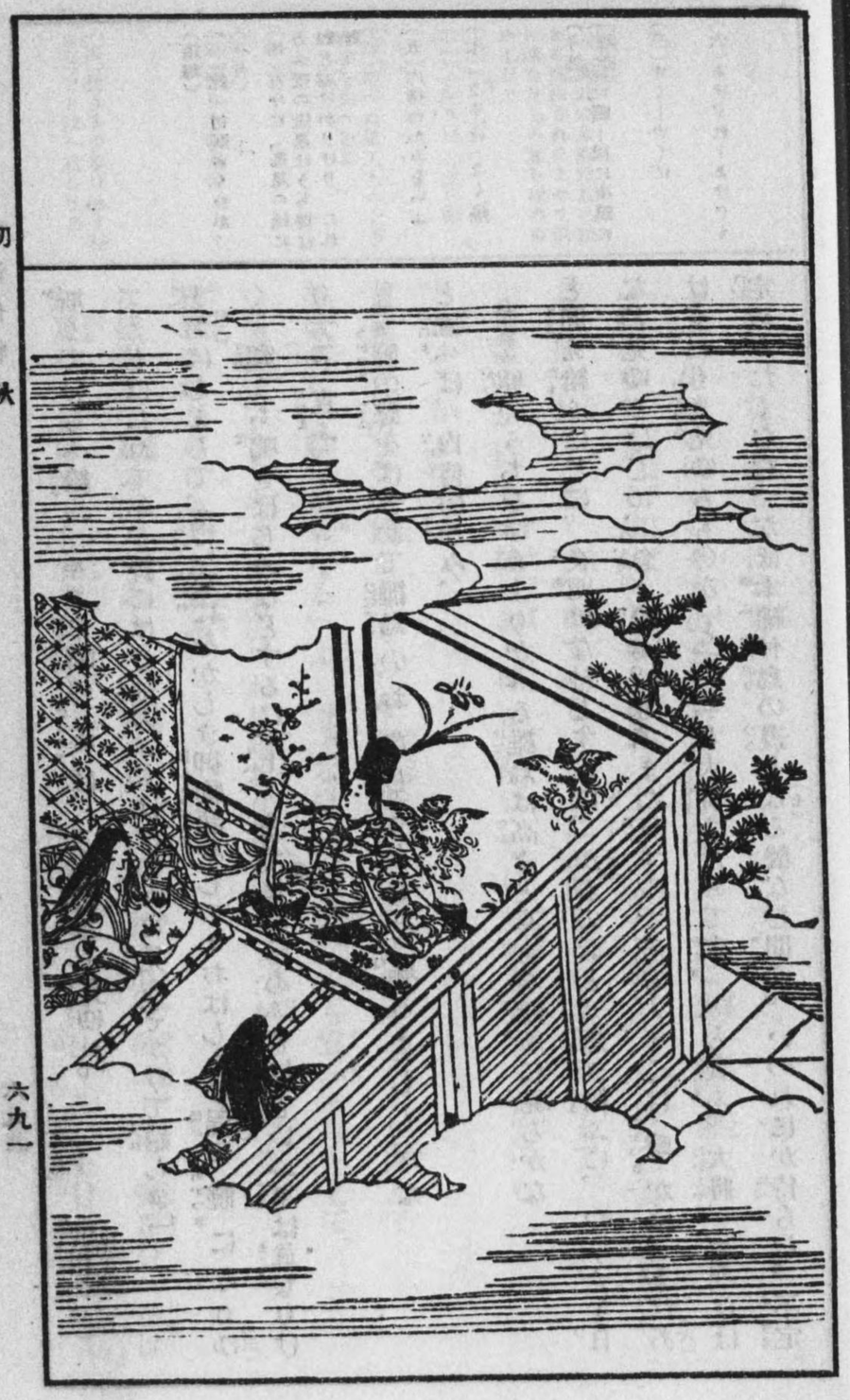
ひ出でむ」と仰せらる。殿上童べ、夜更けぬれば、さふらはぬうちにも、仲忠の朝臣は、承り得る心ありて、水の邊、草のわたりにありきて、多くの螢をとらへて、朝服の袖に包みて持て參りて、くらき所に立ちて、この螢をつゝみながら嘯く時に、上、いととく御覽じつけて、直衣の御袖にうつし取りて、つゝみ隱して持てまゐり給ひて、内侍のかみのさふらひ給ふ几帳のかたびらをうち懸け給うて、物など宣ふに、かの内侍のかみのほど近きに、この螢をさしよせて、包みながら嘯き給へば、さる羅の御直衣にぞたど包まれたれば、殘る所なく見ゆる時に、内侍のかみ、女「怪しのわざや」とうち笑ひてかく聞ゆ、

女衣うすみ袖のうちより見ゆる火はみつしほたるゝ蜑やすむらむ

と聞え給ふ樣、めでたき人の物など言ひ出だしたるさらなり。し出したる才など、はたいとめでたく、心にくき人の、その容貌はた世に類なくいみじき人の、さるらうあるものの光に、ほのかにたとふべき人なく、めでたく御覽ずること限なし。

（語釋）
（二）女の容

（考異）
（一）包みて持て―包みてとく持て



斯くていらへ給ふ、朱雀年頃の志は、これにこそ見ゆれ。

しほたれて年も經にける袖のうらはほのかに見るぞかけて嬉しき」

上おはしまして、萬に哀にをかしき御物語をしつゝおはします程に、曉になりゆく。鶏うち鳴きはじめなどするに、上、朱雀「まれにあふ夜は」といふ事は眞なりけり」など宣ふ。

朱雀曉の聲をばきかで雛鳥のおなじとぐらに寐るよしもがな

と宣へば、内侍のかみ、

俊陰女卵のうちをゆめよりかへる雛鳥は高きとぐらを餘所に見るかな

と聞え給ふほどに、夜明けなむとするに、かんのおとど急ぎ給ふに、やう〳〵日など見ゆるほどに、急ぎ給ふ。朱雀「また見ずや。そも〳〵こは曉かは。まだあけぐれも光見ゆるものを」とて、「右大將さだめて宣へ」と宣ふ。大將、兼雅「なほ定めがたくなむ。なほ木綿付鳥の畫となる聲なむ聞ゆ。いづれにか侍らむ。不定

〔語釋〕
(一)此一句誤あらむか
(四)古今に「彦星の稀にあふ夜の床夏はうち播はねど露けかりけり」これ歟
(五)内侍のかみをいふ
(七)「なる」は「なく」歟
〔考異〕
(二)程に曉—程に夜曉に
(三)ゆく—ゆくに
(六)あけぐれ—あけぐも

になむ、たゞ今もおぼえ侍る」とて、

兼雅しの〴めはまだすみのえかおぼつかなさすがに急ぐ鶏の聲かな

これをなむ承り煩ふ」と申し給ふ。上、うち笑ひ給ひて、内侍のかみの御許に、朱雀「聞き給へ。かく人の申すめる。こゝには聞きなむまさる」とて、

朱雀ほのかにも木綿付鳥と聞ゆればなほ逢坂を近しと思はむ

と宣ふ。かんのおとど、

俊陰女「名をのみは頼まぬものを逢坂の許さぬ關は越えずとか聞く

なほふたうになむ有なる」上、朱雀「なほ、いで効なくも宣ふかな」とて、

朱雀「頼めどもあさかりければ逢坂の清水もたえて結ばれぬかな

相思されざりけり」と宣ふ。

なほまかで給ふ。左のおとど、藏人所より、蒔繪の御衣櫃二十に、臺覆ひ、枕はた更にも言はず。作物所の預り仕うまつりけるを、なほ仕うまつりける上手して

〔語釋〕
(一)逢坂は木綿付鳥に縁ある處故それによせて君に逢ひたしの意をほのめかしたり
(二)ふたうは「不定」歟
(四)抱への細工人の上手が手を加へたる
〔考異〕
(三)預り—物をつくして
(五)仕うまつりける—仕うまつり添へ給ひける

（語釋）
（一）誤あちむか
（三）「なむ」は「など」歟
（四）以下正頼の心
（七）「ひとりは」歟

（考異）
（二）とゝのへて―「て」ナシ
（五）更に、〳〵せじ―更にせじ
（六）何れか―いつか
（八）それ―その
（九）なきを―「を」ナシ

仕うまつらせ給へりける御辛櫃どもに、萬のらうある物、繚の綾つきめでたきは、これがたばかりなむ、錦などの面白きは、これが覆にと、年を經て擇りとゝのへて調じ給へる物も、たゞこの御料になむ。それに、藏人所にも、すべて唐土の人の來るごとに、唐物の交易し給ひて、のぼり來るごとに、綾錦なむめづらしき物は、この辛櫃に擇り入れ、香ら勝れたるは、これに擇り入れつゝ、やんごとなく警策ならむ事の爲にとて、こそ、櫃十かけに包みて、藏人所におかせ給へるを、年頃、にはかに警策ならむ折に、とて調ぜさせ給ひてあるを、天の下、今宵の御贈物より越えて更に〳〵せじ、これより何れかあらむ、一つは俊蔭が女なり、男は右大將といひて、名だたり、し出だすわざ、俊蔭が世の琴なり、天の下これより越えたる心にくさ、いつかあらむ、これを今宵の贈物にせむ、勘當あらじ、など思して、それ十かけ取り出でられ、今十かけの御衣櫃に、内藏寮の絹の限なきを擇り出だして、五かけの辛櫃のうへに、五百疋いみじき限り、今五かけには、

（語釋）
（二）當時名工の名なるべし、一本「しつかはのたかつね」
（四）「うちぎ」歟
（六）下敷きの布
（八）左樣な立派な贈物の中に我々風情の贈物は無用なりとて

（考異）
（一）ばかりひろき―ばかりのひろさ
（三）御衣―さも
（五）頓に―ナシ
（七）清らなり羅を―清らなるろを

疊綿の、雪の降りかけたる樣なるが五尺ばかりひろき五百枚擇り入れて、かの藏人所の十かけには、綾錦、花紋繚、色々の香は色をつくして、麝香、沈、丁子、香も沈も、唐人の持てわたる度毎に擇りおかせ給へる、くら人所の十かけ、枕、臺覆、更にも言はず、いといみじくめでたくて十かけ調へてさふらひ給ふ。后宮よりの御贈物は、しらかはのなかつねが仕うまつれる蒔繪の御衣箱五具に、御裝束、夏のは夏、秋のは秋、冬のは冬、御よそひ樣々に、いふ限なく清らなり。御ぞどもは、形木のにもあれ、また染めたる色も限なし。唐の御衣、御うはぎなど、言へば更なり。珍らしき紋に織りてこれも、斯かる用もこそ頓にあれとて、萬にめでたくて設け給へるなりけり。これをなむ御箱どもに入れ給ひて、入れかたびら、包などいと清らなり。羅を入れかたびらにして、綺の緣の色の、海賦の紋を、また包にしたり。みな、唐物どもをしたり。又、女御たち、そこらの御中に、仁壽殿のみなむし給ひける。「さる切なる物の中には」とて、こと君だちは取う出たまは

〔語釋〕
(一)「所」は「に」の誤歟
(三)銀線なるべし
(四)誤あるべし
(五)「おもてよくかく」は「おもてにも」歟

〔考異〕
(一)物世の―物は世の

ず。今宵の内侍のかみの御贈物、(一)世の中にかしこき人え取う出たまはねど、仁壽殿は、さる大將殿のいつき女といふ所なむ、さいへど取う出給ひける。(二)銀を透箱に組まれたる、組、目いと面白く、一具には秋の山を組みする、野には草花、蝶、鳥、山には木の葉のいろ〳〵、鳥どもすゑなどしたる樣、いと面白し。おなじき山の心ばへ、いと勞ある組みする一よろひには、夏の山を、山には緣の木の葉、鳥ども囀りあそべる山河の心、水鳥の居たるさま、木の枝に虫どもの住みたるなど いとめでたくなまめき、珍らかに、その山里の人の住みたる心ばへなど組みすゑたる、あらはにめでたし。今一具には、春の櫻など生ひたる島どもなどの心ばへ、舟どもなど、その組いと勞ありて、いと珍らしくをかしき事ども組みすゑたる透箱二よろひ、銀のたかつき、かねの塗物して、そのたかつきの脚にもおもてよくかく勞ある物のかたを、をかしき物の樣など畫いつけて、いと世の常ならず、それに、御よそひ、更にも言はず、いといみじくめでたくて、夏冬の裝を透箱に

〔語釋〕
(一)誤あらんか、「に」を「子」とかける本もあり

〔考異〕
(二)一つ―二つ

入れて、その敷物、上のおほひ、上のくみこせられける樣、いとらう〳〵しく心深し。今一つには、おほん髮の調度、するびたひよりはじめ、笄子、元結、おほん櫛どもなど、そのくさとも言はずめでたくて六つ、たかつきなむまうけ給へりける。

田鶴の村鳥　一名沖つ白浪

梗概

㊀ 朱雀院正頼に涼に妻すべき女の事を仰せちる、㊁ 正頼夫婦聟選みの相談。㊂ 仲忠朱雀院の女一宮を娶る。涼正頼の第十女今宮を娶る。㊃ 八月十五夜正頼聟君たちを率ゐて參内す、仲忠、涼、御前にて琴を彈く。季明、正頼、涼、仲忠、行政等昇進。大臣の大饗。㊄ あて宮より女一宮に消息す。仲忠夫婦あて宮の嘱をす。㊅ 兵部卿宮、正明、行政、藤英四人正頼の聟になる。實忠のみならず。㊆ 藤英の栄華。舊恩に酬ゆ。㊇ 正頼、仲頼、法師に法服を贈る。

六月ばかりに、内裏の帝、仁壽殿に渡り給ひて、大將の女御の君と御碁遊ばしなどするに、大將のおとど參り給へり。上おはします、とて、隱れたる方にさふらひ給ふ。上、召し出でて、物など宣はせて、朱雀「暇文出だされて久しくなりぬ、と聞きつるは何事ぞ」大將、「侍り所にほと〳〵しく侍りつるを、見給へあつかひてなむ」上、朱雀「更に聞かざりけり。先つ頃「見にまかでむ」とありしを、例の里住せられまほしき時は、里になむ惱み給ふと、此處も彼處も物せらるれば、身にも此の度は許し申さどりつるは、眞にこそあめれ。すべて、空言しならはし給へる

㊀ 朱雀院、正頼に涼に妻すべき女の事を仰せちる

〔語釋〕

(一)朱雀院
(二)仁壽殿女御
(三)正頼
(五)暇暇願
(六)仲澄の大病・「侍り所に」は「侍從の」の誤歟
(七)仁壽殿が言ひしを
(八)「身にも」は「とみにも」歟
〔考異〕
(四)宣はせて―宣ふ
(九)あめれ―あれ

〔語釋〕
(一)仁壽殿母女一宮
(四)涼にあて宮を與へんと約せし事
(六)涼にやれとの宣旨
(八)東宮へ奉れと
(九)今宮
(一〇)東宮へ奉るも涼へやるも
(一一)涼
(一二)「おしき」は「をかしき」歟、かのあて宮を涼にと約束せしは當夜外に然るべき祿と思付かざりし故の事なりと也
(一三)今宮

〔考異〕
(二)さふらふに—侍るに
(三)など—ナシ
(五)には—ばかりは
(七)宣旨なかりし前より奉れと仰せられしを斯かる—ナシ。又「宣旨なかりし前より」ナシ

罪にこそあれ」大將、正頼「彼處にも「殊なる事なくば、なまかで給ひそ。參りまかでするも煩はし」など宣ふを、如何なれば然侍らん。若しさふらふに効なき心地やし侍らむ」帝、うち笑ひ給ひて、朱雀「けぶりの譬も有れば、然も知らずかし。なほ涼仲忠等が祿は如何にぞや。など涼が本意の違にたる心地のする」大將、正頼「今此の八月ばかりにとなむ思う給ふる。涼の朝臣には、しか思う給へしを、東宮より宣旨なかりし前より、奉れと仰せられしを、斯かる宣旨なむあると、聞召して、「猶參らせよ。その由は奏せん」と仰せられしかばなむ、參らせ侍りしを、其の代にと思ひ給ふるものの小さく侍る程に、今まで怠り侍りつる」帝、朱雀「同じことにこそはあなれ。彼の人をこそ、有り難く聞えしか。此處にも彼の源氏を、さしも思はざりしかど、おしきもの覺えざりし夜なりしかばなむ。太子の然物せられむには、いかでかは然あらざらむ」大將、正頼「今侍るもの、彼に劣り侍らず」上、「うるさきことかな。此の度も危しや。「もどきし我ぞ」とか言ふこと」など宣はせて、

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(三)正頼
(四)涼、仲忠
(五)涼
(六)仲忠、「頭」は「藤」の誤
(七)誤脫あるべし、「みこの」ア「えもこの」に作る
(八)仲忠の
(一一)誤脫あるべし

〔考異〕
(二)たち八所—たちは八所
(九)うるせき—うるさき
(一〇)思し—おもはし

女御の君に、朱雀「今宵だにまう上り給へ。常に然聞ゆれど、上わたりをこそ物憂がり給へ」などておはしましぬ。女御まう上り給ふ。

書詞 此處は仁壽殿。女御おはします。御年三十五。御子たち八所まで生み給へり。御たち多かり。帝おはします。御碁遊ばす。大將さふらひ給ふ。

かくておとどまかで給ひぬ。宮、女二「など今までまかで給はざりつる」おとど、正頼「仁壽殿にまうでたりつれば、おはしまして、物宣はせなどしつれば、彼の中將たちの事をぞ宣はせつる。源中將のこと違へたる樣に宣はせつる、いとほしき事」宮、女二「今こそ、劣らず生ひ出でためれば、それをこそ物すべかめれ。頭中將にこそ、女一人とらせて、子出で來ば、琴習はさせむ、と思ひつれ。あるはみこの筋は習はすまじきなり」おとど、正頼「上も然思ほして、御心留めて物宣ふにこそあめれ。うるせき人の幸なりや。同じき御子たちと聞ゆる中にも、心ことに思したりつるを、源氏の中將も、殊に劣らぬ人にしも、容貌も才も、つかさかうぶり

（語釋）
（一）女一腹の娘も大臣上腹の女も　十の君以下をいふ
（二）他の人の聟にせじと
（四）兼雅に
（六）大臣腹の十二の君と十四の君
（八）實忠を我が腹の娘の聟にせんと思ふ
（一〇）朱雀院の女一宮

（考異）
（三）思ふそこそは―思ふちごこそに
（五）げすこそ―そてこそ
（七）をば―は
（九）おはします―もはさふす
（一一）仲忠、朱雀院の女一宮を娶る。涼、正頼の第十女今宮を娶る

も同じごと、唯いさほひ異なるのみなむ、思ふにはあらぬ。すべて、女子の多かるは、爲べき事ぞ多かるや。此方のも彼方のも、殊に良き程になりにたるを、例のこれかれに奉りてむ。如何思す」宮、女二「其處にも如何思す、宜しかるべくば早せさせむかし」おとど正頼「あてこそに物宣ひける人をば外に棲ませじとなむ思ふ。そこそは右大將のぬしに、げすこそは兵部卿の宮に、あなたの二人をば姉に當るをば、平中納言、今一人は源中將にとなむ思ふ」女二「源宰相をば此方にとこそ思へ。あてこその、未だ何心もなかりし時より、志ありて言ひありき給ひしものを、如何に思ひ給ふらむ」おとど、正頼「然らば兵部卿の宮にもかへむかし」など宣ふ。

かくて、極熱の頃は、誰もく〳〵をさく〳〵内裏へも參り給はず　籠りおはします。八月になりて、大將殿の御聟取のこと近くなりて、仲忠の宰相の中將に女一宮、源氏の中將に今こその君、これは宣旨にて賜ふ。私にあなたの御腹の十一の君をば

（語釋）
（一）聟に擇ばれたる人々いづれも
（五）我が聟にならむと望まるゝかと思へど
（六）あて宮でなければならぬと思はるゝ人は
（七）仲忠、涼
（八）仲忠の妻になるべき朱雀の女一宮

（考異）
（二）深き―深く
（三）聞き―聞え
（四）いとなく―いはなく
（九）御座所を―御座所に

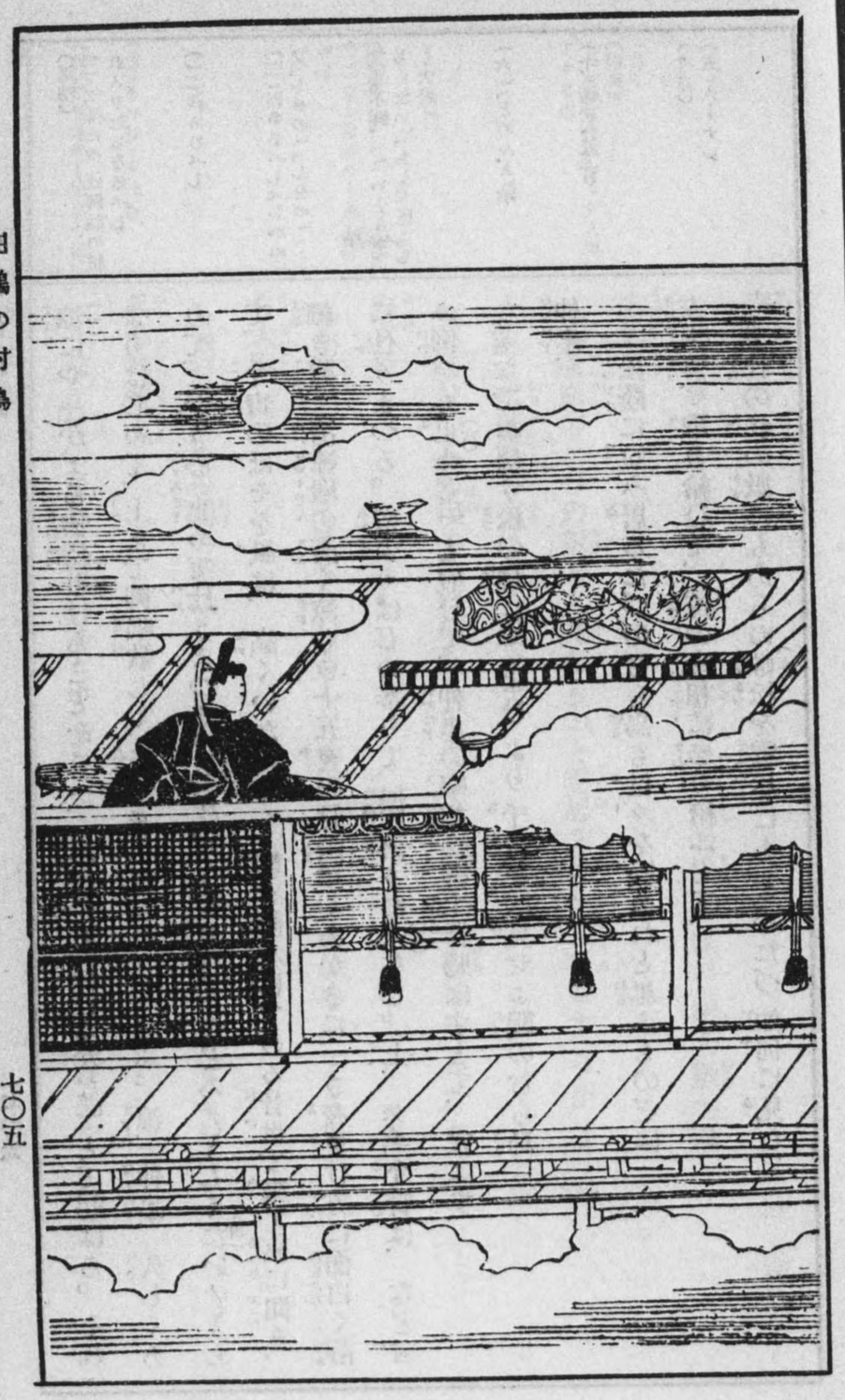
兵部卿親王に、十二の君は平中納言に、こなたの十三の君をば右大將の主、十四の君は源宰相にと思して、御方々よりはじめて、御調度、御裝束、上下仕うまつり人まで、かたち清げに心ことに調へさせ給ひて、皆御消息聞え給ふ。ある限の人更に聞き入れ給はず。誰もく〳〵、あて宮の御方に、深き志ありき、參り給ひて程もなく、他心ありとや思ほされむ、など思す中に、源宰相は、かけても聞き給へば、いとなく悲しと思ほす。おとど、宮に、正頼「此の人々皆心ゆかず思しためり。何か然あらむを強ひても申さむ。あてこそに物宣ひし人々は、此處にあらむ　と覺すかと思へども、彼處ならぬをば否と思すなるをば、いかでかは、數多の人々に、一人をば奉らむ。さて此の二人の宰相たちをば、天下に宣ふとも強ひ申すべし。内裏より、日を取りて下し賜はせて、責めさせ給ふことをば、はかなき私事にて破るべきにてはあらず」とて、一の宮の住み給ひし中の大殿を造りみがき、御座所をしつらはれたること、綾錦どもして飾り、さふらふべき人、皆髪長く、

かたち心ばへ定められて、八月十三日に聟取り給ふ。中將たち、心にもあらで聟取られ給ひぬ。

十五夜の夜、三日に當るに、其の夜、内裏より大將殿に、「其の婿君たち、率て參れ」とあり。驚き給ひて、宰相、中將たち、上達部、御子たちひき率て參り給ふ。御前にある限りさふらひ給ふ。皆御物語して、御遊びなどし給ふ程に、内侍のかん(一)の殿より、宰相中將(二)の小さくより習ひ、内侍のかみに俊蔭も習はしょほそを風を、「留めさふらはれたる手やある」とて奉(四)れ給へり。右大將殿取り次ぎて、兼雅「里より斯くなむ(三)」とて取らせ給ふ。仲忠、「げに留むべくこそ侍りけれ」とは聞ゆるものから賜はりぬ。かくて涼の宰相の許に、彌行が唐土より持て渡りたるなん風のさまの琴に三千年と言ひて、はし風と等しき琴あり。それを紀伊守の北の方、里より種松を使にて、「忘れ給ひにたらめど、今宵は思し出づや」とてなむ奉られたる。左衛門督の君とり次ぎて、「里より斯くなむ」とて奉り給ふ。

(一)俊陰女
(二)仲忠
(四)仲忠に

(三)留め―忘れ
(五)のさまの―やうの
(六)はし風と―ナシ
(七)なむ奉られたる―奉れたり
(八)奉り―參らせ



（語釋）
（一）「涼にや」は傍註の紛れ入りたるなるべし
（二）誤あるべし
（三）誤あるべし、「しかの」又「しせの」「しをの」
（四）不詳。「たい〳〵」又「ちくたい」「ちゝ大臣」「ちゝ大將」
（六）「とめんと」歟
（七）姫松は今宮
（考異）
（五）人ーナシ

涼にや「かゝる物侍りけることをさへ、忘れ侍りにけるかな」とて賜はる。それ(一)よりはじめて、上まで御唱歌して、帝、朱雀「遲しや」と宣ふ。涼、仲忠、久しくありて、かう心止めて仕うまつる。しかのなむ風は、おどろ〳〵しくたい〳〵し(二)て、今宵のほそを風は、高くいかめしく、響き靜かにすめる音出で來て哀に聞え、細き聲、清涼殿の清く涼しき十五夜の月隈なくあかきに、さ夜更け方に面白く靜に仕うまつる。帝よりはじめ奉りて、涙落さぬ人なし。上、朱雀「今宵は、など言ふ例をも止めじ」と宣ひて、仲忠の宰相に御土器賜はすとて、宣はす、

朱雀なでおほす松の林にこよひより千世をば見せよ鶴のむら鳥

仲忠、

松蔭に竝み居るたづのむら鳥も世々を經たれと思ふものぞは

左大將、取り給ひて、涼の宰相に參り給ふとて、

正頼住の江の數にもあらぬ姫松を雲居にあそぶたづ如何に見む

（語釋）
（一）己を人數ならずと卑下する也
（考異）
（二）あしたづのーあしたづは
（三）そへむーうつむ
（四）知りきやー知るやは

宰相、

涼　長き世をゆづる鶴こそ數知らね岸の松をばいかゞ數へぬ

右大將、

兼雅　蘆原のたづの數とも見ぬものを雲居ちかくも聲のするかな

とて、式部卿の宮に參り給ふ。

式部　結びつる岩根の松は年をへて涼しくのみも思ほゆるかな

左大臣、

季明　姫松をねたく見るらむあしたづの己が齡におひや增すとて

右大臣、

兼雅　いはふめる鶴の卵はこよひよりかへる〳〵や千世をますらむ

兵部卿親王、

なよ竹の茂れる宿にまとゐしてたゞ世にそへむ數は知りきや

民部卿、

もろともに千世をぞあまた數へつる磯なる鰒もかたく見るまで

など宣ひて、御遊びし給ふ程に、夜いたう更けぬ。帝、朱雀「斯くこゝに御文ある(一)とも知らで、里より待遠なる心地せらるらむものを、其の罪代には、よろこびをしてよ」と宣ひて、左大臣は太政大臣に、右大臣は左大將、(二)右大臣には左大將、(三)大納言には左衛門督、中納言に涼、仲忠、權中納言には忠澄、左大辨に諸澄、宰相(四)に祐澄、宰相中將に行政となされぬ。九人し給へるよろこび、七人はつらねて右大臣殿にまかで給ひぬ。藤中納言、(五)(六)先づ右大將(七)のぬしに悅び申し給ひに、二條の大路より、三條殿にわかれ給ふ。左右の大臣よりはじめて、御車靜かに促しとどめて待ち給ふ程に、父大殿まかで給ひて、今宵のことなど聞え給ふ程に、中納言拜し奉り給ふ。父おとど、兼雅「何か更に」など宣ふ。中納言、仲忠「思はずにかゝる悅びの侍るをなむ」おとど、兼雅「其がいと嬉しきこと」など申し給ふ。中

(語釋)
(一)誤あるべし
(二)季明
(三)忠雅
(四)清正
(五)仲忠
(七)兼雅

(考異)
(六)藤中納言―かくて中納言

納言、仲忠「さふらはむとするを、これかれ車止められたればなむ」とて、急ぎて出で給ふに、(一)内侍のかんの君、(二)嬉しきにも先づ悲しく思さるれば、おとどにかく聞え給ふ、

後隆女身を棄つと思ひしものを岩の上の松の種ともなりにけるかな

おとど、

兼雅思ひ出でて木高き松を見る時は身をすてたるも嬉しかりけり

いみじく思ほえしも、今日なむ慰みぬる」と聞え給ふ。

畫詞　此處は右大將殿。おとど、かんの君物語し給ふ。大人三十人ばかりさふらふ。

かくて藤中納言待ちつけて、大殿に、七所ながらつらねて參り給ひぬ。かくて北のおとどの東表に、(三)宮の御前に竝立ちて、拜み奉り給ふ。宮、女二「いと畏し」と聞え給ふ。おとどたち、「今日の悅びは、此方にのみなむ聞えさすべき」とて皆

(語釋)
(一)此儀此處に留りたく思へど
(二)女一宮、正頼妻

(考異)
(三)給ふに―給へり

入り給ひぬ。藤中納言、源中納言、けうのかたにて物参りはじむ。誰も〳〵未だ見え給はず。おもの参りたる儀式、清らになまめきたり。かくて藤中納言は靫負の君を御使にて、「唯今なむまかでつる。悦びなども聞えてしがな。わたり給ひぬべしや」など聞え給へり。宮、女二「悦びは此處にも嬉しくなむ。唯今、惱ましくて」など聞え給へり。中納言、仲忠「常に斯くのみ宣はせむずらむな」とて太政大臣の御大饗の所に、左右のおとどよりはじめて参り給ひぬ。翌る日殿にて、左のおとど大饗し給ふ。主のおとどもし給ふ。面白くいかめしきこと言ふばかりなし。かゝる程に、藤中納言は左衛門督、非違の別當かけ、源中納言は左衛門督かけつ。藤中納言は、中のおとどにすみ給ふ。帝、殿の御いたはりにて、豐にて經給ふ。源中納言は、他町おもてに、金銀瑠璃、あや、にしきして造り磨きて、七つの寶を山と積み、上中下花のごと飾りて、あるが中にいきほひて住み給ふ。かくて一の宮も今こそ君も、御容貌も、し給ふわざも、あて宮にことに劣り給はず、

〔語釋〕
(一)仲忠、涼
(二)誤あるべし
(三)妻の女一宮に
(四)忠雅、正頼
(五)正頼邸にて
(六)正頼
(七)撿非違使別當
(一〇)朱雀と正頼との合力によりて
(一二)仲忠の妻
〔考異〕
(八)源中納言は—「は」ナシ
(九)かけつ—かけつかくて
(一一)積み—積みあげ
(五)あて宮より女一宮へ消息。仲忠夫婦あて宮の噂をす

めでたく清らに、誰も〳〵御志深くめでたきものから、なほ彼の中納言たち、いかめしくもてかしづき、帝の居立ちて勞はり、年に二度三度の司召になり上り給へども、宮の君におろかに思されぬること、世に有らむ限は他心なく、志をだに見え奉らむと思ひつるものを、と思ひ歎くこと限りなし。其が内にも、藤中納言は、参り給はざりし時にも、人よりはいらへ宣ひ、宮にても時々聞えさせなどせしを思ひつゝ、心魂もなく歎くこと限なくて、一の宮とも、時々事のついでに、彼の御事を聞ゆる程に、宮の君の御許より、一の宮にかく聞え給へり、

あて宮　久しくなりにければなむ。日頃の物騒がしく思すらむに、靜にと思ひ給へつる程になむ、今までになりにけり。

筑波根の峯までかゝる白雲を君しも餘所に見るは何なり

彼の物懲せし夕暮こそ思ほゆれ。

など聞え給へり。宮見給ひて、打笑ひ給ふ。中納言、仲忠、何事ならむ。見給へば

〔語釋〕
(一)涼、仲忠
(二)あて宮に
(三)あて宮の噂をする
〔考異〕
(四)日頃の—「の」ナシ
(五)何なり—何なる

や」と聞え給ふ。女二「あらずや」とて見せ給はず。手を摺る〳〵、聞え取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふこと昔に劣らず　思ひ入りて、物も言はず。宮をかしと思ほして、御返聞え給ふ、

女一日頃はげに覺束なきまでなりにける事をなむ。いでや　筑波根は、「蔭あれども」となむ見ゆる。(一)

とて、

女一峯たかみ夢にもかくは白雲を今も谷なるものとこそ見れ

と聞え給ふ。中納言、仲忠「彼の御方に物聞えし限り、魂のしづまる時無かりしうちに、いみじき秋の夕暮こそ有りしか。ほのかに見奉りしかば、靜心なく思えしかば、近くだにとて參り來たりし夕暮に、月見給ふとて、御琴遊ばしょに、死に入りて、身徒らにならむこと思ほえず。片時世に經べき心地もせで、せぬわざわざしつべき心地こそせしか。今まで生きてめぐらひ、さる過せずなりにける

〔語釋〕
(一)古今集「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし」

〔考異〕
(二)ならむ―なりなむ

は、斯くてもさふらふべきにこそありけれ」宮、女二「かたしと言ふ樣にもはた」中納言、仲忠「このむねせにといふ心地なむ」(一)とて、仲忠「昔だに人惑はし給ひし御琴、如何になりにたるらむ」(二)宮、女二「手調へぬ琴を手まさぐりにかき鳴しょを、人聞きけりとて、それより彼の君も、此處に物せずなりにしかば、それだに忘れなむしにける」(三)と宣へば、中納言打笑ひて、仲忠「仲忠心地惑はすばかりは遊ばすなりしを誰に恥ぢ給ふにかありけむ。琴の御琴は、嵯峨の院の御子日にだに春日にて遊ばせしよりは、こよなく勝りたりしを、まして今は如何ならむ。いでや　有り難くこそおはすれ。宮もさ思ほし、また人はさふらふとも覺したらず、うちはへまうけ上り給ふを、されば一の宮一條など參り給ふ時は　晝より暮るょまで、つとめてより書までおはしませば、唯一所さふらひ給ふやうにこそあめれ。かょればこそ、萬のよき人徒らになりぬれ」など語り給ふ。かょる程に、内裏より、一宮の御許に、藏人の式部丞を御使にて　長櫃の辛櫃一よろひに　内藏寮のこふく　唐のてうふ

〔語釋〕
(一)未詳「せに」又「けに」
(二)あて宮の琴の伎倆
(六)東宮もあて宮を得難き佳人と思召し
(七)「一の宮」は「四の宮の誤なるべし、嵯峨院の女四宮也。一條は兼雅の父梨壺
(八)あて宮一人
(九)女一宮、仲忠妻
(一〇)吳服歟

〔考異〕
(三)此處に物せず―こゝにもせず
(四)なむしにける―なむしける
(五)ありけむ―あちむ
(一一)唐のてうふく―かうのてこふく

く、綾、錦へいれうきふれうの羅、よき寶ども入れて、御文斯う聞え給へり。

朱雀此の度の唐物は、ようもあらずなむありける。わざとの朝服にはあへぬべ

しや、とてなむ。

とあり。宮御使の藏人に、女の裝束一くだりかづけ給ひて、御返し、

女一かしこまりて承りぬ。かゝる朝服は、賜はるべき人なん侍らざりける。

と聞え給ふ程に、右のおとどわたり給ひて、中納言に、正頼「如何にぞや。御旅棲

は、いかに便なく思さるらむ。居ずまひがらと言ふ樣にや」いらへ、仲忠「斯く宣

はするは、いと畏し」など御物語し給ふ。

畫詞　此處は右の大殿の中の大殿。くみ入れて内に帳立てたり。此處は、大

臣二所居給へり。中納言三所、宰相、左大辨、七所連ねてわたりて、大宮を拜

み奉り給ふ。中納言、白きおほうちぎ一襲、宰相にかいねり一襲、殿上人う

ちかづきて居給へり。宮あこ君、御文奉り給へり。中納言、手を摺りて請ひ

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)今年船來の唐物
(八)誤あるべし

〔考異〕
(二)うきふ―浮文
(四)わざとの―わがことの―わがさとの
(五)ざりける―ざりける
(六)中納言に―中納言を
(七)くみ―くみど

取りたり。大人三十人ばかり、裳、唐衣著て、うなゐ八人、かざみ、うへの袴著たり。御臺四よろひ、かねの御器して物まゐる。御まかなひ宰相の君。是は大饗の所。南の大殿しつらはれて、幄うちわたしたり。是は祐澄の宰相中將、かづけ物は、大いなる箱に入れて持て出で給へり。これは一宮の御方。中納言ものし給へり。言ふばかりなく、誰も〳〵清らなり。宮の御同胞の御子、四所ながら直衣奉りて、おはしましたり。宰相に、左大辨對面し給へり。右近の君などして御帳に入れ奉る。一宮を女御、大宮などして出だし奉り給へり。中納言悅びておはす。上達部皆おはします。左右のおとど、見較べて、御階のぼり給ふ。大納言、中納言、宰相まで參り給ふ。辨、少納言、外記、著き竝みたり。御前ごとに、いかめしう物參りたり。下對の幄の前に、半取に東絹よききぬなど積みて、下につき給へり。此處は三の親王、四五六の親王、若宮に中納言御裝束して對面し給へり。親王と中納言と、碁打ち給へり。四の親王、箏の琴調

〔語釋〕
(一)「物は」の「は」衍文なるべし

〔考異〕
(二)おはす―おはします
(三)上達部皆おはします―ナシ

べて、一宮に奉り給へば、宮、女二「箏の琴は忘れにたりや」など宣ふ。御前に御琴どもあり。

かくて今は私の御事どもをし給はむと、方々劣らずしつらはれて、御調度、仕うまつり人、劣らず設けられて、宮、おとどに申し給ふ、大宮「思ひ志したる人々の、心ゆかず見え給ふを、如何ならむ」正頼「なほ彼の切に物せし人々の「彼處の聞き給はむに、何の良きことと言はじ」とにこそあらめ。此の中納言たちも、聽きげにも思はざりしかど、今は然もあらざめり。消息をせさせむ。さて源宰相をなむ、其の頃忘れまじう聞こゆる。御文にて宣へ」とて兵部卿の宮への御使に兵衛佐の君、右大將殿に宰相中將の君。平中納言殿に左衛門太夫、源宰相殿に右衛門佐を奉り給ふ。御消息、大將殿に、

今宮聞えさせにくき事なれど、思ふ心侍りて、これかれおはしまさすることなむ侍るを、かくなむと聞えさするは如何あらむ。

〔語釋〕
(一)娘をやらむと志したる相手の男どもが不滿足げなるを如何にせむ
(二)兵部卿宮、正明、行政、藤英四人、正頼の聖になる。實正のみならず
(三)あて宮に懸想せし人人
(四)聖になりたるをあて宮が聞きてよくは言はじ
(五)仲忠、涼
(六)實忠、「源宰相なむ其の頃を忘るまじう」歟
(七)誰彼を聖にとる積なるか

〔考異〕
(一)御前に―ナシ

となむ聞え給ふ。源宰相に文書き給ふ、

大宮覺束なき程になりにければなむ。聞えにくけれど、なほ聞えよとあればなむ。先つ頃、此のわたりに宣ふ事ありけるを、承らざりける中に、此處に物せられし人は、身に添へて後見せさせむと思ひ給へし程に、宮より宣はせければなむ、參りにけるを、同じ樣によろしからぬ人侍るめるを、如何にせむと聞えよとなむ。

とて奉れ給へるを見給ひて、宰相涙をこぼして、とばかり物も宣はず。右衞門佐、ことのある樣を委しく聞え給ふ。源宰相久しくためらひて、實忠「今はかく不用の人になりて、宮仕もせずまかりありきもせで、尋ね訪はせ給ふ人もなければ、誰々も對面賜はること難く、世の中を覺束なく思ひ給ふるに、かく對面賜はり、殿の御消息を承るにも、先づ懷しくなむ。昔、何の契かおはしましけむ、宮の御方に聞え初めてしより、老の世にまた悲しと思ひし人、哀と思ひし子のなりに

(語釋)
(一)あて宮に懸想の事
(二)あて宮は手許に置きて我が介抱を賴まんと思ひ居る處へ
(七)妻
(考異)
(三)如何に―いかゞ
(四)久しく―とかく
(五)かく不用の―かうよその
(六)また悲しと―またなしと

けむ方も知らず、魂の靜まる時なく、思ひ給へ歎きし程に、參り給ひにしかば、世の中は限りと思ひて、すべき方も覺えざりしかば、かゝる山里にまかり籠りて、年頃親の御顏も見奉ること難く、世の中のこと餘所に承りつゝ、御悅びとかやもえとり申さず。唯今まかり隱れなむことを、今日や今やと思う給ふるに、いともかしこく宣はせたるを、いでや實忠、徒ら人にて待る、彼の御方、聞召してや侍らむ、哀と宣はせぬこそいみじくつらけれ」とて、伏し轉び泣き惑ひつゝ、宮の御返聞え給ふ。

實忠げに覺束なき程になり侍りけるを、畏まりて聞えさするに、いとも畏き仰せ言は、畏まりて承りぬるを、年頃如何に侍るにか侍らむ、世の中に侍らむとも思ひ給はぬを、怪しく今までめぐらひ侍れど、え猶侍るまじく思ひ給へらるれば、御かつけらるべき程無かるべきなむ、返すゞ畏まり聞えさする。いでや、さても、

(語釋)
(一)あて宮入内せられしかば
(二)御昇進の御祝儀も申上げず
(三)あて宮
(四)此句誤脫あるべし

消えかへりそめこし物をおなじ野の花におくとも何か見ゆべき

あなかしこ、昔はさる心もや侍りけむ。

となむ。御使には、土器たびぐ〜参り、御物語などして、綾、掻練のうちぎ、赤色の唐衣具したる女の裝束一くだりかづけて、

實忠君ならで誰にか見せむくれなゐに我がそめわたる袖の色をば

と書きつけ給へり。右衛門佐、

連澄薄く濃く染むべき色をいかでかは人の思ひのしるべともせむ

とて返り給ひぬ。

畫詞 これは源宰相、男のやもめにて、男の童使ひて居給へり。音羽川前より流れて、前廣く、前栽おもしろく、山近く、木の葉時雨に色づきて、草の花盛にて、面白きを、眺めて居給へり。右衛門佐、花の枝に文付けて、宰相に奉り給へり。廣げて見て、思ひ入りて居給へり。物語りして物かづく。

〔考異〕
(一)かづけて―かづく
(二)つけ給へり―つけてかづく
(三)男の―小野殿に

〔語釋〕
(一)「右衛門太夫平中納言の御文奉り給ふ」なるべし
(二)あて宮の
(四)他の姫君を娶る心ありとあて宮が聞かれたらば

〔考異〕
(一)山林にも住みぬべき―山林をも家と住みぬべき

かくて、御使の君だち、一度に返り給へり。皆女の裝束、一くだりづつかづき給へり。御消息、兵部卿の宮よりは、

兵部年頃、思ひとする事ありて、山林にも住みぬべき心地すれど、かく宣はするかしこさになむ、思ひ給へしづまりて、承りぬる。

と聞え給ふ。左衛門佐源宰相の御文奉り給ふ、

聞えさせしことの効なくなりにしより、魂靜まる時なく思ひ惑ひ歎きて、かよる心なむ忘れにて侍る。いとも忝く、かくまでも宣はすることなむ、返す〴〵畏まり聞えさする。

と聞え給へり。右衛門佐、宰相の御文奉り給ふ。宮見給ひて、おとどに見せ奉り給ふ。正頼「是も否とにこそあなれ。怪しの主たちかな」宰相中將、「右大將の申し給へることは、「未だ彼の小くものし給ひしより、さる志ありて聞えさせしを、參り給ひて程もなく、さる心ありと聞き給はむは、いとはかしかるべき。誰も誰

も、世に經給はむ限り、御志をだに失はでであらむ」となむ宣へる」右衛門佐、「源宰相はかく宣へるなん。(一)殿造ありさまを見給へるに、涙惜まずなむ侍りつる、さばかりめでたかりし人の、其の人にもあらで」申し給へる事ども、片端より聞え給ふ。おとど、宮よりはじめ奉りて、そこばくの君だち、涙落し給はぬなし。おとど、正頼「いとほしき事かな。あたら人を。太政大臣も、さやうにや思すらむ。「實忠顧みよ」としばしば宣へば、かく物するを如何はせむ。此の代には、季英の右大辨を物せむ。彼の人見たる所あれば、納言、宰相にもなりぬべき人なり。右大將の御代には、良中將を物せむ。宰相中將に消息せよや。今少しはなちてむ」など宣ふ。大宮、源宰相の御かへり事きこえ給ふ。

おく露のなかにも色と見えしかばおなじ枝にと思ふばかりぞ
哀れに承りしかば、忘れ聞えさせぬぞや。

など聞え給ふ。

(語釋)
(一)誤あるべし
(三)實忠の父季明
(四)「宣へど」歟
(五)誤あるべし
(六)「色と」は「ふかく」歟
(考異)
(二)殿造―ナシ
(七)聞え給ふ―聞え給ひて

かくてあなたの十一の君を兵部卿宮に、十二の君をば平中納言殿に、こなたの(二)十三の君をば良中將行政に、十四の君をば右大辨季英と、八月二十八日にあはせつ。三日の夜四所ながら對面し給ひて、御前ごとにかづけもの、例に劣らず、豐にいきほひたり。

藤英は右大辨かけづかさ、右近少將、式部丞、文章博士、東宮の學士、内裏、東宮、(三)院の殿上を聽されたり。(四)親の時より敵ありと申すによりて、少將はかけさせ給へるなり。身の才唯今類なし。宮よりまかでさせて、人に文讀ませなどする程に、秀才四人參れり。主、物語などして、藤英(五)「如何に宣旨下りにたりや。いつか、出で立ち給はむとする」秀才、「宣旨は承りにき。此の頃出でてまかりなむと思ひ給ふるに」藤英「げに疾く出で給ひなむこそよからめ」秀才「それを、此の頃暇なむなき。史記のことをもそへ、など仰せらるゝに」藤英「此の史記のかうじよも、今まで仕うまつり侍らず、など仰せらるなりつれば、先づ彼のかうじよのことはてて

(語釋)
(一)大臣上腹の
(二)大宮腹の
(四)兼官
(六)給ふるに「に」衍歟
(七)誤あるべし
(八)講書歟
(考異)
(三)藤英は―ナシ
(五)「まかでさせて」の下「人に」の上に「大學の衆三十人ばかりよき人の子どもの學生ども十人ばかり文など認む。辨の君年四十。いと清げにてめでたし」あり
(七)藤英の榮華。舊恩に酬ゆ

なむ、三らうの上の事は物すべき」など宣ふ。忠遠、大學の丞にてまうでたり。辨の主、「など久しく見參せしめ給はぬことをなむ、季英歎き侍る」大學の丞「そがいとくちをしく侍ること。昨日今日の人の、そくばく出で立ちぬるに、忠遠が今まで侍ること」辨「そがいとほしき事をなむ、此の頃は、藏人のあきためるに、夫れにいかでと思ひ給へて、一日大殿にとり申しょかば、「相勞らむと思ふ心やある」と仰せられしに、ある樣を委しく申しょかば、「今奏せん」となむ仰せられし。今また〳〵取り申さむ。眞なる事ならば、なりもし給ひなむ」忠遠「其の宮仕も、ふがうにては難けになむあめる」藤英「それはな思ほしそ。仕うまつらむ。季英、主の御顧みを忘れ奉るべきかな。公事そうしくて、屢〳〵とり申さねば、疎なる樣になむ」大學の丞、忠遠「甚だ畏し。いとも嬉しく、斯くまで取り申し給ひけること。忠遠、公に捨てられ奉りたる身一つをばさるものにて、老いたる親、小き子妻の泣き悲しぶを見給ふるになむ、紅の涙流れて悲しく侍る」辨の主、藤英「然

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)正頼に忠遠を藏人に任ぜられむことを願ひしに
(三)不學歟
(五)「かた」は「かは」なるべし
(六)誤あるべし、「そうしくて」を「そう〳〵にして」とも「そう〳〵して」ともかけり
〔考異〕
(四)季英―季英が
(七)子妻―さいし
(八)給ふるになむ―給ふるなむ

あるものなり。身の沈むこと悲しきことは、季英より外に知る人なし。さ殿にたばかり物せん。そも〳〵京に年頃物し給ひて、せいとのかたへは如何せしめ給ふ。今年の位祿近江なむ賜はり侍る。未だ取りに遣はさず。守の許に消息物せむ。取りに遣はしてようせしめ給へ」大學の丞、忠遠「甚だかしこし。殿にもきうよう物せしめ給ふらむ。いかでか」など言ふ。藤英「季英、ことに顧みるべき者給はず。身一つはかくて侍れば、私の要殊になし」とて、文書き添へて、券つくり、酒飲みなどして、曉に歸るに、綾、かいねりのうちぎ、一襲、あはせの袴添へて、かづけて還す。かくて大殿に切に申して、藏人になして、悅ぶこと限なし。藏人の裝束一くだり取らせて萬の事いたはる。

かくてあて宮に聞え給ひし人々みな殿にすませ給ひて、參り給ふ、源少將如何に思ふらむ、など思して、法服、綾がさね二つ調じて、宮あこ君に裝束めでたくて、衣の裳に、かく書きて結ひ付く、

〔語釋〕
(一)「生活の手段は」などの意なるべけれど不詳。「かたへは」を「かた人は」ともかけり
(三)用ひられよの意なるべし「よう」は「用」歟
(四)急用歟
(五)「給はず」は「持給へず」歟
(七)正頼の心
〔考異〕
(一)さ殿に―大殿に
(八)正頼、仲頼法師に法服を贈る
(六)など―ナン

〔語釋〕
(二)二條　衍歟
(三)季英
(四)仲忠
(五)誤なるべし、勸學院の雀蒙求を嘲ると同じ意歟

〔考異〕
(一)嬉しさ―嬉しき
(六)はらみ―にんし
(七)御年三つ―ナシ

正頼むすぶ人まつ元結は絶えぬれどかみそりをだにあらせざらめや

源少將、涙を流して斯う聞ゆ、

仲頼元結のくちし涙はかはらねど今日かみそりをうるが嬉しさ

など聞えたり。皆御方々とゝのひて住み給ふ。御わたくしの殿(一)も、廣く面白く、御調度財を、納殿に持ち給へらぬ人なし。一條殿より南、四條より北、壬生二條(二)より東、京極より西は、他人の家なし。殿の御族の殿ばら、まじりも無くあり。藤中納言、右大辨(三)は未だわたくしの家なし。唯大殿に集ひて住み給ふ。

畫詞　此處は東の町。大宮、三條表、中のおとど、一宮の御方。宮御年十七、中納言(四)年二十六。並び給へる男女、玉ひかり輝く樣なり。御臺たてて物まゐる。宮琴彈き給ふ。中納言、打笑ひて、仲忠「つれなくも遊ばすかな」宮、女二「文屋(五)ほとりとか言ふなる」と宣へり。はらみ給へり(六)。東のおとど、東宮の御方。御子たち二所。男御子一所は、立ちてありき給ふ。御年三つ(七)。乳母三人。

〔詮釋〕
(五)正頼の子息たち
(六)藤英

〔考異〕
(一)十五―十六
(二)左大臣殿―おはきもとゞ
(三)二十四―二十六
(四)居たり―居たまへり

今一所は這ひ給ふ。御年二つ。めのと同じ數なり。大人、童多かり。南のおとど、元のごと女御の君の御方なり。北のおとど、宮おとど住み給ふ。東南の町。東のおとど。民部卿の宮の御方なり。西のおとど兵部卿の宮の御方。宮二十七、女君十五、物宣へり。御たち二十人、童しもづかへ數多あり。北東のおとど、左大臣殿(一)の御方。西南、藤大納言(二)の御方。西北の對は、源中納言殿の御方。いま宮十四、中納言二十四(三)。二所物語し給へり。御たちいと多かり。紀伊守參りて、廊の簀子に居たり(四)。中納言の君あひ給へり。きぬ、綿、辛櫃に積みて奉りたり。あなたの君だち住み給ふは、西南の町。中務の宮の御方。西のすみ、平中納言殿の御方。東の對藤宰相の御方。東のすみ良中將の御方。東の中は君たち住み給はず。御たち二十餘人、童、しもづかへいと多かり。これは左大辨の殿の御方。君だち(五)も此の町に集ひて住み給へり。西北の町、右大辨(六)の殿の御方。御帳立てて、几帳、屏風新らしく、よろづの調度清らなり。御衣掛に、色

色の御衣かけたり。臺一よろひして、辨の主物まゐれり。北の方、こがねの御器にて參りたり。年十五。御たちいと多かり。廚子たてて文讀む。殿ばら、宮ばらの君だち、集ひて讀み給ふ。辨の主、宮よりまかでたり。裝束淸らなり。車淸らなり。男ども四十人ばかり、御供なり。大學丞も、おりて跪き居り。辨の主、人々に、片端より文讀ませ給ふ。割籠、すみもの、いと多かり。秀才ども、多にありて文讀む。秀才菅原の別足、大學に色々の文取らす。此處は辨の主入り給ひて、北の方に物聞え給ふ。藤英「今日、宮に參りたりつれば、兵衞の君して、御消息賜はせたりつる。命有れば、かょる折にも逢ふものになむ」とて、大學に參り給ふ。これは女御の君の御腹の四の親王の御方。北の方には、左大臣殿の大君、こと腹の御子、年十六。子一人、男子なり。此處は六の宮の御方。北の方には、民部卿殿の大君、年十四、はらみ給へり。三の宮、御妻なし。八の宮未だ童。これは權中納言。北の方は一世の源氏、年二十八。君だち

(語釋)
(三)誤もるべし
(四)息雅
(五)晳正
(考異)
(一)辨の主―ぬしに
(二)丞―衆
(六)はらみ―にんしん

四所。一所は女、三所は男。太郎君、年十四、次郎君十三。左大辨の北の方は、平中納言殿の中の君、年二十六、男子のかぎり五人。宰相中將の御方、北の方は源氏、年二十三、子二人。左兵衛佐の御方、近江守の娘、橘氏の女、年十五、子なし。左衛門大夫の御方民部卿の宮御女、年十五、はらみ給へり。頭中將の御方、式部卿の宮の學士の女、年二十二、子二人。宮あこ君、未だ童。いへあこ君、同じ。皆、せばけれど、方々しつらひ住み給ふ。町ごとに御門表ごとに建てて、馬車のたつこと、御門に百千ばかり立つ。そこばく廣き殿の中、隙なし。（七）

（語釋）
（一）諸澄
（二）祐澄
（四）顯澄
（六）兼澄
（考異）
（三）子二人―子あり
（五）の女―の女なり
（七）刊本此つゞきに「解のかゝれるを云々」の文七枚あり、これは「梅の花笠」の巻末の文の紛れ入りたるなれば今除く

大正十五年九月二十日印刷
大正十五年九月二十三日發行

有朋堂文庫　字津保物語　上　（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
印刷兼發行者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷所

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

岡山製本

終